

演劇会議

発 言.....	1
なかまの素顔 10.....	2
東リ演運営委員会報告.....	黒 沢 参 吉.....4
ずっしりと重い充実の12時間.....	森 本 景 文.....6
普及は運動の鏡である.....	こばやし・ひろし.....12
■ ブロック特集.....	17
近 畿(橋本依子) 東 海(深沢大助)	
北海道(シボより) 東リ演中部(はぐるま)	
関 東(塚越松雄) 甲信地区(梅津・横山)	
奥 羽(千葉真二郎) 中 国(土屋 清)	
青年団演劇に「テントからの報告」を上演させるの記	
.....	柏 原 武 蔵.....39
岡山戦演集団と交流して.....	安 部 智 律.....44
関西における戦前プロレタリア演劇の研究(4)	
.....	大 岡 欽 治.....48
■ 劇団通信 ■.....	54
■ 劇 評	
ひろしまの冬(合同公演).....	小 松 徹.....64
日本の言論1961(関芸).....	かたおかしろう.....66
漁 港(静芸)神通川(やまなみ).....	萩 坂 桃 彦.....67
第8回「東瀛演」演劇祭をみる.....	山 部 芳 秀.....70
第6回小野宮吉戯曲平和賞決定について.....	73
応募戯曲選評.....	こばやし・ひろし.....75
■ 戯 曲 ■ 白い鴉あるいはころもがえ.....	小 坂 忠.....80

百科事典の
平凡社

東京都千代田区四番町4
振替・東京29639番

イタリア生まれのファブリ・シリーズで名曲名画を!

名曲集 ● 発売中

48 ショパン I

別れの曲ほか 解説 | 野村光一
アルベルト・モツァーティ(ピアノ)

43 ラロ

スペイン交響曲 解説 | 国安洋
アイロン・ローザントウ・アイロンほか

次回配本 3月5日・20日発売

10 バイドゥン I

54 ドウォルジャーク I

名画集 ● 発売中

52 モンドリアン

新しい幾何学的抽象を確立した20世紀後半の絵画の旗手。 解説 | 中山公男

6 テイツァー

イタリア・ルネサンスの盛期を活躍したヴェネツィア派の巨匠。解説 | 辻 茂

次回配本 3月5日・20日発売

60 ベーコン

4 レオナルド・ダヴィンチ



ファブリ世界名曲集

全60巻/各680円 監修=E・レッシェーニョ/野村光一 各巻=ステレオ25cmLP1枚

ファブリ世界名画集

全60巻/各300円 監修=A・マルチニ/富永惣一

言 飛

一月九日十日、静岡県伊豆下田で東り演運営委員会が
ひらかれた。

会場である下田白浜海岸に向けて、駅前からのバスに
乗った私は、ゆるやかな上り勾配を数分の後に、下田港
を眼下に見ることが出来た。

小さな入江を囲んで十数隻の漁船が、正月のおだやか
さをたたえて、いならんでいた。というより、それは活
きているおだやかさである。

私は瞬間的に、ここまで来るまでの車中で再読してき
た、石牟礼道子著「苦海浄土」に登場する、水俣の港が
私の想像もおりまざりながら下田港に重なって、とびこ
んできた。

それは

——水俣病発生後の水俣の港を

「ほとんど残影にひとしく、解けほどけかかった無人の
船たちが黒々」とあり、「いつとこの間に幽霊船のごつ
きやあって」「脊中から汗のすうっとひくごたる」「舟
の墓ばのごたる景色」と書いてある。

水俣には、ここのこの正月の、活きているおだやかさ
はないのである。

大気、河川、海水、農作物海産物など、自然と人間は

西り演・近畿ブロック創造研究会

とき ■ 3月28日(日) ごぜん9時～ごご5時(予定)

ところ ■ 大 阪(予定)

内 容

- 作品のテーマと演技形象とのかかわりについて——
 - 新しい人材をどう育てるか——
 - リアリズムの演技とは——
- などについて、階層別分散会で話しあいます。

加盟劇団・サークル、友好劇団・サークルの積極的参加を望みます。
素材として、劇団未来の「われら兄弟」の演技を中心に話しあいます。
「われら兄弟」の公演は、3月22日(月)PM. 6:15より西宮会館で
行なわれます。

近畿ブロックの仲間はもちろん、その他の地域の仲間の積極的参加
で、創造研究会を成功させましょう!

連絡先 ■ 西り演事務局 大阪府茨木市駅前通り 1-9-21

森本景文 <TEL 0726-23-3539>

東り演3専門部会へ 全劇団の参加を!!

—— あたらしい創造的な経営の確立をめざして ——

(1) 経営部会 3月27(土)・28(日) = 岐 卓

—— 小さな駅の物語・秘密と太陽がほしい! の脚色・白い鴉 —— を素材に
劇団と創作劇の正しいかかわりを探求 ——

(2) 創作部会 4月10(土)・11(日) = 山梨 石和

—— 劇団新人教育の課題と実践 ——

(3) 教育部会 上記創作部会と同日・同会場にて

詳細については事務局より全劇団あてご案内いたします

連絡先 ■ 東り演事務局 静岡市昭府町 289-2

劇団 静芸 <TEL 0542-71-7337>

本来殺し、殺されるような敵対関係にあるのではない。
人間はその生存の為に、大自然のもつ偉大な生産力に
依拠し、それを保護し、或はよりよい関係を保つための
改良を行なったりしてきたのである。

私は、過ぎるほどのこの当り前のことがらを、ことあ
らためてよみがえらせ、「敵対関係」をつくりあげた元
兇が、いま突に、文字どおり日本列島全体を「墓ばのご
たる景色」に臆面もなく塗りかえようとしていることに
事の重大さと、云いようのない怒りをおぼえる。

私たちは昨年、演劇を武器として、日本の演劇史に前
例がないであろう統一行動——日本国民にとって耐えが
たい状況の根元「日米安保条約」廃棄に向けての「70年
演劇行動」の一斉上演という貴重な経験を得た。

私は、私のいいようのない怒りを、この「70年演劇行
動」でつくり上げた、私たちと、観客の広く深い結合、
多くの仲間たちとの結合を基礎に、再び演劇を武器とし
「殺人者」に巾広くたちむかうことで具体化しなければ
ならない。

下田の港が、永く活きているおだやかさをたたえてい
てほしいためにも。

(塚 越)

東り演運営委員会報告

黒 沢 参 吉
(東り演議長)

★ 経営部会

東り演の第一回運営委員会は、七十一年が
けた早々の一月九・一〇日、静岡県下田市白
浜の民宿「いそしぎ」で開催。

三月二七(土)二八(日)

■ 於 岐阜(劇団はぐるま)

参加者は——
鈴木(さっぽろ—北海道) 作間(弘演研—
東北奥羽) 塚越(埼玉—関東) 深沢(からっ
かせ—東海) こばやし(はぐるま—中部)と
黒沢、若尾、山崎の三役、細田、井岡、池永
の事務局員、および萩坂(演劇会議)の一二
氏で、青年劇場(専門劇団G)は公演のため
梅津氏(やまなみ—甲信越)は病気のため、
それぞれ欠席したのは残念でした。

主要な議題は——

(1)各ブロックの活動状況の報告 (2)経営部
会、創作・教育部会その他の実施についてで
すが、(1)は、本誌に西り演をふくめた主要ブ
ロックの報告がの予定なので重複を避け、
(2)についての決定を記すとつぎの通りです。

この部会開催については、多くの要求にこ
たえ、はぐるまを中心に中部Bが開催するも
のに、全体が参加する方針を総会できめてい
たものです。経営の問題を、単なる原則論や
技術論から脱皮させ、劇団と観客の正しい紐
帯をつくるカナメにする立場で、部会の中心
課題とすすめ方のレジメを、これも本誌へ、
こばやし氏に執筆してもらいました。
これを討論の素材に、全劇団の積極的な参
加によって、いま全体がぶつかっている観客
減少の傾向、創造—組織上の動揺などとした
かう具体的な方法論をつくりだしたい—と話
しあわれました。

部会の案内、うけいれ等については、中部
Bで作案のうえ、池永事務局員が連絡の衝に
あたります。

★ 創作・教育部会

四月一〇(土)・一一(日)

■ 於 山梨県石和

この二部会の受入れ、実務体別は、地元甲
府の劇団やまなみがあたる。(同一日時・会
場ですが二つの部会であること、従って一劇
団最低二名参加が基準であることに、注意し
てください)

創作部会では——

(1) 創作として、島源三「小さな駅の物語」
(2) 早乙女勝元原作からの脚色として、作間雄
二「秘密」黒沢参吉「太陽がほしい！」(大
衆性また現代の若者像を描く問題として)
(3) 本誌掲載の、小坂忠「白い鴉あるいはころ
もがえ」(一幕劇の諸問題—応募作品にか
わって)

以上をとりあげて、作者の報告、問題提起
者と上演劇団の発言、全体討論をすすめ、作
品の評価とともに、創作劇不振といわれる現
状を、作者—演出—劇団の有機的な関係をど
うつくり、あたらしい発展をうながすか—を
課題にします。

教育部会は——

すでにいくつかの劇団が実施し、更にいく
つかが開始しようとしている新人教育制度に
関しては、

▽二月八日、これらの計画を実施するため
の事務局会議を静岡でひらく。

ついで、経験と資料を交換し共同して有効な
方法をさぐる目的で、ひらきます。総会では
東西り演の立場での労働者演劇史の編さんと
いう希望もでていますが、今回は青年劇場と
京浜協同劇団が、教育活動の方針—計画—実
施内容を報告し、そのあと第一〇回セミナー
ルの教育分科会の討議を発展させます。

この他に——

あわせてこの部会のしごととして、東日本
各劇団の活動年譜を作成することになり、細
田事務局員がその任にあたるようきめました

▽九月の常任委で実現をのぞまれた、東西
り演と新割人会議との、七〇年代の認識の一
致、協力関係・共同行動の可能性などにつ
いての話し合いは、同会議書記局で活動してい
る青年劇場を窓口で、できれば一月中にひらき
たいとすすめてきましたが、書記局の人たち
が多忙でまだ目途がたつていません。

★ 創作学校
各ブロックでの学校開催を九月の常任委で
きめたが、実施計画はまだできていません。
これには地域内の劇団をつかみきれないブ
ロックの弱さもありますが、より重要なこと
として、運営委員会でも創作学校の課題が明
確になっていない点があげられます。「戯曲
はだれにでも書ける」という極と、しかし「
上演できる戯曲がない」という極を、現実
つなぐ場としての学校は、正しい方針と系統
的な実践がなければ実効は期しえない。また
多くの劇団が書き手と作品をのぞんでいる、
のは事実だが、その実現をどこで果たしたい
—果たそうとしているのか。

中部Bでは創作学校を中止し、六月下旬ひ

らく創作演出部会で、劇団創作を生む姿勢を
どうつくるか—をテーマに討議すると報告し
ていますが、学校開催の論議に先行して、各
Bともこの問題を検討する必要がある、と意
見がかわされました。

四—五年前とは比較にならない困難が、劇
団の内外におしよせているのを、各委員の報
告は感じさせます。自分のところが精いっぱい
いで、他を顧みるユトリもない—といった逼
迫です。

劇団が地域に根をはるこの大切さは、い
うまでもないが、それだけではやはり足りな
い。日本のリアリズム演劇をどう発展させる
のか、総体の運動をどう展開するのか、そこ
にどう責任をもつか—の視点が弱くなって
いないだろうか。ブロック、東り演への結集
が、困難であっても又まだるこくても、そこ
へ向けるばくらの複眼が曇っては危険だ—と
おもいました。

全国的労演や、子ども劇場の運動の展開に
つれて、専門家と地域のわれわれの役割や関
係は、日々あたらしい局面をつくっており、
なるべく早い時期の話し合いと、恒常的な連絡
体制がほしいので、今後も青年劇場を軸に実
現をめざそう、と確認されました。

▽東り演の方針、活動概要を知らせ、加盟
してもらうための資料として、昨年未発行予
定の「しおり」は、現在印刷中で二月中には
全劇団に届く管です。劇団の学習資料に活用
すると同時に、周辺の劇団・サークルにひろ
げ、会議への加盟をよびかけてほしい。

ずっしりと重い充実の十二時間

〔西リ演作家・演出家会議の報告〕

森 本 景 文

(劇団・未来)

ことしの西リ演の作家・演出家会議は、一月一六・一七両日大阪の谷町荘でひらかれました。

集ったのは、福岡生活舞台1、月曜会4、木々の会1、福演1、四紀会2、関芸7、未来3、息吹4、南大阪1、協同劇場1、金融演劇サークル1、個人参加3、和歌山いこら3、京芸3、人形京芸1、劇団橋2、東リ演1の合計一五劇団・三九名でした。

今回の研究会は、七〇年の一年間に西リ演で創作された作品の内から、「ひろしまの冬」と「紀文」紀州 有田柑橋史・一九七〇年」をとりあげ、それを素材に「現代におけるリズム」の追求の道をさぐるかと企画されました。

会は、一六日午後二時半から開かれ、まず「ひろしまの冬」について、作者の上田修さんから創作体験の報告、四紀会の岸本徹明さ

んの問題提起と続き、それに基いて三時半から六時半まで、参加者全員による討論後、夕食。その後、「紀文」について作者の栗原省さんによる創作体験報告、関西芸術座一杉忠さんによる問題提起のち、一〇時過ぎからは、これだけが楽しみで参加した人々もあるという交流会。

翌一七日は、朝九時より「紀文」についての全体討論、午後からは、二本の戯曲の共通点やその違い、問題点を洗いだしながらの討論と続き、それぞれの成果をもって午後四時すぎ各地域へ帰っていった——というのが、大まかな日程でした。

これを読まれる人の中には、研究会の素材となった戯曲についてご存じでない方も多かろうと思うので、まず作品のあらましについて紹介します。

「ひろしまの冬」三幕一五場

戯曲の第一頁には、「『ひろしま』——冬は静かで美しい街です。『観光ボスター』の文句、一九六九年春から——冬にかけて——」とあり、そして、「舞台」は——。小さなビルの地下にあるバー「朱い実」から透視される、非写実的な空間——ひろしまの気分をあらわす。その全体の印象は、みる人により：巨大な鳥籠の中——骨髄を晒して海辺に横たわる廃船——テロルを待つ無人の変電所——など、さまざま想起するかも知れぬが、そのいずれでもなく、多様で、ごてごてとしている。——と書にあります。

被爆体験者である喜早重彦という一人のカメラマンが、友人の広島テレビ局のディレクター杉森明彦とくみ、韓国へ行って朝鮮人被爆者の現状取材し、テレビ放送するところから劇は始まり、それに成功した二人は、八月六日の原爆記念日の特集番組として、「インボンサラム・日本人」を企画するが、放送局の圧力でつぶされる。喜早は虚無的になり東京へでて、商業写真のカメラマンとしてマスコミの泥沼に身をしずめ、その中からもう一度、報道写真の仕事に戻れるかどうか試そうとする。タイレクターの杉森は、営業の仕

事に配置転換されるが、その中でも、重彦の街頭写真展を企画したり、朝鮮人の被爆体験記の出版を試みようとする。一方、喜早の妹千鶴がつき合っている恋人は、朝鮮人の金双春という建築技術者であるが、その恋は破れてしまふ——。日本人被爆者に朝鮮人被爆者をはからませ、日本人として真実に生きるとは何なのかを鋭く問う作品です。

研究会の開かれていた一月一七日は、在日朝鮮人の永住権申請期限切れの日でした。

その日の朝日新聞は、「日韓条約に基づく永住権の申請は、期限切れになった。これで祖国の分裂が日本にも持込まれ、毎日の暮しにまで『三八度線』が引かれることになった。申請をめぐっての対立は、借家からの追立て、親しい間柄が絶交、そして離婚。こどもの遊び仲間にも分裂は及んだ。このつらく、きびしい現実——。」と報じています。

この作品「ひろしまの冬」の中で扱われている素材は重く、日本人にとって、絶対に避けておれない問題のひとつなのだという思いを、その日の新聞により更に大きくされたことをつけ加えておきたいと思えます。

「紀文」二場——紀州有田柑橋史一九七〇年」物語は——、かつて、小作農の伴だった木田文五郎は、戦後の農地開放のち、苦心して畑をひろげ山を買ひみかんつくりの中農としての地位を築く。彼は目先のきく男であり、富農への道を求め、各種の補助金や融資を精一杯たくみに利用しながら経営規模を拡大してきました。しかし、また「現代の紀文」たらんと夢みる木田文五郎（木文）は、実に政治的にも立ちまわり、やがて現在の政治が推し進めている農業「近代化」のもとでは、所詮、彼のような「新興中農」として、富農への道が殆んど閉ざ

れている、という農政の核心をさぐり当てることになる。彼は、農業を妻（その）や息子（文吉）にまかせきり、自らは農協を足場に農業の支配機構にはいっていきこうとする。だが、彼が権力に身をあずけて突走する道は、農民から離反し家庭をも破壊してゆく孤立と敗北の道であった。——と公演チラシにあります。

今、大阪の地下鉄の中吊り広告のひとつに「ミカン・太陽・緑・黒潮の有田○○○○○○○○」という観光ホテルの宣伝文がさがっています。ミカンづくり農民の実態を通して、日本

の総合農政を「紀文」で告発した「いこら」の仲間は、この広告文をどのような気持ちで観たでしょうか。広告文の虚像を見事にあばいてみせたのが、戯曲「紀文」です。

引用が長くなりました。研究会の内容を紹介します。

1、合同公演の歴史

今までに広島では、「河」「拳よ火よ吹け」「芸州世直し一揆」「七〇演劇行動」などの合同公演をやってきて、一定の成果をあげてきた。

2、労演の現状

広島労演は、ここ、二・三年の間に会員をのぼし、現在三千名の会員を擁し、会員の中から、地元劇団の合同で、広島でしか上演できない芝居を例会にとりあげようという企画がだされた。

3、作者の経歴

ラジオ中国でマスコミの仕事をしていたが放送局の合理化で解雇され、「ラジオ中国芸能員労組」の一員として文工隊形式の「列外三名」「ムードのある詩」「のみの話」「モレス教育」などを書き、五年近く斗ってき

た。芸能員労組として、街頭で、舞台のない所で演じ訴えていく為には、寓話・諷刺でいくのが便利であると考えて作品を書いてきたが、その中で、文工隊作品は集会に来ている人達のエリート認識をくすぐるという風な効果しか持たぬという限界も感じてき、シリアスな作品を書きたいと考えていた。

4、作品を書いた動機

(1)、現在の広島市民の五分の一位は被爆者であるのに、原水禁運動などにはそっぽを向いている。その複雑な広島の人間の気持は、広島の人間でなければ描けないという自負。

(2)、映画・テレビ・戯曲で今迄に描かれた被爆を扱った作品は、被爆した人間といえども豊かな人間だと思っているのに、余りに戯画化・単純化されていて不満である。

(3)、芸能員労組の闘いを始めた時期が、ちょうど日韓条約が結ばれようとした時だったので、在日朝鮮人とよく交流し、朝鮮総連の人達に教えられ、高められた。その中で「本当の意味の日朝友好とは何か」を考えつづけてきた。

そこで、今回の作品を、朝鮮人の問題を鏡として書こうとした。

5、上演後の観客の声としては、

ティをどう作品化するかの問題。

○ ルポルタージュとフィクションの関係。

○ 現在の平和運動、労働運動、政治運動を大きな方向としては肯定しながらも、それへの点検をしていく点で、被爆者の問題の複雑さを複雑のまま並べたので解りにくくなる。その比重を正しく測定する必要性について。

○ 広島の実地からでない描けぬ素材を、大胆に戯曲にしていた地域に根ざした活動の評價。

四、「紀文」作者・栗原省さんの報告

1、上演の経過

私たちの有田では新たな農民抑圧政策に対し、全農林というすぐれた労働組合を中心に地区労が母体となつて、いち早く「有田郡市食管共斗会議」が組織され、西日本みかん農民大会動員(愛媛)、中央動員グループフルツ自由化反対署名、食糧管理制度改悪反対などの統一行動に精力的にとりくんできた。

「みかんと米を守る和歌山県農民大会」は、有田食管共斗が県共斗組織との協力で、五月二三日、農民と労働者の力を最大限に統一してとりくんだ大斗争であった。「劇団い

解りにくく、しんどかった。労働者が一人も出てこなかったではないか——という否定意見と、考えさせられた、創造力を刺激された——という肯定意見がなまばらであった。

二、岸本敏明さんの問題提起

1、登場人物のひとりひとりは何をしたのか明らかでなく、行動しようとしているのは、千鶴と双春の二人だけである。主人公のように見える重彦と杉森には行動が感じられない。

2、多幕多場面の芝居であるが、景の設定の必然性が解らない。

3、戯曲を読んで残ってくるのは、朝鮮人被爆者の問題である。行動する朝鮮人被爆者を描かずに、韓国までいって被爆者を観てきた人間が素材になっているが、その人間(重彦・杉森)が行動しないとすれば、この戯曲は問題である。事件・歴史を受けた、感じた受け身の人間を描くという手法が最近はやっているが、その中からは、今日のリアリズムはでてこないのではないか。

4、日朝親善の回復という課題も、説明としてでてくるが、行動として強くつきささってこない。

「こら」が、さきに「呑んだくれ」をつくったとき、名実ともにその成功を支えてくれたのは、この食管共斗に結集する労働者・農民であった。

この大集会は、企画の当初から「こら」の劇を予定し、従って「紀文」の創造は最初から最後まで食管共斗の綿密な協力のもとにすすめられた。

「大集會」は、有田市民会館を埋めつくした労働者・農民(一三〇〇名)によって、生々しい各地報告、美土路達雄氏(農協短大教授)講演、「紀文」上演を主な内容にして完全に成功した。参加者は多くの斗争課題や組織的課題を抱きつつ散会した。

2、創作の動機

山の頂上までミカン山で征服してしまいう間のすざまじさに驚き、その次に有名な七・一八水害の惨状、とくに未解放部落のうけた被害のすざまじさが創作の動機であった。

封建的体制を内側から切り崩す貨幣経済に全面的に依拠し、最初から換金作物として育成されたミカンという作物、しかも紀州藩の強力な保護政策のもとで成長したミカンは、当初から資本主義への志向と封建体制を維持するためという矛盾した要因を運命的に内包

5、ドラマとして面白いと思いつながら、行動として積み重ねてこないことが問題である。

三、「ひろしまの冬」討論の中で

○ 一幕・三幕で主に重彦・杉森によって展開されている被爆の問題をどうみるかのテーマと、二幕で主に千鶴・双春によって展開されている日朝友好のテーマが絡みあっている問題——重彦・千鶴・和人は兄弟である。だから、重彦・杉森の生き方と、千鶴・双春の生き方は、舞台の上で直接結び合わされないまでも、観客の中では結びあわされる筈である。作者も努力した点だろうが、この点が不十分に終わっているとの指摘。

○ 広島イメージは、八・六の夏だけにあり、被爆者とみられたくないという広島の人間の気持を考えてこなかったものに対するアンチとして上田修さんの「ひろしまの冬」ができた。上演の中で喧々譁々の討議をしてきたがその中で自分との違い、共通点が明らかになった。例えば、上田も自分も、「ひろしま」と平仮名を使い、漢字や片仮名を使わないと発言する、月曜会の土屋さん。

○ この戯曲のように、敗走していく否定的媒介を使って状況をつき動かしていくリアリ

していたといつてよい。

「海青く山青く、みかんたわわにみのる国」のイメージが余りにも美しいが故に、その内を支える労働とその対価の法則のきびしさは、より壮烈である。

同時にその詩的な外観の谷間に点在し、有田川や広川や日高川など静かに流れる清流がひと度氾濫すれば、まささまに最大の犠牲にさらされる未解放部落が、主要産業であるミカン耕作からも漁業からも疎外されてきている事実を見逃すことはできない。農地解放に、そこばくの「地主」になった未解放部落の人びとは、「農業近代化」政策の強行とともに、まっ先に離農させられ、低賃金政策のテコとして、臨時工、下請け職として転々させられる破目に追いこまれたのである。(「紀文」創作願末より引用)

3、創作の際の留意点

社会科学の構造的戯曲になることをきき、然し、人間だけを描けばよいという方向もさけた。生活実感のあふれた方言を採用し、観せもの要素、観客の楽しみの中で、総合農政の実態を表現しようとしたが、結果として資料をそのまま並べたようなことになってしまった。

五、一杉忠さんの問題提起

1、誰れのために芝居をつくりひろめるのか——ということをはっきり見定めて書かれた戯曲であり、日本の総合農政下の新しい収穫である。

2、農民から抜けだそうと努力して抜けきれない主人公木田文五郎と、文五郎の生き方を否定しながら新しい農民をめざそうとする息子文吉の対立が弱い。

3、文吉の交通事故による死を通じて、若い農民がどう芽ばえてくるのか不鮮明である。

4、文吉が大学進学をあきらめ、農村のサークルに入る理由が解らない。

5、合狂言を劇中劇として入れたことは形式的には破綻があるが、観客にとっては親切であり、テーマを解りやすくさせる方法のひとつである。

六、「紀文」討論の中で

○資本主義の矛盾が深まる中で、農村がどのような型で犠牲にされていくか——を描いた作品で、今まで、西リ演では、「雪崩」、「穀の谷に」、「仏さわぎ」などの秀れた作品をうんできているが、今日における農村の実態を鋭くえぐりだしたという点で、貴重な作品である。

部分とはどのように統一していけばよいのか
○戯曲を書く上で作品のスタイルは大切な問題である。二本の戯曲ともスタイルをかなり工夫しているが、テーマと結びあわせても少し深める必要がある。

○地域の民主運動にべったりくいついて作風化していく方向と、運動をつき放してみなければ本質は解らぬという側面をどう統一していくのか。

色んな話や意見ができました。それを文字で再現するとなると書いてることが全部言葉足らずのような気がして空虚さが身にしみます。とにかく、ずっしりと重い充実した十二時間でした。

去年の作家・演出家会議は、土屋清さんの「河」を中心にかなり論理的追求がなされて成果をあげましたが、今年度は、静かで美しい抵抗の「ひろしまの冬」と将来の農民劇の雛形とでもいうべき「紀文」を得て、あらゆる方面からの幅広い討論がされたことが特長でした。伝統芸術・芸能の積極的撰取の問題や肌あいと抒情性をどう考えるかの討論が今年新しくできたのは、結論はでていないとはいえ収穫でした。

○一貫して地域に根ざした演劇を創造している「いこら」の活動を評価するが、それを更に地域的にも観客層の上からも広げていく場合の説明不足や、ドラマツルギーの問題。たとえば、息子文吉の交通事故死が、ドラマの上では唐突と思える様な形ででてくるが、有田地方では朝早く和歌山市内の大会社（住友金属など）のマイクロボスが迎えに来て、一昼夜二十四時間の労働をして、又、マイクロボスで送られて帰ってくるというのが、兼農業の人の実態である。

その帰路のマイクロボスに乗っている人は精も魂もつきで、さながら死人の如き様相であるので、土地の人はその車を「霊柩車」と呼ぶという。
又、農家の息子を農村にとどめておく為に親は無理をして車やオートバイを購うという。

○劇中劇の効用については、パターン化した遊びでみせて、能の合狂言のような面白さをあげている。このことは、農村を構造的に把握することを助けている——という肯定意見と、紀の国屋文左エ門という元禄期の人間と現代の木田文五郎という人間を「ヤクザ芝居」で単純化してひつつけすぎている——と

地域の観客の要求に根ざして観客とともに演劇をつくる——という基本線は確認できているとはいえ、私たちの創造上の苦斗はまだまだ続きます。

夜の交流会で、大阪のフリーのある作家から「劇団は作家を育てていない」という意見に対して、「自分でまず書くことなしなければ駄目だ」という東川さんの話や、「自分は書くことと思っても書いてはいない。創作をつくらなければ劇団が潰れるから仕事をすの。劇団が働きかけてくれないというのは贅沢だ」という栗原さんの話や、「栗原さんが遠隔地の職場へ配転になったとき、栗原さんがいなくても芝居をやっている体勢をつくって劇団を支えてきた」という「いこら」の藤本さんの話をかみしめたいと思います
それは、日本の明日をつくる演劇をつくるために、作家や演出家を中心に劇団がどう団結を固めていきひらいていくか——ということでもあるのだから——。つまりは、新しい創造を生み出す仕事は全劇団員の肩にかかっていることなのだ。

いう否定意見が交された。

○あとの場にちりばめられるので一場は不要で、二・三場はひとつの場になるのではなか——という風な構成上の意見。

○年配者は実在感をもって描けているのに若ものが生き生きと描けていない問題。

○組織労働者、革命的人間像が登場してこないが、今日の状況のもとでは、革命的労働者を農民の中にかまらせていくことが大切ではないのか——という労働提携の問題。

○演劇の効用とはどういふものか。

七、まとめの討論の中で

○戯曲には「肌さわり」というものがある。「肌あい」とは、歴史的・風土的なものだけでなく、思考・感情を含めての方法・方向ということであるが、プロレタリアートの思想が「肌あい」になるにはどうすればよいか、労働者の思想と人情とがどうかかわってくるのか——戯曲に定着するにはどうすればよいか——今後の課題である。

○どこでも誰れでも感動する芝居というのはあり得るのか。地域に根ざした演劇を追求していけば普遍化につながるのかの問題。
○日常のヒダまでわけ入って描いていくことと、社会を構造的にとらえていく理念的な

新劇人 第四号

(頒価 一八〇円)

□「新左翼」の論理をめぐって——河村望氏にきく——

□ベトナムにおける文化創造活動——ベトナム訪日友好団にきく——

□ノーデー「非被告団」の提唱——八田元夫

□家永教授を中心とする学習会の感想——永井智雄

□「野麦峠」旅からの報告——岸野小百合

□丸山定夫死後四半世紀に——八田元夫

□討議資料「現代史をどうとらえるか」——江口朴郎

□「新劇人会議六一五総決起集会」における「新劇反戦」の暴力行為を糾明して——六・一五 小委員会

発行 安保体制打破新劇人会議
東京都千代田区麹町2の12
電話 (二六一) 六九二二六
(第五号は三月下旬発行予定)

普及は運動の鏡である

こばやし・ひろし

(劇団はぐるま)

「創造と普及は車の両輪」といわれるが、観客のいない舞台はないのだから当然のことである。真の舞台創造は観客創造との一致によって成立する。だから、普及はたんに財政の保障だけでなく、創造の保障として必要なのである。即ち、この両輪に大小があれば、運動は軌道はずし、左右に大きくまがりこんで泥沼に落ちこみ、車軸がなければ、両輪はばらばらになって自壊する。いうなれば、車輪が正常に機能しない劇団は、運動としての力を失った劇団といっているのである。

こんど、劇団はぐるままで経営部会をうけもつことになったが、その責任の重さを痛感しているのも、このためである。劇団は、これに関して経営部を中心に討論を重ねた結果、劇団の経営がわりに安定している(実際はつねに危機にさらされている)から、その経営技術を学ぶためとすれば、はなはだ迷惑だし間違っている。むしろ、東リ演の運動を押し

すすめてゆく上で、経営とは何かということ、を深めたい、さぐりあう学習会でなければならぬということになった。

即ち、私たちの集団では「経営は運動の鏡であり、運動の矛盾、創造、組織の強弱は経営に反映する」というスローガンを張りだすことにしたが、経営をたんにさぐれば、集団のどこに弱さがあるか、明確にえぐりだすことができるからである。

この討論を機会に、経営とは何かを、劇団の実践を基礎に報告したいと思う。ただし、こうあらねばならないという反省であり、目標であって、実践報告でないことを断つておきたい。

◇ 経営は企画から

劇団は働く市民、労働者を観客として期待している。と同時に、働く市民、労働者が期待し、要求している演劇を提供しなければならぬ。

らである。劇団員に「観客の中に入れ」というのは、そこからくる。

◇ どういう観客と接点をもつか

働く市民、労働者といっても、組織労働者もいれば、未組織労働者、学生、主婦等、多様で漠としている。私はすべてといいたくない。組織労働者のみでなく、不特定の観客を組織する能力が、本来、われわれになければならぬからである。これらの多くは潜在的に正しい文化要求をもっているが、マス・コミ文化、商業文化の激しい攻勢に流されている。だから、スターのいない地域劇団ではなかなか困難といえよう。しかし、地域劇団は地域劇団なりにファンはつくものである。うちの劇団でも田村貫、藤沢伸二、外山文孝、武藤幸子、大塚鏡子が舞台に出るか出ないかによって観客は影響される。

しかし、それよりも大切なことは、こうした未組織の観客のエネルギーを正しくひきだし、組織することである。それを最初からあきらめ、または無視することは間違っている。現在、爆発的に拡がっている親子劇場運動を見て、今日、これがいかに大切であるかを示している。

殆どの劇団が依拠しているのは組織労働者であり、民主団体である。地域劇団自体が、それを出発点として成立しているから当然である。しかし、これを基礎にしなければならぬが、今日ではこの接点は単純ではない。劇団側とすれば、創造をより厳しく追求しようとするから、時間的にも肉体的にも、劇団に重点が移り、職場での活動に限界が出てくる。一方、職場の条件は、合理化近代化の波状攻勢の中でより厳しくなり、とても片手間では斗いは組めなくなる。即ち、生産点を重視する職場の活動家と、文化運動を重視する演劇活動家との間に矛盾が生じ、対立する生れる。

これは本質的な対立ではなく、ミニマムに考えるから矛盾が大きくなるのである。それのみでなく「文化運動は今日の状況の下では目に見えない重要な武器であり、単なるカンパニア文化では力にならないことを理解してもらわねばならない。即ち、文化活動家になってもらわねばならないのだ。そうした文化活動家をいかに結集し、いかに依存するかが、地域劇団の発展のカギなのである」(「複雑な文化状況と十五周年」演劇会議十一号)とべているように、職場の活動家に、文化活

らない。この両者をつなぐエネルギーが爆発しなければ運動は成立しない。この関係について目を配り、企画をねり、組織するのが経営部の仕事である。

経営部がたんに金の計算をし、ポスターを張り、チケットの集配のためにあるとしたら大きな間違いである。経営部は、まさに運動の基本的な部分をにぎっているのである。

すばらしい企画を生み出すためには、つねに観客との接点を大切にし、その要求を肌で感じ、吸い上げる能力がなければならぬ。今日、観客の要求が多面的であり、流動的であるだけに、それを整理する芸術的、創造的センスが必要なのは当然である。要求を直線的に受入れるだけでは芸術運動の企画者とはいえない。

これら一切を経営部の能力のみに依存しては負担が重すぎるかも知れない。いわんや、新しい劇団員を申込に配置するとすれば、運動の基本を否定したことになる。劇団では経営部に必ず運営委員を配置し、また、運営委員は必ず経営を経験しなければならぬことにしたのも、そのためである。即ち、劇団の指導部はむろんのこと、劇団員すべてが経営の鋭い感覚を持ちあわせなければならぬ。

動の本質を理解してもらわねばならない。即ち、より高度な次元で矛盾を解消しなければならぬ。

また、劇団の主体も、創造の主体もないまま、低次元で活動家に依存した場合(チケットの配布網として)活動家の足をひっぱるのみでなく、同質の観客のみ集り、創造も政治主義にひき廻りされ、卑俗化をもたらす危険がある。これはマス・コミ文化に流され、「楽しいもの、面白いもの」の要求に従って、運動を拡散させるのと対象されるといっている。

この頃、労働組合はあてにならないということをよく聞く。確かに官僚化し、空洞化した労働組合はあてにならない。チケットの清算に行くこと、机の中に入れたままで、そっくり返券される。それどころか「組合はプレイ・ガイドじゃないぞ」と断られる。

だからといって、見限るのは間違っている。まじめな執行部、青年部とつねに接点を持ち活動家と共に文化運動の重要性を知ってもらうことが大切である。そして、共に執行部をつき上げる努力を捨ててはいけぬ。まして劇団の存在がその地域で一定の影響をもつと、これを無視できなくなるのである。こう

して、劇団と活動家、または組合との間に定期的な会合がもてるようになれば理想的といえよう。

◆ 経営は創造を点火し組織しなければならぬ

これを創造に点火させてゆく作業となるとことはかんたんではない。観客の要求自体が複雑であり、これとどう切りむすぶかの困難さは今、ここでのべる必要はない。これについては、私の「複雑な文化状況と十五周年」(演劇会議十一号)と仲武司の「複雑さを形どらえるな」(演劇会議十五号)で論じられている。ただ、いえることは、仲武司のいうように本質として単純であろうと、それでも管理機構の巨大な壁が突き破れないもどかしさが残るのである。言葉をかえれば「その通りだよ。わかっちゃっている。それでどうだというんだ」とひらきなをおるのを突き破る創造、これこそが求められているのでなからうか。「五寸釘をつきさす創造」とはそれなのである。

こうした作品を作家に新しく生みださせなくてははいけない。文芸部に脚本をさがさせなくてははいけない。それだけでなく、演出、俳優に、この要求をぶつけてゆかねばならないのである。経営はたんなる企画マンだけでなく、劇団の創造の火をもしたさせる点火者なのである。

優に、この要求をぶつけてゆかねばならないのである。経営はたんなる企画マンだけでなく、劇団の創造の火をもしたさせる点火者なのである。

◆ 観客に込める自信がなければ、経営部に自信が出てこないのは当然である。だから、創造を組織する能力が経営になければならない

これまでのことが十分できておれば、公演も、さらに、公演をまぢかまえている観客も燃えている。あとは舞台で火花を散らすだけといっていだらう。表(1)を見ればわかるように劇団では「郡上一揆」「かけない黒板」がこれに当る。経営オルグのみで千人以上が集約されている。しかし、ことは理想的に行かない。「七〇演劇行動」は発起劇団として必死になったが、「オキナフ」にもあらわれているように、すべては逆でジグザグするのが普通である。経営部は観客の要求を汲みあげていない。汲み上げたとしても、創造が貧困であれば、経営に自信が生れてこない。こうした悪循環をどこで断ち、集団のどこに問題があるか、つねに公演毎に経営にあらわれた数字にそくして点検する必要がある。

表(1) 公演入場実数 (売上は一割弱上廻る)

	劇団員	経営部	招待	合計
郡上一揆	2,444	1,220	229	3,893
かけない黒板	1,642	2,041	135	3,818
つくられた英雄	1,915	446	156	2,517
70演劇行動	1,457	874	135	2,466
小さな駅の物語	848	577	80	1,505

◆ 経営をめぐる相互不信

経営は運動の鏡といったが、創造と同様、組織の矛盾は見事に反映する。それだけでなく、逆に経営を中心に矛盾が拡大する。その

結果、劇団員は相互不信に陥り、組織自体が空洞化する。こうなると経営部が声をかかしてもなかなか動かない。経営が組織の要であるのはそのためである。そうした場合、どういう人間が生れるか、分類すると次のようになる。

(1) 個人主義的な者

「こんどは舞台に出ないから売れない」といって殆んど売らないか、多くを返券する者。もし、この論理が通れば、裏しかやっていないスタッフは一枚も売らなくてもいいということになる。自分の舞台だけ見てもいいのであって、劇団を運動として理解していない。

(2) 普及をたんなる財政活動と、創造より低く見ている者

これは非常に多い。指導的な立場の者に多いといっている。創造に責任をもつのが指導者の資格と思っているからである。それでいて、経営の大切さを口では強調するから、有言不実行で極めて悪質ともいえる。はなはだしい者になると、チケットをポケットにもったまま当日を迎え、その一部、また全部をポケット・マネーで清算する者もいる。(これは専門劇団のスターにしているが、業余劇団では

少ない) こうなると完全な腐敗といっている。指導部が組織の要である経営を軽視し、責任をもたないようでは困結も発展もありえない。年齢と共に芝居を見られる層は、若い劇団員に比べうすくなる。しかし、その壁を破ろうと努力して始めて、集団の信頼を集めることができるのである。

(3) 普及を劇団員の義務と考えている者

正しく見えても本質的に(2)と変わらない。義務から出ないので、コンスタントにチケットは出ているが、それ以上拡大しようと考えていない。

(4) 女房にまかせて自分は動かない者

演劇活動家に亭主関白がいるのは、悲しいことであるが、これも夫婦が劇団員の場合、突に多い。二人がどうあろうと、劇団員である以上、自己の周囲に多くの観客がいないことは不安である筈だ。

(5) 自腹を切って配券する者

自己の集団の創造に自信がないからであるが全く無責任といえよう。自信がなければ、自己の集団に向けるべきで、観客にしわよせするのはもつての外である。そんな責任のない芝居を見にくる筈がないし、きたとしても観客の方も無責任になり、共に創造を高めよ

うという姿勢は生れてこない。一部をダンピングするのも同様である。

(6) 気が弱く観客の中へ入ってゆけない者 これもそうとう見られる。文化活動家は文化面で大衆を組織する任務がある。その任務を放棄したことになる。自信をもって入ってゆけば、必ず暖く迎えられることを忘れてはいけない。セールス・マンですら、何度も何度も訪ねて販路を拡大している。いわんや、われわれは営利事業ではない。より自信が生れる筈である。今日では低級な文化は、いくらでも入りうるが、よりいいものは努力なくして生みだされるものでない。気が弱ければ二人なり、三人組になって入るべきだ。

(7) 全く無関心な者

始めからチケットを持出さない人がいる。これは論外である。普及とは何か、演劇運動とは何かを集団で徹底的に論議しなければならぬ。

◆ 劇団員の姿勢と普及

こうした現象はどれも見すごすことはできない。劇団の歴史が古くなればなるほど、表面上は何となく安定し、見すごれがちである。表(2)は、劇団はぐるまの個人別普及の

表 (2)

	郡上一揆(39年)		千本松原(44年)		オキナワ(44年)		70 演劇(45年)		小さな駅(45年)	
	入金	未清算	入金	未清算	入金	未清算	入金	未清算	入金	未清算
A	203	15	116	8	134	15	186	83	66	0
B	149	37	93	41	108	4	4	1	21	25
C	157	0	31	2	61	0	137	92	63	0
D	37	0	46	0	35	0	16	4	21	0
E	123	33	10	44	3	0	43	0	16	0
F	227	15	26	2	32	4	11	0	11	0
G	42	13	100	28	56	0	91	5	170	3
H	5	0	4	2	0	2	8	0	0	0
I	/	/	9	0	71	4	17	0	1	28
J	/	/	25	0	28	0	9	2	10	0
K	/	/	/	/	/	/	4	50	8	30
L	/	/	2	0	11	0	9	2	0	0

一部の抜すである。

劇団では半券に個人別の番号が押してあり誰の観客が、何日に何名きたか、公演毎に記録されている。この表を見れば、劇団員の姿勢がわかるだけでなく、劇団の組織が今どういう問題を背負っているかもわかるのであるこれをグラフにすればさらにはつきりする。

「郡上一揆」から「七〇演劇行動」までは市の中央の市民会館で上演され、「小さな駅の物語」は郊外の産業会館で上演されたので条件も悪いが、全体として普及能力の低下は否定できない。AとDまでは創立以来の指導部であり、一応の責任を果しているように見えるが、壁を破ろうという努力はしていないEとHまでは十年のキャリアをもつ、中堅である。ここでは、Gを除き、はっきり劇団の普及の安定にアグラをかいている姿が見うけられる。Hの場合は劇団ではなくてはならない存在ではあるが、照れ屋である。だからといって集団として見すごすことはできない。IとLは若いエネルギーに燃えているべきなのに、Jを除き、その努力は全く見られないこれは「劇団とは何か」を全く教育してこなかったためか、あるいは、それ以前の問題があるといってもいいすぎではない。指導部は

指導部で自分さえ売ればいいと思っているし、若い層は、指導部は顔が売れていると考えている。

指導部は、前にものべたように、年齢と共に観客層は減少するばかりで、その壁を破る努力は、若い層以上に必要なのである。それを十分重ねていないとはいえても、それに対応する努力が若い層になれば中堅層のような衰弱をもたらすのである。中堅層のGは、青年団との接点を大切にしてきた結果であるが、他は、なるがままに公演を重ねた結果に他ならない。

こうしたことは個人としてでなく、集団として、つねに点検する姿勢がなければならぬ。全劇団員の普及表は、各公演毎に発表されてはきたが、点検と討議がつくされないため、今日まで、危機を自覚しえないできたのである。ようやく、普及と財政に展望をどうもつか、問題になった段階である。

◇ むすび

その中で、(1)スケジュールが厳しすぎ、公演の連続で討議の時間がない。(2)創造がもえきっていない。(3)集団が拡散し、老化現象を起している。(4)合評会すら、たんにやっ

いない。ということが問題となった。これは全くふりだしにもどった問題といっている。ろろ。

(4)については、かって「かけない黒板」の時は、各地で十数ヶ所にわたり、合評会をもち、参加者は総計六〇〇名にも達した。一つには、そうした状況もあった。しかし、それが、次の創造と普及にもつながるのである。それは、逆にはねかえって、集団の社会的責

任を強め、団結の基礎となるのだ。

この当然の論理が、即ち、前にのべた観客との接点、パイプが経営の安定の中で忘れさらられ、公演のやりっぱなしという結果を招いたのである。

この頃「観客の要求がつかめない」ということが劇団でも話合われた。それは今日、事実としてあるとしても、あれば、あるほど、より接点を大切にする努力がなければならぬ

ブロック特集

西リ演近畿ブロック

交流ゼミナール

12月5・6日 京都山崎宝寺

橋本依子

(南大阪演劇研究会)

突然云い渡されたこの原稿。自分の文章が活字になり、人前にさらされるのは全く苦手です。物を書くより恥をかき方の多い私のだとたどしいこの報告は、読者の皆様には大変御苦勞をかけると思いますが、筆足らずの所は皆様の優れた創造力で補って下さい。

先日、名古屋芸術劇場の「若者たち」を観た時のパンフの拓植洋氏の文章に、私は妙な

気分を味わいました。

「こんな経験はありませんか。職場の仕事に追いかけれられ、喫茶店のソファにも落着けず、茶の間をテレビに占領され、何処にいても、何をしても満足できないイライラした気持ち……こんな毎日ではありませんか。

分きさみで朝食をとり、週間誌の吊り広告をみながら満員電車にゆられ、ラジオを聞きな

い。創造がもえないのも、集団の老化現象もすべて、出発点がそこにあったということも忘れていたといっている。

「普及とは何か」の結論は、劇団の危機状況を明確にすることによって出てきたことと思う。各集団で、これが何かの役に立てば幸いだと思ふ。

がら車をとばし、音楽を聞き、週刊誌をみながらコーヒーを飲み、興味はテレビチャンネルと共に、歌、ドラマ、ショウと移り変る。目を開き、耳をすませば、すぐに飛びこんでくる雑多な情報、情報……。情報はあくまで情報であって、それを整理して必要なものとそうでないものに選り分けなければならないその選り分けのできる人間が必要なのだ。」

——ああ、この人は私を毎日尾行しているんじゃないだろうか。

私がイタズラに規定の枚数をうめているとは思わないで下さい。

ゼミナール等にとっても関係していると思うのです。やっぱり私はそんなめまぐるしい世の中に埋没してしまわないで、手作りの芝居

を確かな方向で創ってゆきたく思うのです。

さて、本論に入りましょう。

全くのんびりとこのゼミナールに出かけてきた私が、それから二ヶ月も経とうとしている今、なんとか記憶をたどりながら、あの日の事を再録してみます。(申し訳ないのですが、当日明方まで起きて発行して下さったニュースや名簿がどうしても見つからず、各分散会のチャーターの方々の報告だけが頼りで全く未熟な報告ですがお許し下さい。)

京都郊外の山崎、かの有名なサントリ！寿屋のフランス風、レンガ造りの工場が山裾に見える小高い山の中腹に、会場である宝寺があります。底冷えが始まりつつある京都独特の寒さの中を、神戸、京都、和歌山、大阪からあつまってきた、東西リ演合同ゼミの時よりもグッと若い平均年齢の人々が、20畳足らずの会場をうずめています。

まず、「私と劇団」という事で、各劇団より、より抜かれた問題劇団員？達が報告をします。

● 四紀会・梅野篤子氏

就職して平凡な人間になることに抵抗を感じ、何でもよかったが、東京で職業演劇人になろうとしたが、四紀会に入ることになった

強してから参加したいと思っている。

● 劇団橋・草川哲生氏

友達に誘われて入団、5、6人だった団員が現在17人になった。まだまだ自分の若さをストリートに出しきれない。

● 人形劇団 京芸・市丸千子さん

大学の4年間、人形劇のファンタジーに魅せられ、日本の伝統的人形劇と近代的西洋人形劇の結合の大切さを感じて、一九六五年入団。劇団員34名の内訳は劇団歴2・3年の人。創立以来の古い人と新しい人にはさまれて断層を感じる。これからの課題としては、「古い人との間に相互批判の関係を作り出していきたい」「独身者の問題」「結婚している人の育児問題」「学校公演、府移動劇場、劇場公演、大人向け人形劇、映画と、巾広い活動の中に埋没してしまわないのはどうしたらいいか」など。

様々の形で演劇活動に参加し、多くの困難をかかえながら続けているこうした仲間の声や姿をこの様な交流会でよくたびに、あそこでもガンバっているんだなあ、何か深い連帯を感じさせられました。

次に、わが大阪演劇研究会の最近作(まとまったものは今これ丈ですが)の「モーレッツ

二年たち、今はもっと大きな役を演じられる役者になりたい。人の好きなばかりが集っている四紀会には居ごちがいが、公演の総括をはっきりしない欠陥がある。とチョッピリ劇団への忠告。

● 未来・鍛節子さん

芝居の技術を勉強しようとする職業劇団の研究所に入ったが、幸か不幸か劇団に入らず、未だに来た3年、今私はのびのびと活動している。理屈っぽい劇団なああと最初は感じたが自分の生活や考え方や創造問題を真剣に追求している人達の中で、自分も考えさせられ、変っていった。仕事と芝居をしっかりととしてこそ、のびていくんだと最近とくに感じる。芝居をやるのが恐しくらい、芝居はむづかしいと思いはじめた。

次は古株で

● 大阪協同劇場・奥井一雄氏

今までいろいろやってきたが創作劇が育っていない事が悩みである。今年の十月より、京浜協同劇団や名古屋演集に学び、新劇講座を開講。現在男8人女10人が学んでいる。

● 関西芸術座・山本啓一郎氏

高校時代に関芸の「ひとりとっ子」を観て感懐、関芸に入る。今は一番劇団の団結という

問題に関心があり、よその劇団をよく知りた。関芸の様に何班にも分れて公演すると、どうしても、アンサンブルが生まれにくくなり、悩む。

● 息吹・高尾頼氏

学生時代より演劇をしていて、最近息吹に入った。歌舞劇を専門にやる息吹の中でもっと芝居をやる様、ガンバッテ行きたい。

● 南大阪演劇研究会・山本惣一郎氏

そろそろ8年目を迎える劇団であるが、8年やってきてもまだ、自分あつての劇団となりにくい。職場、団員の結婚、子供などの事でなかなか、身軽に動ける人が少なくなってきた実動員がへった。しかし、サークル主義を脱却して、創造を中心に団結してゆきたいと思う。

● サークル・壁(京都)・陽川成孝氏

2年前定時制高校の卒業主で組織。京都南部の労働者の街の芝居を創りたい。もっとよくなつてほしいとか、芝居を親た女の人が入団希望してきたりして、励まされ、続いている。自分は朝鮮人なので、祖国が統一されれば同胞の前で芝居をやりたい。日本に朝鮮青年同盟の演劇班があるが、もう少しここで勉

教育」を、一番やりにくい観客の前で演じることになりました。東西リ演合同ゼミ報告の出ていた「演劇会議」の京浜協同劇団の座談会で出されていた、笑いの質の問題。あれで労働者を笑わせられるか、安保の事を知らない観客にどう訴えるという大切な問題点を私達も克服できなかったわけですが、当日の合評会の中では脚本に一番忠実に演じられている事に共感を持ったという意見があり、これは私達が脚本分析した時に、一番問題にしたことでもあり、最も基本的に、リアルにやるうというところが、結果としてこの様に変わってきたのでしょう。しかし、親分と子分の関係の問題や、腹の底から笑えないことをどう受けとめるのかということはまだに未解決のままです。やはり、諷刺的喜劇の難しさなのだろうと思います。

次は分散会に移り、第一、第五班まで、大まかに経験年数で分かれたわけですが、個人的に自由な発言の中から軸としては、劇団内の断絶や団結のことを話し合うことになりました。

話し合われた内容を大まかに総括してみますと、劇団やサークルに入ってまだ一二年という人達は、運営委員会などで決められた

スケジュールや方針が、そのまま降りてきて結果だけを知らされる、個人的に交流するひまもなく、次々と未消化のまま過してゆく不安さが、古い人との断絶となつてゆく様に思いう、「息吹」などでは、運営委員会に新しい人達だけの運営委員会の中から、代表を送るというシステムをとっているということでした。しかし、新しい人も方針やスケジュールをもっと主体的にとらえてゆく様な努力も必要ではないかという意見もありました。

中堅の人からは、活動が忙しくて、スケジュールに追いまわされ、以前より個人的に交流するとかふれ合いが少くなりさびしいという事や、古い人の苦しみや今まで築いてきた苦勞もわかるし、新しい人達の古い人に対する又、劇団に対する不満なども分るし、どちらの意見を聞いていいのか、すごく孤独を感じるという事が出されましたが、もう少し古い人に対しては、まきつぱりと意見が云える様にならねばと、まとまったようでした。

各班の話を経合しますと、レバを決める場合若い人も自由に参加できる民主的な状態を普段から作る事、そして、地域の要求にこたえる脚本がない場合は創作するのが一番よい。その為に積極的に座付作家を育てる必

要のあること。又、我々の観客が増えていき我々の演劇運動が発展するには、観客一人一人が主人公になっている様な気持ちにさせるもので、現実とそのままの苦しさを表現していたらいいというものではなくて、その事から本質をつかみ、観客が求めているものを理屈ではなく、感覚で進めて行くことが必要なのではないかと云った問題、又、一つの現実立ち向った結果、勝利したとする様なものでも、全体として、歴史的には敗北しているといったものが多いのではないか、その時点では非常に勇気づけているとしても、終幕でウソになっている芝居が多い気がするという事、しかし、小さな勝利の積み重ねが大きな勝利にも続くという事も忘れてはならない事だろうと思います。又、組織動員はきちんとできているとしても、その芝居の評価が非常に良かったという人と、悪いという人の差が大きい時、何を基準に私達はその事をとらえるのか、又、その内容から逃げようとする人をどうひびびって来るのか、その事を真剣に考える必要があるという意見や、オルグする時にその対象の人と対等に話し合い、観客の日常の問題と我々が追求している事は同じな目的なのだから、オルグに特効薬はないと話

運賃も安く)集まりやすいことが大切な一つの条件といえる。だから、加盟劇団が増えるにしたがってブロックを細分化し、将来的には一県一ブロック化を計って行くのが望ましいように思う。東日本の都道県に限らず東り演の旗が立てられた時、ということ想像してみると、「東り演」という、演劇仲間以外にはやや分りにくい言葉も、広く働く者の日常の言葉に少しはなっていることと思う。今回の「演劇会議」がブロック特集を編んだ根っこには、この願いが貫かれていることと思う。七〇年演劇行動を経た東り演の、新しい飛躍へのポイントとしてブロック活動が重視されているものと思う。

このような考えからすれば、東海ブロックはまことに光栄あるブロックといえようが、さてその活動内容となると、先がけらしいとは、どうひいき目にみても言えないものである。密度はまだ薄い。

それでも、最近になってようやく動き出している。静芸「漁港」公演日に、東り演の事務局員でもある井岡氏宅で朝の四時頃まで話し合いを持ち(呑みながらというおまけつきだが)遅蒔きながら、ブロック運営委員会をつくらうというところまで来た。これまで

に落着いたようです。この様に二日間に渡る討論が、真面目に熱心に交わされました。これはその内の一部分です。

第一日目の夜は例のごとく、アルコールを交えてのフリートーキングとなりました。翌日に話されるタネがつかないのではないかと思われる位、皆さん、舞台の時以上に手ぶり、身ぶりよろしく白熱した交流会が、延々と続きました。しかし、内容はやっぱり芝居の話。

ブロック特集

もつと深まりを 東海ブロックの報告

深 沢 大 助
(劇団 からっかぜ)

はじめに

北海道を除くと、他のブロックが数県に跨って構成されているのに対して、東海ブロックは、今のところ、また将来にわたってもどうやら静岡県だけにかぎられているようである。ブロックの成立の事情を知らないのその理由については書けないが、静岡県だけ

も、東り演係を中心とした運営委員会らしきものもあるにはまったが、ブロックゼミナールの打ち合せが中心で、それ以上のものではなかった。そういう点では、今回のブロック運営委員会結成への動きは、東海ブロックとしては大きな前進といえる。そして、この結成への動きにとって何より励みになっているのは、中部ブロックの一連のブロック活動である。そこでは、若いメンバーの、新鮮で卒直な意見がブロック運営に生かされているということがある。密度の濃いブロック活動は劇団の日常活動からの関心、要求を根にし、格式ばらず、膝をくずして交流し合うことが第一だから、中部ブロックの活動には大いに見習うところがある。

■ これまでのブロック活動について

相互が自発的に観劇交流をし合うことと、四回のゼミナールを開いて来ているのが、これまでの東海ブロックの活動である。四回のゼミナールは、静岡で二回、富士宮、浜松で各一回づつ開かれた。静芸が二回、つくし、からっかぜがそれぞれ一回づつ、担当劇団として準備したことになる。要求をいえばきりがないが、そのどれも、参加者たちにとってはそのなりに有益なものだったと思う。第一

(ほんとに好きなんですわえ)
翌日の分散会も済み、各班からフレッシュな顔が次々と感想をのべます。

それが実に個性的で、まるで漫談の競演の様で、お腹をかかえる程笑わせてくださいました。

以上で私のつたない報告をおわります。ここまでしん棒強く読んで下さった方々に敬意を表します。

というのは、いずれにしても良いことだと僕は思う。本来的に言えば、ブロック活動というのは、ゼミナール活動においても、観劇交流やその他諸々の活動においても、いわば東り演活動の密度を濃くすることにあると思われれるので、加盟劇団の多くが非職業劇団である現状から言って、交通の便が良く(従って

回は、主に劇団間の交流に費やされ、東り演とは何か、といったことが討論の中心だった。また、全国ゼミにならって、静芸が「不知火」をモデル上演した。第二回目には、清水わかもの座、天竜の劇団いずみ。静大演研などが加わり、地域劇団のあり方について討論された。特に、天竜いずみの出した五つの苦労、① 劇団員が集まらないこと、② 良い脚本がないこと、③ 会場(上演会場・稽古場)がないこと、④ 創造の指導者がいないこと、⑤ お金がないこと、を共通の悩みとして、その打開のためには、まず観客に依拠するということが、次にこうしたゼミを数多く持つて経験を交流し合うことの必要を挙げたこととは大きかったと思う。第三回は、前回の経験を踏まえて、運営面と創造面にわたって、かなり具体的な内容となった。運営面では、創造、普及、期生について分散会、全体会という全国ゼミでやられる方式がとられた。創造面では、基礎訓練と、初級・中級・上級の三段階に分けて詩の朗誦が行なわれた。各級毎に統一した詩を選定し、全劇団員がいずれかの詩を朗誦し、全体会、級別会の中で具体的に創造が交流され、参加者みんなに良い評判を生んだ。このやり方は第四回に引き継が

れ、東海ブロックゼミの一つの名物となった。また、第三回ゼミで、富士宮つくしから静岡県演劇連絡協議会(略称・県演連)に対して東リ演の劇団が果すべき役割について意見が出されたことは大きかったように思う。静芸つくし、からつかぜは、静岡県の東部・中部・西部でそれぞれ十五年から二十年の経験を持ち、県演連に果す役割が大きかったが、東リ演として統一的に考えることはそれまでにはなかった。第四回は、浜松で開かれた事情からか、富士宮からは二名の参加者にとどまり、人数的には少く寂しいものとなった。しかし、浜松からつかぜの抱えている困難を討論することによって、改めて劇団の創造、運営のあり方が見つめ直されたことは、踏んではならない職が何かを考える上で意味があったように思う。期生だけの分科会が行なわれ東リ演学校が開かれたこともよかった。

■ これからのブロック活動について
 昨年は、とうとうブロックゼミが開けなかった。ブロックゼミが開かれないうと、どうも東リ演が遠くなってしまふ。機関誌と観劇交流と全国ゼミとブロックゼミ、この中で、とりわけ身近なのは、やはりブロックゼミである。劇団員、期生の多数が参加するから、お

互いの集団の長所、欠点がよく見える。全国ゼミになると、これはよくないことだが、どうしても新人は疎んでしまい、劇団代表者の顔を通して主に集団をみてしまふ。ブロックゼミはお互いの集団が見えである。隠しても始まらない。だから、ブロックゼミが開かれないと、東リ演が遠くなってしまふというのも至極当然なことである。

この二年間の間に、三集団はそれぞれ動いている。つくしの会は、児童劇への比重が増し、親子劇場結成を進めているし、静芸は「さちの苦汁」「祖国をみつめて」「漁港」を上演し、三・一記念として「漁港」焼津公演を進め、働くものの心でドラマづくりを追求するというこれまでの志向を一層確かなものとしているし、さらにかつかぜは西部地方全域に目を向けて移動公演を重視し、歌舞班の結成を進めている。これらの動きのおおよそのところは分つても、つつ込んで、たとえ

とが東リ演の使命だ、というような問題としてではなく、どのような観客と、どのように交わり、どういふ創造を富士宮つくしが生もうとしているのか、一番分っていないなければならないことが、同じ東リ演劇団でありながら分っていないでいるということ、そのことにジレンマさえ感じているのである。特に、第四回ゼミ以後、東海ブロックの連帯は頼みに弱まっているように思う。昨年、からつかぜの「ピカの蔭から」の県巡回公演が、最も低い文化予算、最も強い官僚統制で有名な静岡県教育委員会にクレームをつけられた時も、東リ演三劇団として県演連に働きかけをするということが出来なかった。これは、からつかぜの呼びかけの弱さもあるが、東リ演の連帯の弱さの一つのあらわれであると思う。また未加盟劇団のわかもの座への働きかけも強くない。

新しく生まれる運営委員会に対する期待はだから大きい。

△ △ △ △ △

北海道からのレポート

ブロック特集

編集部

北海道演劇集団主催の第四回演劇祭は、二月二―三―三日、三笠市の新しい市民会館を会場にひらかれた。

七劇団による六つの演目は――

- 劇団湖・こぶし 菅谷俊一「綾瀬川」
 - 新芸 広島芸芳「モーレッツ教育」
 - 波 宮本研「人を喰った話」
 - やまなみ アラバール「戦場のピクニック」
 - 新劇場 モリエール「強制結婚」
 - さつぽろ 川あはれはじめ「風が風を――」
- 人口二万の三笠市で、のべ七〇〇人の観客を迎えたこと、そしてその人々のイキイキした反応が舞台にかえされたことは、出演劇団を大きくはげました。公演終了後の交流会には、八〇人もの仲間が集まって成果をよろこびあった。

合評会では、演劇祭の成功を確認した上でしかし、二七劇団中出演が七劇団、観劇に参加した集団を含めても二二劇団におわり、道

演集全体の結集にならなかつた弱さが問題になった。また、演劇祭の舞台にもあらわれた各劇団の指向性や条件からくる、創造内容と方法の格差についても卒直に話合われ、道演集のいっそうの強化がのぞまれた。種々の手ちがいが重なって、東リ演からの代表派遣が実現できなかったことも、右のことと絡んで惜しまれた。

砂川の劇団こぶしが、著るしい過疎化のなかで、団員二―三名という窮地においこまれていることでも察せられるように、北海道の演劇状況はますますきびしさを増している。それだけに、集団の民主的体質をつよめ、創造の高揚をはかることが共通の課題になっているといえよう。

券演の活動は、函館をのぞいて未だ建設途上にあり、とくにプレイガイド的な切符売り活動から、サークル活動を基礎にした新しい体質をつくることが、努力目標になっている。

一方、釧路、函館、旭川などでつくられた子供劇場は、多くの母親のささえによって着実に進展をみている。

こうした中で、東リ演北海道ブロックは独自の重要な役割をもつとおもわれるが、加盟が、さつぽろと新劇場二劇団という現状では十分な力を発揮しえない。やまなみ(旭川)にれ(札幌)新芸(小樽)などの劇団にはたらきかけ、東リ演加盟を実現し、充実したブロック活動を土台に、道演集の発展をかちとっていきたい。

(これは、一月の伊豆下田の運営委員会で劇団さつぽろの鈴木喜三夫氏が報告したものを、黒沢が文章にしたものです。)

× × × × ×

東り演「中部ブロック」の活動方針

劇団はぐるま

七〇年度の中部ブロックは、「七〇演劇行動」を大きな行動目標にすえ、ブロック各劇団は積極的な行動を行い得たと思います。しかし、その反面で、中部ブロック全体として考えてみると多くの問題が山積されて残されたままであると思われる。

昨年度、十二月末日ならびに一月十四日のブロック担当者会議では、その問題がスケジュールおよび、ブロック活動の内容にあることが多出し、従来のブロック活動についての反省事項が討議されました。その主な点をひらいてみると……

一、ブロック方針が担当者会議の席上でのみの討議事項とされ、その内容伝達も単なるスケジュール報告に終ってしまい（逆に担当者はその徹底にあせるのだが）一般劇団員の意見、希望が反映されないままに決定されてしまう。それによって一般劇団員への浸透が、上意下達形式となつていないのではないだろうか。

夏に。スキー、スケート、ボート大会を冬に。他は運動会を東り演全体でやりたい。但し、レクリエーションを単独で行なうのではなく、一日目を創造交流等、二日目をレクリエーションを組んでほしい。

これは、今までのゼミ、会合が息苦しくよく知り合っていない人同士が、よそ行きの会話や交流をしなければならず、終ったあとで得たものが肌感じられないからだという意見です。

三、六月二十六・二十七日に行なわれる中部ブロックの創造、演出部会に何を望みたいですか。

(A) 劇作上の具体的指導を、時間がかかってもいいからセリフの一言についてまで教えてほしい。イメージ、テーマ、人物についての大意だけを伝えられるだけでは追いついてゆかない。
(B) この部会を定期的、定期的にやってほしい。

四、三月二十八・二十九日の経営部会に何を望みますか。
(A) 各劇団の税金対策が勉強したい。
(B) 観客の普及活動がどのようになされているかを、経営部だけの収約ではなく、沢山の

うか。

二、ブロック方針が一般劇団員に浸透しないところから、ブロックそのものの必要性が各自の中であいまいなものとなつてしまい、ブロック全体を考えることが、劇団上部の人の交流にのみまかされればなしになつてしまう。そうしている間に、方針の普及、活動が軽視され、成果や、欠点についても正当な評価をし得なく、むしろ有名無実化してしまつてい

るのではないだろうか。（もし、七〇行動が行なわれなかったなら、現状以下の認識にならることさえ予想されるのではないだろうか）
三、新旧の劇団員にかかわらず、東り演中部ブロックを、互いに支えあつていようとゆう意識の弱さが見受けられる。これを打開するためにも、交流、会合の場を保障しなければならぬ。

以上の三点が大まかな反省と考えられます。この反省の上になつて、新年度のブロック方

劇団員の生の声を聞きたい。

(C) 経営危機が問題になる時は決めて、劇団員の普及のまずさが、第一とされ易いが、原因はそれだけなのか。個人の問題と社会的な問題についても各地域の状況と、その対策を明らかにしてほしい。

五、その他に何か。

A 演劇会議について意見はありませんか。

(1) 戯曲をもっと豊富にとりあげてほしい。

(2) 各劇団の状況を総括報告だけにしないで、もっと具体的な生の声、特に新人、中堅の悩み、不満等を討論し、その討論を別の劇団員が討論し、とゆう様に発展的討論を企画してほしい。

B 東り演についてどう思いますか。

(1) 運営委員にもっと新しい劇団員を送り込んで、従来の頂上会議的なイメージを刷新してほしい。

以上が各劇団員のアンケートによる収約です。この収約の大半の劇団員は、ブロック劇団員相互が、創造、交流の場を通じて連帯を深めたいと望んでいます。アンケート方式の問題はあると思いますが、当面、この資料をもとにして七一年度の中ブロック活動方針を決定し、積極的な活動の基礎としてゆ

針は各劇団員の意見、希望することをアンケートによって収約し、その大意を具体化するための方針案を作りたく確認されました。以下にアンケートの声を大別してみます。

(A) 各劇団の公演を単なる見学として終わらせるのでなく、創造交流の場として確保し、各劇団はその公演に多数の参加者を呼びかけてほしい。

(B) 中部ブロック参加劇団全体で公演を企画し、創造力の向上を互いに強めたい。

(C) 公演とは直接関係しなくても、創造についての基礎的勉強会、交流会を企画してほしい。

(D) 新入団員（特に若手を中心に）を集めて各劇団の中核になつていよう人達の経験を学びたい。（例、劇団と私の歴史等）

(2) 東西演ゼミの時のように、劇団について、団結について等、刺激し合える場がほしい。（現状では、団内で新鮮な声が聞かれずむしろマンネリになつていよう）

二、中部ブロックで、どんなレクリエーションがやってみたいですか。

A キャンプ、登山、海水浴、ハイキングを

きたいと思つています。

尚、当面のブロック活動として

一、二月七日に行なわれる愛知県知事選にブロックとして、革新統一候補の新村猛氏を支持し、責任劇団を演集、名芸に決定し、地域性を乗り越えて大衆カンパ活動、文工隊もつて協力体制を組む。

二、三月二十七・二十八日に行なわれる東り演全体経営部会を、中部ブロック責任のもとにとり組む。担当をはぐるまとし、内容については、はぐるまが資料を作成し、中部ブロック各劇団で修正する。それを事務局に送り今日の資料とする。

三、昨年度に引き続き、中部ブロックの創作演出部会を今年度は、六月二十六・二十七日の両日としてとり組みたい。

上記の三点については担当者会議の決定事項とし、各劇団で確認しあつた。

七〇年度の活動が多大な評価を得ながら、同時に内部では、上意下達機関だとか、意識的な弱体とか看過されない問題を抱えていたわけです。また中部ブロックの劇団が劇団間の連帯とは別に、劇団内での様々な問題に当面もしています。然もどの劇団もが苦闘しています。私達はその中からより豊かな、より

明るい文化を創り出す者としての自覚を改めて迫られていると思います。中部ブロックの活動方針が空文化することを私達自身が許さ

ブロック特集

「関東ブロック」のレポート

塚越松雄

(劇団 埼玉)

はじめに

私たちは昨年9月2日、第一回代表者会議に於いて、①東リ演第八回総会の決定と情勢に因應る為、早急に具体的方針・計画をもつこと。②首都を中心に組織されている関東Bとしての役割りの大きいこと。③その為Bとして運営機関の確立が急務であることなど、基本的確認の上になつて。

- (1)、運営推進機関を設ける『三人構成：塚越(埼玉)・黒田(協同)・川端(労芸)』
- (2)、代表者会議の定期化にむけて努力する
- (3)、ニュースを発行する。(担当・黒田)
- (4) 創作学校を開催する。
- (5) 共同の勉強会としてのセミナーを開催する。

ないだろうか。

ここで実践に即して初步的問題について考えてみたいと思います。

一つの集団、組織がなにごとをおこなしてもその具体的方針を生み出す会議が発行になることは言うまでもないのだが、だからこそ「推進委員会」が設置され、代表者会議の前には必ず開催し、議題の整理、計画の具体化につとめ、代表者会議の定期化についても検討が加えられてきたところです。しかしこの定期化については各集団間の稽古日の不一致、或いはその時々々の集団のスケジュールとの関係から具体的展望を持つことの困難さが一致して出され、随時必要に応じて推進委員会の判断で招集し、これを受ける集団側としても「いつでも多忙であることには間違いないのだから」これに積極的に応え万難を排して会議を成功させようと確認し合ってきた。そしてその結果は次のとおりです。

代表者会議招集数 6回

五劇団出席 1回

四劇団出席 2回

三劇団出席 1回

二劇団出席 2回

これで明らかのように、九劇団が加盟して

ないために多種の会合、交流を企画し成功させてゆきたいと思つていきます。

(6)、演技ゼミを開催する。

(7)、相互観劇交流を積極的にとり組む。

(8)、東リ演加盟劇団の拡大計画を独自にも追求する。

(9)、これらの活動を通じ、或は独自企画をたて、専門家との積極的交流をはかる等々多くの具体的計画を決めました。

このように列挙し、今日までの実践との関係でこれをみた時、卒直のところ随分と盛沢山のことごらが決めたものだと思つてしまふしかし、この思考は後退を意味しているし、決して正しくない。何故なら、どれもこれも不可欠のものばかりだし、これらを生み出したあの時点ではそれなりの必然があったと考えられるからです。

いる訳ですから厳密に云えば、仮りに%の集りがあつて成立とすれば全部の会議が流会になつてい訳です。また半数を基準とすれば会議が成立したのは、一回ということになりまふ。そしてその多くの欠席理由が、①公演スケジュールにおわれている。②連絡が突然で調整出来なかつた。③劇団内全体集会など集団内の理由により、などとなつています。

これらはいずれもそれなりに理解出来まふしかし、だからこれでよいというにはなりません。それは先にふれたように組織原則にかかわることがらだからです。これを放置することは東リ演の、関東ブロックの解体にイコールされるからです。

ですから出席集団の少ないままでの具体的諸決定は実践の段階でその弱さを露呈します例えば、①相互観劇交流、②創造研究会、③創作学校、④演技ゼミ等いずれも実践は成功をみないという重大な結果をまねいています

— おわりに —

七〇年代を、民主勢力の一環として私たちの東・西リ演は、もっとも私たちの運動理念を具体的、行動的、組織的反映とした「70年

それは、東西合同ゼミと総会という全国の仲間との交流の中で、大きな展望と確信を抱いて帰つた直後だった、//熱かった//時だったということですから、このことから言えることは、八回総会でも強調されていたように「初心にかえる」ことが、いま中間的総括をすすめるにあつても大きく求められていると思ひます。

— 問題点 —

八回総会は東リ演運動のカナメとしてブロック活動を最重点にすえることを方針化した。それは正にブロック活動こそが運動の生命であることを確認し合つたからでした。さて、ブロックにかえて、これをどれほどブロックが、各集団が、目的意識的に、具体的に追求し得たかどうか、きびしく問いかげられなければならないと思ひます。

「ブロック活動」を単に運動における組織論としてとらえるのではなく、私たち創造主体の根元としての、地域における文化状況の变革——地域住民の文化要求、政治課題に創造集団としての責任と主体性——この展望を明確に行動の方針とし、その共通の理念で結合し合う、更にはこれらを保障しうる運動の形体として「ブロック」をとらええない弱点は

演劇行動」で幕を開けました。七一年はこの歴史的事実の延長線上にある訳です。

新しい年を迎えた先の代表者会議は、(これも協同、労芸、埼玉のみの参加)「初心にかえる」ことの重要性と、当面、会議の成功を勝ちとることを重点にすえることを話し合いました。その為には、具体的に代表者又は東リ演係、或はこれに準ずる代理者を会議に出席させる保障を、集団内で確立することが急務と思ひ、そのことによつて必ずやより大きい団結と、関東ブロックの飛躍が生まれるものと確信します。

あわせてこの時の会議は、東リ演—関東ブロックに対する要求を重点に、加盟劇団と個々の劇団員にアンケートを求めることも申し合せ、二月中には集約することとしました。

大変まとまりのないレポートになりましたが、現状を卒直に明らかにすることだけは報告出来たと思ひます。ただ残念なのはブロックとしての「中間総括」にならなかつたことです。従つて全くの私観であることも最後に報告して終ります。

甲信地区からの報告二つ

梅津幸三 (やまなみ) 横山伸 (信濃小劇場)

その一 梅津幸三 劇団「やまなみ」の今年の活動は、昨年できなかつた十五周年の記念集会への取組みで始まりました。単なるお祭りさわりでなく、いままでも劇団を支えてきてくれた先輩や仲間たちの期待にこたえられ、又、若い劇団員たちが劇団十五年の歴史を肌で感じることが出来るような内容にしたいと準備を進めています。

第四期生の教育が始まりました。応募者は十四名。従来三ヶ月だったのを六ヶ月に延ばして、専任の教育係をおき、劇団員全員が課目を担当し、中間に劇団本公演への実習的参加を含めて、六月に卒業公演を持つ構想ですめています。

一月二十四に劇団総会を持ちました。その中で、社会的な状況にしっかりと眼をすえること、世の中の動きと、自分たちの演劇運動との関係について深く考えること、特に七〇

「青春の歌声」という創作劇を上演した以後停滞してしまいました。昨年暮劇団総会を開き一ヶ年の活動の総括をおこないましたが、原因は劇団員の団結に問題があつたようです。現在劇団員の募集をおこなつており、三名が新しく加つたとあります。

今年の新しい目標として七月に、労演フェスティバル、秋には一昨年につづいての創作劇上演をめざしております。

(東リ演との関係については、早急に東リ演からオルグを派遣する必要があると思ひます。劇団員の中からもそのような要望が出ております。演劇会議誌は劇団・労演の中で一〇部固定しており、さらにそれは強化される見とおしがあります。)

上田市の劇団あかつきは昨年、劇団「紅」と分裂してしまい、二月二日に再発足、七月の労演演劇祭にむけて、宮本研作「僕らが歌をうたう時」の稽古に入りました。活動人員は七名位です。分れた劇団「紅」は創作劇を公演したいということで意見が合わず決裂したようです。ここでも、演劇会議は一〇部ほど読まれております。

諏訪市の劇団「のぎく」。昨年一月末に岡谷市の演劇祭で「彦市ばなし」を上演し、

年演劇行動で観客の減少を招いた自分たちの体質の弱さ(普及の面での後退的姿勢)について話し合い、「神通川」でそれをのりこえる努力がなされたこと、この姿勢は今後の公演活動の中に継承されなければならないことが確認されました。その話し合いの上に五木指の活動を推進することをきめました。

- 一、演劇運動を通して平和と民主主義を守り明るく生きがいのある社会をめざす。
二、働らく人々を励まし、喜こんでもらえる新しい演劇の創造とそれにふさわしい理論の学習と技術の向上をめざす。
三、劇団員を増やし、地域でもっと活潑な活動をしていく。
四、自分たちの稽古場をつくる。
五、団内の団結を深め、沢山の仲間と連携する。

以上の方針にもとずいて、五月公演の脚本選衡に入っています。秋の公演は小谷道雄の

以後、保育園、青年団の中で、三、四回公演しており、来る三月二八日の諏訪労演の演劇祭にも出演を決めております。

劇団「ニヤロメ」は、下諏訪町の事業所の中の劇団で、三月二八日の演劇祭に「みみずはりつけ」で旗上げします。

伊那谷の劇団「権兵衛」は、昨春秋、「助郷」を「権兵衛峠」に続く創作劇として、伊那谷四ヶ所で上演し、意欲的なところを見せ

ブロック特集

奥羽ブロック報告

千葉真二郎 (弘演研)

「あけぼの」に決定、手直しの作業に入りました。最近県内での公演要請が相次いでいます。問題はそれに応えられない劇団側の体質の弱さです。今年の活動の中で、働らく人々の要求に応える体制をつくるのが重要な課題になるでしょう。七〇年演劇行動はそのための重要な経験となりました。

いま県内で活動している劇団は、甲府に「甲府演劇集団」富士吉田に「表現座」があり創作への意欲もみられます。又個人で創作している人もあります。四月の創作部会にはこれらの人たちに呼びかけて、東リ演を理解してもらおう機会にしたいと思ひます。

目下やまなみも信濃小劇場も自らの体質強化に集中している傾向です。しかし、それぞれの県内での劇団との交流は続けられていますし、それを基礎とした山梨と長野をむすぶ活動が遠からずはじまるでしょう。

その二

横山伸

長野県内の中で、昨年、活動を続けてきた劇団は、上伊那谷の劇団「権兵衛」と私たち信濃小劇場です。長野市の劇団「ゆき」は、昨年公演活動は全くしておりません。一昨年

ています。

信濃小劇場は、昨年ゼミナル以後、「モレット教育」の作り直し、児童劇「和尚さんと小僧さん」の上演をしたのみです。以上。

追伸。劇団「のぎく」が一〇月に、集団創作「血涙の川」。五、七月頃に子供大会の企画、また、劇団「権兵衛」が集団創作「買い出し部隊」(仮題)を一〇月という計画があるよしなので追加します。

一月九、十日の、伊豆下田での運営委員会

の席で、我々、と言つても、申しわけないながら、「弘演研」一集団だけの、東北Aブロックは、表題にあるとおり、奥羽(青森・岩手・秋田三県)ブロックとなった。東北Bブロックは、現在加盟集団がないので、いずれ「仙台小劇場」が再建され、酒田、山形に働

きかける段階で、東北ブロックと名称されるだろう。東北六県という本州三分の一の広さ

にかけて、東北演劇集団が一つというのは、我ながらいかにもなげけない。

昨年九月下旬、奥羽労演(盛岡・釜石・青森・八戸・弘前・秋田)活動者会議が、盛岡市でひらかれ、弘演研の作問が講師としてよばれたのだが、時間を別にもらつて、東リ演について話し、各労演のつかんでいる、各地域の演劇集団について話ししてもらつた。また、各労演から各集団に対して、東リ演加盟

をすすめてもらうよう、それもだが、それよりもまず、西リ演をふくめて、全国的規模で民主的演劇運動体として東リ演というものがあるということも話してもらいように頼んでおいた。もう一つ、弘演研としても交流したい熱望を、伝言として頼んだ。盛岡市内にも秋田県内、市内にも、伝統ある二十年、十五年の劇団があると言う。釜石にもあったが、活動は休んでいる、即ち現在労演の中心部分だからだと言う。

秋田市には、秋田市民劇場、劇団スカンポがある。市民劇場のかなり年輩の人が、一昨年、青森県労演の「へおりん口伝」の現地調査の時、参加して下さっていた。スカンポには仙台小劇場にいた阿部君が参加している。

弘前には、創立二十周年を昨年むかえた、劇団「雪国」がある。昨年十一月、二十周年記念公演として、本田英郎・作「神通川」を上演している。五所川原市に今度、労演結成準備会のメモ、バーが中心となって、劇団レオを結成した。第一回公演を昨年十二月、後藤繁夫・作「百姓の嫁ご」で幕を開けた。秋田県能代市に、若い女性三、四人で頑張っている、劇団「まくら木」がある。作間の友人である詩人の紹介で知ったのだが、今後とも接

触を深めることになるだろう。青森市には、

「演劇会議」に何度か顔をだしている、劇団「支木」がある。昨年十二月、きしだ・みつお作「土のうた」を上演、成功している。

しかし、弘演研とも兄弟みたいな関係であり一九六八年には黒沢議長までオルグに来青し同じく一昨年第一回青森地区ゼミで再度来青し、一晚交流したりし、また会えば「はい（加盟）はい」と言っているが、いまだには、いろいろなのは、どこに、なにに事情があるのだろうか、理解できない。やはり、我々の力不足なのだろうか。青森市にはほかに劇団が、いくつもあるようだが、全く接触がなくわからない。八戸市には「八戸リアリズム演劇集団」がある。これは八戸労演が協力し、と言うより指導して、労演の活動家をおくりこみ、つくった集団である。大橋喜一・作「消えた人」などで一応の力量をみせてくれたのだが、転勤その他で次々と団員がへり現在四・五人で、小供劇場をやっている。弘演研とも仲間なのだが、まだ加盟ははやいと云っていたが、昨年来、「東リ演」案内（資料）が怒しいと言っている。これは他の集団の声でもある。

八戸市には他に、劇団グループ「河」があ

方からの参加が一人もなかったのは、残念であった。もしそうでなかったら、六十人以上の参加者を得たと思う。

ゼミは、次のような日程ではこぼれた。

○午前十時～十二時・公開稽古・弘前演劇研究会・早乙女勝元原作／作間雄二脚本・演出「秘密」

○午後一時半～二時半・講演「名古屋に於ける労演と地域劇団の運動の提携について」講師・若尾正也氏

○午後三時～五時

・創造・普及の問題についての討議。

・「青森県地域劇団連絡会議（仮称）」結成についての討議。

我々の稽古を殆どの人はすでに知っていたが、もちろん何人かの人たちは初めて接してびっくりしていた。それは、いつもびっくりされて、我々が今度はびっくりするのだ。作間の演出は、厳しい。しかし、芝居をやるうえで、厳しい演出はありうるだろうか。若い人たちは、稽古のことを練習レンシューと言いが、芝居では稽古であって、練習ではない。幕間をマクマと読む、知識力のなさない間違いと、問題の質の全くちがう、間違いである。その辺のところから、普通の稽古を厳

しいと見間違うのかもしれない。我々の稽古は、東リ演では、黒沢氏、萩坂氏、若尾氏、隆子さんが見て知っているが、皆さんべつにびっくりもしていない。

若尾氏の講演は、まとめる話としてでなく、問題提起として話したいということで始められた。「演集」の問題は、即我々の問題であり、名古屋の地域状況とその運動の問題は、即我々の地域の問題であることはすぐ理解できた。しかし、それを東リ演の、東リ演加盟集団のかかわり合いの問題として残念ながら、受けとめられない、そういう性格のゼミに終わった。もちろん、これからのための契機とはなったと思うが、若尾氏の話しを、ああ何処でもおんなしだなー！というところで終ってしまう、感嘆詞以上を出さない無念さが、東リ演加盟以来六年になろうという弘演研の力の弱さが痛感として残った。

創造と普及についての討議も、討議というより、右集団の自己紹介や、現況の話しあいであった。結局、「県地域演劇連絡会議」（仮称）も、いい話したが、皆と相談してとかもっと多くの集団へ働きかけてとかで、そのまま終ってしまった。劇団支木は、積極的に

る。ここは、前衛的なものを追求しているようだ。弘演研の八戸労演の特別例会は、昨年十二月で第五回になったが、毎公演「河」のA君が照明を積極的に行ってくれている。八戸から二〇軒南へ、三戸町がある。そこに三戸演劇研究会がある。学校の先生が中心となって、卒業生たちで組織されていると聞く。

以上、弘演研として接触している集団にかざられたが、もちろん県内、秋田、岩手に、他にもっと沢山の集団があるに違いないので今後もっとブロック内の状況をふかめたい。ただ、報告でふれた集団は、東リ演加盟を一度はすすめられている集団であり、すくなくとも東リ演の存在は知っている。

第二回青森県地域演劇ゼミナールは、十一月三日の「文化の日」に、弘前市に於て、名古屋から「演集」の、若尾正也副議長を講師に招いて催された。劇団スカンポ（秋田）劇団まくら木（能代）劇団レオ（五所川原）個人参加として、劇団雪国（弘前）劇団梁（弘前大学）劇団支木（青森）青森労演 弘前労演 弘演研 八集団四十九人（演集の若尾隆子さんも来弘）が集った。ちょうどこの日、八戸労演の前進例会日であったので、八戸の

第三回ゼミは、七月下旬を予定している。

弘演研は、昨年東リ演総会のあと、早乙女勝元・原作／作間雄二・脚本・演出「秘密」を、弘前労演、八戸労演の特別例会として、十二月十三日・八戸市、十五日・弘前市で公演した。いちばん良い批評、脚本について、「自分一人で読んでもつたいないから、東京の友人に送った」舞台について、「今まで観てきた労演の例会のなかで、いちばん良かった」悪い批評、本について、「初恋の女に無理して金送るなんてナンセンス」「女主人公みや子に生活感がない」舞台について、「今更、お涙ちょうだいでもあるまいし」

八戸労演では、脚本感想文集を出し、舞台については、秘密・劇評集を出している。八戸労演と弘演研の運動上の提携は、一九六七年四月の「キューポラのある街」からだから四年になる。その間、弘演研の舞台はみな特別例会にしている。東北労演は隔月例会だから年六例会。しかし、昨年の八戸労演は、「統おりん口伝」「秘密」をやったから、八例会になる。今後とも、八戸にかぎらず、青森県労演として、提携をふかめる仕事が、弘演研にある。

前にもふれた、仙台小劇場のことだが、二

月四日、作間が「労音労働不当課税とりけし請求」の裁判の証人として、仙台高裁に行き小劇場の早川氏と会ってきた。元氣いっぱい立ちあがっているという。次の詩は、劇団仙台小劇場が仲間を求めるためにつくった、チラシののっていった。

すばらしい劇をつくるために

仲間がほしい！

—— 仙台小劇場 劇団員募集 ——

仲間がほしい！／それはきみだけのねがいだろるか／おれだってほしい！／だれだってみんな仲間をほしがっている／待っていたって 仲間はできやしない／つくるろよ 仲間を！

あそこへ行けば仲間がいる／胸のうちにあることは なんでも語りあえる／なくした元気をとりもどすことができる／人間らしいくらしをつくり出すために／どうしたらよいか／そういう仲間の環をつくりたい 仲間の輪をひろげ／むすびつきをつよめ／もっと多くの働く仲間のねがいを／すばらしい劇にして 仲間によびかける／そういう劇団を 私たちはつくりたい／そのために あなたの力をかしてほしい！

がきっかけである。

以上岡山・広島・山口・鳥取・島根の五県を網羅して結束を固くし、近い将来は「中国・演」独立の旗も高くかかげよう(?)と、鼻息だけは荒いが、目下のところかんじんの加盟三劇団のハナイキすらかなな拮据わずに弱っている。

申し訳ないがブロック全体のことについてはこれくらいしか報告できないので、以下、昨年十二月に、広島労働と広島演協の共同企画作品として、労働例会で演協が合同公演した、上田修(広島木々の会)作「ひろしまの冬」のことについて触れていきたい。

劇団 木々の会 II 『種なし葡萄』
劇団 月 曜 会 II 『草履テキ』
広島国鉄演劇サークル II 『C・3』

合同公演に参加した三劇団についての落書きである。

「種なし葡萄」は、誰しも美味いと言ひ、たしかに口あたりは良いが芯はない。「草履テキ」とは、読んで字の如く、すりされた草履のようなビフテキで、筋ばかりあって味が無い。

するそうだ。大丈夫、仙台小劇場は蘇った。東北も、だから、奥羽ブロックも、東北ブロックも、今年、来年と頑張れば、きつと仲間が出来るだろう。総会で、一人ブロック会議をひらき、作間が自問自答しないですむよ。うな時が、かならずくるだろう。

種なし葡萄と草履テキ

ブロック特集

〈 中 国 〉

土 屋

(月 曜 会)

清

中国ブロックの活動報告を送れとのことである。が、ブロック担当の月曜会の怠慢もあって、去年の総会以来ほとんどブロック活動らしいものをしていない。したがって残念ながら劇団ごとの詳しい近況は把握していない。運まきながら、一月に入ってブロック会議を開いて計画だけはたてた。五月下旬に第三回創作学校。六月下旬にブロックセミナー。この二つを成功させることを今年度の主要な目標におくことにしている。

中国地方の加盟劇団は、広島市の月曜会、広島県東部の福山市にある劇団「福演」、山口県宇部市の「若者座」。広島市内は別として、西り演との接触を保っているこの地方の

「C・3」とは、針でくるくる巻きだしてはチユッと吸う、あの螺のことで、独特の風味はあるがときにあたる。勿論、殻は固い。

さて、広島演劇サークル協議会(演協)は、結成以来十二年の歴史をもっており、多いときは八サークルくらいをかかえて、毎年の演劇祭を中心行事に、交流結束をはかってきた。この間、多くのサークルができてきたりつぶれたりをくりかえし、結局現在では最初から中心になってきた前記の三劇団だけになっている。もっとも、活動が断続しがちではあるが、その他にも、電通、専売、看護学校等にサークルがあって、折にふれ協力関係は保っている。また、広島ではもっとも古くからの専門家を指導者にもっているRCC(中国放送)劇団があつて定期公演もおこなっている。これらのところにも合同公演に参加や協力を呼びかけたのだが、色んな都合があつて実現しなかった。で、演協といつても、三劇団合同公演という実質になった訳である。

この三劇団のとりあわせは、広島演劇伝統や特徴の流れをよくあらわしているといつてよい。そして、それは大なり小なり各地に共通する色あわせかもしれない。月曜会は、戦後のいわゆる「自立演劇運動」の尾をひい

岡山に、全国鉄演協にも加盟している「岡山職場演劇集団」。ここは古くから代表者岩城薫氏の創作劇を中心に地道な活動を続けており、近く西り演加盟も実現しそうである。このこと協力しあいながら、隣接した玉野市に、玉野造船の労働者を中心とした劇団「炎」がある。福山には、公演ごとに意欲的に創作劇を発表している若い集団の「野火」。山口市に、宇部の若者座と兄弟劇団ともいべき演劇サークル「トラム」。演劇歴は「若者座」よりも古く、座付作者をもっている。まったくの空白地帯であった山陰地方で、米子市の劇団「ぐみ」、松江市の「あらぐさ」の二劇団と昨春から連絡がとれはじめた。二

た地域サークルが出発点であるし、木々の会はもともと前記RCC放送劇団の職業タレントをリーダーに、その研究生グループの劇団として存在していたものだった。前者が生活や現実の描写を重視するところから入っていくが、後者は比較的アカデミックな演劇伝統をつぎ、より美的表現に傾斜する色あいをもっていた。国鉄演協は、今でこそ国鉄マンよりも雑多な企業のメンバーが多くなって、職場サークルとしての独自性と方向を求めるのに苦しんでいるが、いわずとした根っからの鉄チンの職場演劇として育ってきたもので今も基本としてはその旗をおろさずにいる市内唯一の伝統的な職場サークルである。

こうした色あいの違いは、互いに競争し、且つ同じ演協の中では協力しあいながらも陰に陽にギクシヤクして、なかなか同志的な演劇運動に合流することを難しくする。演技力の上では、明らかにわれわれより上手い木々の会に対しても、こっちはそうは認めたくない。「タレント志望ばかりのサロンめが」とかげ口を叩く。木々の会は木々の会であつてわれわれをみて「りくつや意義ばかりで芝居ができるか」と、言ったかどうかは知らぬが、そういうわれても仕方のないところもある

演劇祭などを嘗々としていっしょにやっても、さてすんだ後のうちあげとなるとサツと二つの流れができる。木々の会はさつさと喫茶店かどっかにいってしょう。月曜会と国鉄は、日頃けっこう反目しけんかもしているくせに、酒となると入り乱れて馬鹿酒をくらうそこでひところは、ポトワインの木々の会屋台の月曜会、ホルモンの国鉄、などといわれたりもした。ただし、これは十年前のことである。しかし、今は芝居づくりの質の上では、明らかな違いがみえても、このようなスタイルの違いで三者を区別することはまったくナンセンスになってしまった。うちあげにしてから三者入り乱れての馬鹿飲みである。吠え、喰らう豪傑も、むしろ木々の会の方が多くなってしまったようである。

酒のことばかりいうようだが、ここが肝心だ。何故そういう変化が起ったか？重要なきっかけのひとつは、木々の会の質が変わったことである。

六年前、RCCはマスコミ反動化と合理化の全国的な波にのって、劇団、楽団、合唱団のほとんど全員を首切ってしまった。団員たちは、ただちにRCC芸能員労組をつくって首切撤回斗争をはじめた。同時に、文工隊を

これを、私たち創造主体の内側の問題としてみると、三つの上演活動は、ともに五〇年代から六〇年代初頭にかけてとはちがった質での、サークルと専門家の新しい結合の歴史であったと思う。私たちはこれらの所産の上にたつて、その結合をより確かな、一体化したものにうちぎたえ、次の時代に備える必要に迫られていた。また、ひとつは原水禁運動の分裂から高次元の統一へといるまことに厳しい試練と課題のもとに創られた作品であり、ひとつは東洋工業の、迫りくる自動車産業再編成を予測しての大合理化攻撃とまともに対決した労働者のたたかいをうたいあげており、ひとつはこれまたマスコミ反動化と合理化の嵐に、自らの文化をもって抵抗した文工隊活動であったことを考えるとき、これらは互いに関連しあいながら、大きくは六〇年代全体を通じて凄まじい勢いで進行していった新安保体制と、それに対決する全国的なたたかいの様相を、ありありとその作品内容なり上演形態なりに反映していたことに気づくのである。そして、そこに共通していたテーマはいえ、ひとつに「統一と団結」であり、「労働者の連帯」ということであつた。

つくて全国をまわっていった。そのレパトリリーのひとつ、「列外三名」や「ムードのある詩」は、東西リ演の各地の劇団でも活用されてよく知られているとおりの。こんどの合同公演「ひろしまの冬」の作者、上田修はそれらの文工隊作品を手がけてきた人である

現在、斗争は和解で解決し、文工隊も一応解散の形となってそれぞれの仕事についているが、この斗争をきっかけに演学協の内部もRCC劇団員をみる眼が変わってきた。彼らが職業タレントであると同時に放送労働者でもあることを肌身で認識したのである。そこには当然演劇以前の労働者の連帯が産まれていった。首切られた旧劇団員四名は、布団屋、不動産屋、コピーライター等様々な仕事につきながら木々の会に残って芝居をつづける。

木々の会の組織自体も、最早タレント研究生グループではなくなつて、地域劇団としての着実な道を歩みはじめる。六七年の「金魚修羅記」、翌年の「鳥」、そしてこの二年間の「イルクーツク物語」「アンネの日記」の単自公演と、次第に舞台のアンサンブルも観客動員も定着してゆき、劇団の団結も高まってきたのである。

三劇団の関係が変ってきたもうひとつの要

ところで、今日依然として重要なこのテーマも、なかなか直截には切りこめない状況がある。統一といひ、連帯といひつてみても、それを妨げる全体的な関係を、より重層的に、構造的に描ききることなしには確かなものになり得ないことを誰しもが痛感している。

日米共同声明と四次防計画が米日独占の分ちがたい意図として不気味に動きはじめた七〇年代の幕あけは、これまで私たちのいつてきた「連帯」の中味をさらに立ち入って点検し、それをいっそう確かなものにするために、あらためてこのアジアの中の日本とは、日本人とは一体何なのかが問われねばならぬという、重大なテーマをわれわれの前につきつけたのである。

「ひろしまの冬」の内容は、「韓国」に朝鮮人被爆者の実態を取材した広島の一カメラン（彼も被爆者である）が、その氷りつくような現状を知ることによって、これまで自分の意識の中にのぼってきよくなった「日本人」という存在、侵略の歴史を背負い再び加害の刃をふりかざそうとしかねない「日本」の中の自分という存在をはじめて問われる。そしてそこから逃げようとして逃げきれず、さりとて立ち向う方法も見出せぬま

因は、RCC芸労組の闘いと相前後してとりくまれた、「河」の演学協合同公演をはじめとするいくつもの共同の仕事であった。東洋工業下請企業労働者の、全員解雇撤回集会を支援しての構成劇。赤旗びらきでの郷土史劇の上演。昨春の七〇演劇行動。あるいは原水禁大会の文化行事へのとりくみ、等いずれもそうであった。こうした共同の仕事をつうじて、互いにかまえていたものや、うわべのさうだけでとらえていたものが、一枚一枚はがされていったのである。

私は、広島における、六〇年代の演劇運動の（創造面での）もっとも特徴的なものを問われたとき、即座に、「河」、「こぶしよ火を噴け！」（前記不当解雇撤回集会での構成劇。争議団とともに創作され上演された）、RCC芸労文工隊の活動、の三つをあげる。

この三つの上演活動は、それぞれに普及と創造の水準において六〇年代のピークを形成したという意味合いをもっているだけでなく情勢の要請にこたえて、ぎりぎりの必要性から産みだされたという点において、また、たたかいと結合したところから創り出され、そのことがまた質の高さを保障していったという点において大きく共通している。

まに激しく苦悩する——と、いったことが主軸になつていっている。そして、この主軸に、あくまで職場での労働者としての連帯を基礎に生きようとするマスコミ労働者や中小企業の若者たち。日本に帰化しようとする朝鮮人の青年と主人公の妹との恋愛。ポッカリと空洞化したままの、主人公とその妻の愛情や産まれた被爆一家の家庭内。などを配置している。作者はこのような方法によって、被爆意識の問題、民族意識の問題、そして最終的には日本人の戦争責任の問題、という大きな三つのテーマを重層的によりあわせ、そこに現状の危機と、にもかかわらず切り開をねばならぬ展望を、どこに求めるべきかを探ろうとしている。

私は、作者がこのようなテーマを設定した第一の原点は、やはりかつて作者の所属したRCC芸労組のたたかいであり（首切撤回の斗争と文工隊の中で、彼らは在日朝鮮人たちと深い交流をもち、その民族的な誇りと意識の内容に感動し様々のことを教えられたという）、もうひとつは、広島に住む人間としてありのままの「ひろしま」を、被爆者の内面の複雑なもの複雑なままに描いてみたい、という思いであつたように思う。

しかしその際作者には、かつての文工隊作品で展開したような作風——寓話や諷刺の方法によって、たたかひの報告や団結の方向を明快に訴え、舞台と客席を一直線の連帯意識で結ぶやりかたでは、今日の状況はもはや描けないという考えがあり、むしろ安易な連帯は拒否する厳しい自己点検からしか、真の連帯は産まれないという考えかたがあったように思える。ここで作者が、文工隊活動の対象としてかつて設定した観客は、すでに団結し選ばれた観客であり、こんどの労演例会のような場合はそうでないという風に分けて考えていたとすれば、それはちょっと飛躍でありたとえそれが「意識的」な観客であるにせよその意識過程や中味をさらに深く立ち割ってみることから、より普遍的な方法をつかむことが可能であるし、そうでなければならぬという私なりの批判はある。が、それはさて置いて、ともかく「ひろしまの冬」では、安っぽい連帯や、軽々しい未来への展望は拒絶しつつ、しかもやはりそこを信じていく以外にはないという両面が、さして激突することもなく、ひたすら主人公の内的心理の世界をつうじて泥々と展開されていくのである。そこに作者の好みも多分に手伝って、過去私たちが

はこれをうけとめる演サ協の側の、どうしても上演しなければならぬ芸術的主張をどうまとめるかであった。ところが困ったことに、奇妙にもちあげたりする意見はでてきて、不満をもっている連中が、最初のうちはウンともスンとも公開の討議の場ではないのだぞとくせかけでは「どうもこれではねえ」などといっている。それはそれで作者にたいする遠慮があったとしても、一番我慢がならなかったのは、作品内容で徹底的に批判するならともかく、「やっぱり」木々の会」だからつくりかたがちがう」とか「月曜会だからああいふ」とか、例の色わけでもって簡単に判断する向きが依然としてあったことだ。つくりにかたにちがいのあることくらい最初からわかりすぎるくらいわかっていることだし、それがまったくくなくならぬ合同公演などしなくてもさっさといっしょになつてしまえばいいのだ。しかも、どだいが、似ているようでも本当はどどこまでくちがっているのか、ちがっているようで本当は共通しているものなのか、それはとことんまで掘ってみないことにはわかりはしないのだ。とにかく、討議がなかなか噛みあわぬ。たまりかねた制作担当の私は、「わしはこの作品が気に入らんと

が経験してきたようなリアリズムの方法ではどこからとりついていいか判断に迷うような一種独特の作品世界ができあがった。たとえば、争議団物語の「こぶしよ火を噴け」のよるな場合を「むぎだしのリアリズム」と呼ぶとすれば、こちらは「感覚のリアリズム」とも呼ぼうか？

労演と私たちの間で、共同企画の話がもちあがったのが一昨年の春。この間いくつかの候補作品があがったり消えたりして、結局上田修の創作でゆこうと落着いたのがその秋。上田氏が書きにかかっている間、私たちは「七〇演劇行動」などを経て、七月から具体的な公演体制づくりに入った。演出を、作者と同じRCC芸秀の出身であり、劇団木々の会所属の栗栖忠士氏。演技陣の中心は木々の会がもち、月曜会と国鉄は、演技者の選抜に応じつつ、主要には制作、舞監グループ、装置をうけもつ。音楽は矢張り芸秀時代からの音楽家。美術を地元の画家と、もと「はぐるま座争議団」の山口の矢野氏。労演と演サ協の間に制作委員会を設け、これを創造・普及・財政の三部門に分ける。演技者には特にNHKドラマグループから一人加わって頂くこともなり、また、効果団は民放労連RCC労

いっとるのに、それを説得してくれる人間もおらんようじゃどもならん。上演は中止」などと怒鳴る。こんな演サ協の様子をみて、労演も不安を感じるのは当然である。「本当に大丈夫か？」「上演日を延期してもいいから、作品討議と改訂にもっと時間をかけたらどうか」と提案してくる。「そん」に演サ協が信用できんか」とこんどは木々の会が怒ります。こういう状態が約一ヶ月つづいた。すでに稽古場では、けいこをはじめている。ところがけいこに参加しているのは木々の会の役者ばかりで、その二階では月曜会がゾロゾロ集まってまだ作品討議をやっている、という状態であった。

このような噛みあわぬ状態を、なんとかまとめて上演にこぎつけたのは、根底には前に述べたような三劇団の協力関係の積み重ねがあったからではあるが、直接的には、なんといつても、最後まで粘りに粘った演出者の努力があったからだし、作者の作品主張を、異論は出つともちゃんとうけとめ包みこむことのできた「木々の会」の力であった。

このところ相当もたついていた月曜会や国鉄は、こんどばかりは木々の会に相当差をつけられた形である。腹ン中では「こん畜生め

組の全面的なバックアップを得、作中ふんだんに使われる「韓国」被爆者の記録写真の提供者もきまった。こうして、「河」や「七〇演劇行動」のときを上まわる上演体制ができあがっていった。特に、企画の段階から労演と共同で準備し、しかも通常例会でとりあげるといふのは広島では、はじめてのことであった。

脱稿が八月中旬。直ちに検討に入ったが、作品のうけとめかたは様々であり、全体としてどう評価すべきに大きな戸惑いがあった。「むぎだしのリアリズム」で読んでいくうちには、どのテーマを主軸にすべきかさっぱりつかめないのである。労演からはさかんに意見がでてくる。「いったいなにが言いたいのか？、あれもこれもテーマがあつてわからぬ」「朝鮮人被爆者の問題を扱っているというのに、南北分断の歴史や統一の観点がぬけている」「地元の公演というからにはもっと身近な作品を期待していた。これでは私たちはどこにもいない」「敵がはつきりしない。展望がない」「俺たちに戦争責任はないのにそれを感じろというのか？」等々。

労演の側から様々な意見がだされてくるのは、印象批評も含めて当然のことだが、問題は「が！」と思いつつ、やっぱりそのことを喜びたいと思う。これまで、とかく演技者中心の劇団といわれてきたこの劇団が、こうして劇作家を育てあげ、創作劇をもつにいたった意味は、広島島の現状にとって非常に大きいから

上田作品にたいしては、そのドラマトウルギーにおいて、演劇観において、なお大いに異論もあり不満もある。だが少くとも作者が今おかれている現状の中で、もたえ苦しんだものが正直に作品世界の中に投入されているという点では、演サ協内部で、文工隊作品当時以上の作者との信頼関係がうちたてられたそれが、最終的に上演を決定できた一致点である。

今日の状況に直截に切りこめる方法がみつからぬまま、いろんな意味でわれわれは混乱している訳だが、だからといって手も足もせずに、単なる理論学習や研究上演のくりかえしなどで、いつまでもそれを探し求めていてよい訳がない。少々の劇的破壊や抵抗は覚悟の上で、今これしかないと思うものを大胆にうちだしていく方が、今日全体の前進にそつては貴重な意味をもつのであり、その点で私たちは完全主義であつてはならぬだろう。そ

うした意味で、上田氏が大変に困難なテーマにとりくみ、われわれの前に提示してくれた勇氣に敬意を表したい。

上演は十二月十一・十二日の二ステージ。観客数は約千六百であった。上演結果の反響は、「演サ協も十年の歴史を経てここまで力をつけてきたか」「これなら中央劇団と較べても遜色はない。また是非地元公演をとりあげてくれ」といった好意的な意見も多くでて私たちが喜ばせたが、やはり、総じて作品の主軸を負う主人公のテーマが最後までわかりにくく、かえって傍系の、主人公の妹と朝鮮青年との恋愛や、朝鮮人被爆者の形象などが強く印象づけられたようである。

こうした上演結果をどのようにうけとめるべきか。まだきちんとした総括はしていないが、私は中心テーマが鮮明にうちだされなかった結果については、ひとり作者や演出者の責めにだけ帰すべき問題ではないと思う。

ひとつには、こんどの合同公演体制をくむにあたって、先に六〇年代のピークとしてあげた三つの上演活動について、その成果と欠陥を明らかにする十分な総括を用意すべきであったと考える。作品ができあがらない段階でも、それらについて討議することは、各劇

団の考えかたのくいちがいや共通点を発見して体制を固めていく上に有益な事前準備になるからである。

また、こんどの場合、作者の資質や作品傾向についても、事前によくわきまえた上で、創造集団と劇作家の間の、きちんとけじめをつけた関係をたてていなかったことが、作品の検討をする段階になってストレートな討議を非常に妨げている。一体全面的な依頼作品なのか、できあがった段階で上演台本としての採否を決定するのか、そのあたりにあいまいなところがあつて、作者や演出者にかえて不愉快な感を与える結果になった。

さらに、広島演劇運動の伝統的な弱点として、あまりにも「もの言わぬ演技者」が多いということ。作品検討といえは、演出部や制作委員会だけの仕事になってしまつて、中心俳優もあまり参加しない。参加しても、あまり責任をもった発言をしない。作品にたいしては、演技者も作者や演出者と同等にわたりあうだけの責任をもたねばならぬし、またそれだけの力をつけぬといかんのではないか。気のつくままを二、三あげてみたが、三劇団の関係は、基本的には改善されてきたといつても、広島演サ協はものごとをきめるにあたって、またそのあと始末するについても

なお非常に浪花節的な体質を残していることを大いに反省せねばなるまい。これから労働との関係をさらに強化して、今後恒常的にこんどのような共同企画の体制をつづけていくとすれば、現状のような演サ協の体質ではもうどうにもならぬことは眼にみえている。

今後の演サ協をどうしていくべきか。私たちは合同公演の結果、大変な重い荷物を背負いこんでしまったようである。

ともかく、私たちは、いつまでたつても「種なし葡萄」のままではいる訳にはいかない。やせたりとはいえビフテキはビフテキだ、とか、天下のつぶだ、とかいって威張つていてもはじまらないのである。一日も早く、あの芯は芯であくまで固く、肉は肉であくまで柔らかく分厚い、見事に水々しい桃のようになつて、広島演劇運動を定着させなくてはならぬ。

最後に、合同公演を成立させたもう一方の力、広島演劇のこの数年の前進ぶり、演サ協との関係について触れぬ訳にはいかぬし、それなしには本稿の意とするところもまったく片手落ちになってしまうのだが、紙数がつぎにしまつて残念ながら割愛する。ただ、演劇との関係も、この共同企画をつうじて以前とは比較にならぬ信頼関係を産みだしていることだけをつけ加えておく。

青年団演劇に「テントからの報告」を

上演させるの記

柏原武蔵

(劇団 福演)

広島県福山市。瀬戸内海沿岸に位置する私どもの街は、市出身の小山祐士氏の戯曲にあらわされるような、(ひかりにみちた、日本の地中海を思わせるような)へんてつもない城下町だったし、備後餅の落ちつきをもつ街だった。だが、今は日本鋼管の進出で工都と

讚われ、ついさきごろは三菱電機のカドミウム汚染のPPM、日本一と結構な折紙をつけられた。あいつやスパー、大型企業の進出で、かつて縁台将棋を楽しんでいた街の小企業主は、血眼で下請商戦を生き抜かねばならない。

この地の方言でいえば、「どでゃあ、ワヤクソ」になりかけているこの福山市から、支線で二十五分入ったところに、芦品郡駅家町がある。人口一万三千人。福山市、府中市へ通勤する労働者がふえている。駅家町服部部落は、ハットリの大池で有名な山間の農村。

家庭をもった主婦、若い娘もマイクログラスに送られて紡績工場で一日ミシンを踏む。若い者は寝に帰るだけ、日曜などろくに家にも居ず月賦で買った車を乗り廻し、能率の悪い百姓仕事には振り向きもしない。

いま劇団福演の稽古場には、何人かの服部青年団員が、事あるたびに手伝いに、(呑み)顔をみせてくれている。健康で明るい青年だ。髪をのびしてビニール袋をふくらませておるとき、新宿あたりのテアイとは、全然違う。

彼らと福演との出逢い、それは一九七〇年九月であった。彼らが青年団演劇に取り上げた戯曲——それが西り演、岡崎繁氏(京芸)作の「テントからの報告」であったことからツキアイである。

いまこそ福演の私どもにとっては欠かせない

顔の誰それであるが、彼らとそもそも縁を結んだのは、福演の若手坂本である。ある民主的な席上で一人の女性と話しをしたのがキッカケ。話の内容はこうだ。駅家町の当局が役場支所(連絡所)を、財政合理化、利用価値の減少、広域行政の一環として廃止する方針を出して来た。「馬鹿げたこっちゃ。あれがあるがためにナホド銭が要ろうに」。部落の長老につぶやきがあった。一家の働き手は皆街へ出かけて、留守を預つて百姓、山仕事をするのは年寄である。年寄には足がない。廃止されれば忙しい中を四キロ離れた町役場までいちいち降りて行かねばならない

服部青年団ではこれをキヤッチして討議にかけた。「青年団活動ではなくてそれは政治活動だ」としる者が半分はいた。フォークダンスやコーラスだから集まっていた若者たちには、死亡届をするのが役場だ、ぐらいに思われていただろうし、そんなことをするのは、カッコワルクてコマルノコトだったろうし、第一嫁入り前の娘の親が許すまい。幾晩も話をして、固まった部分の青年達で、とにかくアンケート用紙をもつて一軒一軒歩こうということになった。当時を、桑田法子さんはこう書いています。

「こうして集められたアンケートの結果は圧倒的な反対の声。地区民無視の行政に対する不信。うずもれた住民の声に、あらためてこの問題の重要性和必要性を感じたのです。このままではいけない、地区全体が取組まなければいけないということで、早速婦人会へ呼びかけ、田植えの終り頃を見計らって、青年団、町青連、婦人会の合同協議が行なわれました。会場一杯の人に、私達はこれまでの経過を説明しました。婦人の方からも活発な意見が出され、問題意識は高まっていきました。そんな話し合いの途中、突然、ねえ、みなさん、これからは議員さん選ぶにもうっかりできないねえ、こう住民のことを考えてくれんよようじゃ。演説はあやうて、当選したら後は知らんブリじゃあねえ。みんな思わず、ワ〜と笑い出し、そしてお互いに、そうじゃね、とうなずきあっているのです。」(雑誌「青年」一九七〇・六。財団法人日本青年館発行より転載させていただきます)

坂本が知りあったのはこの桑田さん。どこにそんなエネルギーがあるのかと思わせる細っそりしたひとだ。西リ演の創作学校にも出席して、講師の大橋喜一氏の話熱心にメモしていた。桑田さんは、町長との団交をこう

であった。劇団でももう一度読んで検討しようということにする。今、彼らが欲しくなくても、このテーマはむりやり飲み込ませてもいい筈だ、と私は思った。「署名」の配役(後述)とにらみあわせて、私が演出を買って出てやってみようという劇団では納得した。「時間がないから不さまなことになるねばいいが……もしそうなら青年団活動にひびくからなあ」と心配するムキもあった。それから五日程音沙汰なかった。やっばりムリかな?と思っている頃電話で「やることにきまりました」と云って来た。上演から逆算して一ヶ月前である。しかも福演の小公演を前にしているの、それがすんでから行くとなると稽古の正味は二十日しかない。早急に台本を刷り、役はそちらで決めて読んでいくれとリーダーに指示する。

さて、その他に……である。青年大会の実行委員会は、小学校の講堂で演劇の部の発表会をやるのだが、何をどう準備していいかわからんから全面的に援助してくれないかと云って来る。ついでに、前夜祭に福演で何か短いものを演ってくれと云って来る。「オオゴトになつたぞ」―「だけどこういうことこそまさに西リ演思想だ。福演の任務だ。ヤッ

つづける。

「二時間余りにもわたる私たちの熱心な態度に、ついにのりくらりとした町長の態度にも変わり、もう一度考えてみましょう、情勢により後日返答します、とそれだけの返事しか得ることができませんでした。割り切れない気持ちで、それでもこの運動を通してわかった行政の実態を知ってもらうために、これまでのまとめとして三頁にもわたるプリントを各家庭に配ったのです」。

私もその団交のテーマをきかせてもらったが「キレる男」と保守筋から期待されるだけあって(畜生、私と同年代のくせに)町長はさわやかな弁舌でしかもインギンだった。坂本はこれらの話をドラマ化して彼ら自身に上演してもらうことを発意して、資料をもらったり、彼らと泊り込みだりしていた。

一方、慣例の広島県青年大会、芸能、文化の部が、今年の廻りもちは駅家町で開催と決定されていた。演劇、意見発表、書道、生花などである。坂本も、できればその場に創作劇でのぞませたい意向だったが、六月以降活発になった福演の活動その他で、時間がなくて間にあわなくなりそうであった。開催地としての宣伝の動きなどが目立って来ると、青

チャェ!!

福演ではこの演劇の部全体の(六チーム)照明を引受けるとともに(照明器具は市内のパレー団が借りに来るぐらいアルランダ)前夜祭では「署名」上演を約束した。一人をテントの演出に。一人を大会の照明に。残りの四人が「署名」にそれぞれ配置。総勢六人の福演の三班活動と笑ったものである。「ほんじゃ駅家班行くぞオ」ボサボサしとるとテントに負けるぞオ」「ごくろうさん」ってな具合で、車をとばして往復四十キロを二十日間通った。

稽古場がなくてフフウ云々って福演にくらべて、服部は鉄筋二階のぜいたくな福祉会館がある。(柏原註―二月二〇日、劇団の杉本が喫茶「スタッフ」(?)を開店し、その二階を劇団の稽古場に提供してくれて稽古場びらきを盛大にやって解決済みのことを朗報として報告します。)

土曜ともなると彼らの幾人かはここに毛布にくるまって寝る。最初の土曜日の稽古のすんだ後、「呑もうよ」ということになって夜があけるまでダベって、更に彼らは裏の小川に入ってから魚を手掴みで取って来て、更に

年団は「劇をやりたい」と意欲的になつたらしく、坂本もそれをあげて福演へ彼らを紹介した。

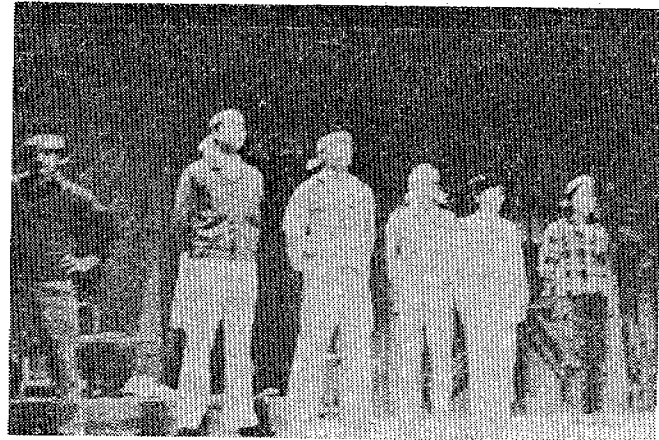
リーダーの井ノ口君、感激屋の章ちゃん、大陸的なノブさんなどが神妙にあらわれた。「青年の生き方にびびったりするような台本を紹介してほしい」連絡所問題の事情を知っているだけに正直困った。演劇会議のバックナンバーをひっぱり出して「テントからの報告」をみつけた(?)。岡崎氏よ、怒りなはん。まことに不細工な話だが、みつけた―のだった、僕自身。みんなにあらすじを話すと「さあ……」と顔を見合わせている。労働運動劇で難かしそうだし、なんとも劇らしくない劇ですなといったふうである。章ちゃんなんか僕に「劇というものはヤマがなきゃならない」と講義をしてくれる按排。

となりの府中青年団は、地元の民話を掘り起した「七ツ池物語」という創作で、去年も出したヤツを今年こそと練り直しているというのに、これは京都の話でしょ、と思つたらしい。

その日は、テント所載の演劇会議を二冊持って帰ってもらった。推せんする方もスザンきれいですと教えてくれた。閑話休題。暗がりの中、自動車、単車で集まって来るのは八時。それから稽古が十時半〜十一時。演出君の福山着は次の日になることもしばしばだった。今から思うと楽しかった道のりである。パトに福山ナンバーが十二時過ぎに山間を走っていることを質問されたこともある。

テーブル稽古。京都弁への危惧は現実のものとなつて頭を抱え込まれる。しかし克服する以外はない。(上演では抵抗のないところまでいった。)ナレーターAは、鍛金工場に勤めている、落ちついたリーダーの井ノ口君。二十日間ではかなりの負担のセルフ量である。ナレーションの部分は録音するか、といったら、ぜひノといったが、それは負けだということも本人も納得。一番早くセルフを入れ、本番もトチリはなかった。昼休み、彼は会社の休憩室で台本を離さなかった―と後で書いて感動した。必ずしも全員が芝居好きではないところを引っぱってゆくカゲの努力も大変だったろう。「もう芝居はこりごりだ」と思っているかもしれない。しかし、本番の日観客となつた彼のおかあさん、お姉

さんは、あの無口な彼が堂々とシンでやっているのを見て驚き、かつ大変な喜びようだったとノブさんが云っていた。あのときの彼を動かしていた、異様な迫力を忘れられない。組合役員Yの役者、ヤツさんは土建屋で働いて来るので、酒のニオイが時々、よく



休みもした。この人のささくれ立った手をみて私は「怒るな」と思った。舞台稽古の日、赤い腕章に「団結」と自分で書いて来てくれるよう頼んだら、少々頼りない字だが書いて来てくれて嬉しかった。母親役の寺岡さんは有線の交換手。「服部青年会に入っていると、自分から積極的に皆の中にとけ込んで行くこともしなかった。こんなことではダメだ。皆と一語に何かしたい」と思っていた時、青年大会で劇をするのだが……即座にしたいと答えた。自分をためてみたから。五時起床はつらかったけど、練習に行き、皆と会えるのが楽しみだった。劇が終った今、本当にすっきりしたと思ってる」と書いている。寺ちゃんよ、老けのメイキヤップしたらあなたは窓のところに顔上げて顔を上げなかつたよね。今度やるときは顔のシワも平気どころか嬉しくなる筈だ。あれ以後あなたはすばらしい恋人を得て張り切っているときく。

分会員Bをやったミネさんは、会社で要職にあるので時々稽古に遅れたが、途中で足がおかしくなって二重を運んだりの重労働はすわってみていた。アイスクリームを買って来て皆に食べてもらう気の配りようをする男だ

澄んだ眼をして職業は電気工事屋。世話すきの恥しがり屋で、俳優としては一番困るタイプでアガリっぱなし。ただしラストシーンの旗持ち姿は立派だった。家が解放的なのだから。律気に一升持つて来て、一升呑んで帰る男で、その後一番足繁くわが家に来る。

火、木、土を稽古日というつもりでいたらしいのだが、上演日から計算すると、とうてい間に合わないことを表に書くこと納得して日曜返上の連日稽古となった。「武蔵氏が我々に指導してくれている時の眼はキラキラ輝いて恐ろしい。畜生、まけてたまるか(章ちゃん)」とあるところを見ると、私も初めての演出の責任を感じて、俳優同様アガっていたのかも知れない。

立ちに入るとすぐ隣の小学校の講堂を借りる。全員の母校である。校歌を誰となく歌い出して合唱となる。本番まであと一週間という頃まだまだセリフが入らない。「明日から五週間連えたら十円取る!!」

井ノ口君を昼休みに喫茶店に呼び出し、正式な舞台監督を決める。責任感はあるのだがどう動いていいかわからぬ感じのアッチャンにすることに意見一致。それは成功してその

後のアッチャンは眼にみえて張り切ったが、残念、少し遅すぎたのである。覆面演出はもっと早く引込むべきだった。「公演当日は僕は客席にいるんだよ。これからは役に就いている以外の人の番なんだよ。プロムブターがいかに大事で、しかも稽古に精通してなければならぬか」などを話す。

日曜日、張り物づくりの日、自分の仕事の関係で行けなくて、後から描く段になってみたら、新聞紙が五枚位貼ってあって破くのに骨折った。私が看板屋なもので、描くのは自分でやってしまっただけで、装置賞とはよくなかったと反省がある。

やりだして作者に事後報告みたいな手紙を書いたら折返し電話で「転換のことをよろしく」といわれた。それから送ってもらった記録映画のシナリオに歌の楽譜があり、ギリギリ上演に間に合った。

照明担当者は舞台床にパネルを敷きつめた。袖幕、一文字幕、竹ザオ、果ては二重に至る迄の準備でたいへんな苦勞をして、いよいよ前夜祭を迎えた。コーラス、フォークダンス、福演の「署名」と盛会だった。「署名」は、青年達にお祭り気分からハツと襟を正

った。分会員最年少の少女をやる、クマチャンは、やはり途中で高熱を出したが、バイクで稽古を休まねばならぬと自分で伝えに来た裏をやる、めつぱり明るく料理の上手な女性トミちゃんは「稽古の終る五分前に教えてください」といって、福祉会館ですばらしいサウンドイッチをつくって皆に食べさせた。分会員Cの感激屋の章ちゃんはこう書く。「劇はすばらしい。体験した者だけが味わう自分はスポーツではそれを体験している。(サッカー)スポーツと劇は同じかもしれない二十年余り生きて来ている人生の内では最も充実した一ヶ月だった」。頭をヒョコヒョコ下げるのがくせで、「米つきバツタノ」と演出からどなられた。本番でケンカするシーンでは歯ぐきを切ったとか。

青年団のものとリーダー場本君は、大会の実行委員なので役にはつかなかったが、そこに居て見守っているだけで心強い感じの青年である。妹の結婚で二十何万の金を支度して「あんな結婚をさせるべきじゃないけどついで」と吐が大きい。日本鋼管の屋根の上で仕事する、日当いくらのトビ職だと自嘲的に話す。ノブさんは分会員D。タツパのない巨体に

させる効果があつて、次の日の出演チームの刺戟になったらいい。前夜祭がすんでから、(午後十時)各出場チームのセットを飾り、照明合わせが行なわれた。一位になった「七ツ池物語」は独自の照明をつり込んだ。ピールの木箱を二重がわりに敷きつめて、その上に畳を置くチームもある。「テント」は最後になつたので、地の利を行使して舞台稽古をやらせてもらうことにする。既に一時を廻っていたので、役についている女性フクちゃん、プロムブター!の女性タマちゃんが帰りたいといいたしてひとめもあり、結局二人は仲間たちの不信の中を帰って行った。泣いて帰ったので明日が心配のまま朝の四時頃ゴロ寝をした。三時間の睡眠の後、井ノ口君や章ちゃんたちは二人を迎えに走り廻った。「出て来るといふ約束を交わして来ました」と晴れやかな顔をして帰って来た。二人は謝った。

「石垣の歌」歌詞、「おれたちや石垣ひとりじゃないぞ」が、実感として受け止められた一幕であった。

テントの本番は、照明と効果の手際の悪さと、セリフをやつとおぼえた稽古不足等で作者の危ぶんだ結果に終わった。審査委員長、広島演協協議長である久保氏の講評――。

「農村青年が街の労働者として変わりつつある中で、この作品はいままでの青年演劇の壁を破る意義をもつ、アジプロ劇としての熱つばさに不足し、セリフのきこえないのが致命的。俳優ひとりひとり、みがけは光る個性を感じさせた」

当を得た評であると思う。久保氏は広島に帰るなり土屋清氏に電話を入れて「青年団は進みよるぞ」と云ったということだ。

その夜、服部での、福演と青年団との打ち上げお疲れ会は、誰かが泣きの口火を切るとオンオン泣いたりして今だに語り草になっている。その交流会での感激から福演と親しくなったという、観客の男女の青年達のオマケもついた。(別記。「福山おやこ劇場準備会」は風の子の「目をさませトラゴロウ」でさいさきよいスタートを切ったが、アッチャンを先頭とするこれら駅家の青年達——若き親衛隊のめざましい働らきがあった)

服部青年団とのツキアイは深まっている。私も大きな勉強をした。若い人達との話し方みたいなこと。平均年齢三十才余の老福演も若くならねば巾は出てこない。その後劇団の式部が高校定時制演劇部の指導に行き、それ

も成功した。つい先頭の福演の稽古場びらきには若い人らが楽しそうに飾りつけをやってくれて、男世帯の福演らしからぬ華やいだものになった。青年団、定時制の他に、福山周辺でばかりを待っているサークルは廻り起せば限りなくあるだろうし、げんに出て来つつある。たいへんなことになりおった！

演劇会議十五号、七〇演劇行動の森本報告で「福山の人々にとってなくてはならぬ劇団に一日も早く」と温い叱咤をいただいた。そのことが起りつつあるのだと思う。

「ヤマがない」どころか、「テントからの報告」は青年団の生き方そのものに作用して

ここにもこんな仲間がいる

——岡山職場演劇集団と交流して——

安部 智 律

岡山職場演劇集団との交流は、全くひょんな所から出発した。

国鉄労働組合員であり、同時に秀れた労働者詩人「矢木明」氏が、今回の一斉地方選挙に共産党から、岡山市議員に立候補されるという——その後援会の発会式が十二月四日に

開かれるので、太鼓を中心にした劇団未来の出演を依頼するという「岡山職場演劇集団」からの連絡が入ったことから始った。

後援会発会式が開かれるという十二月四日は平日であるし、夜の8時から8時半までの舞台をつとめるとなると、少くとも半日兼

場を休まなくてはならない。劇団の独自公演の為に休暇のほとんどを消化してしまっている私たちにとってはたとえ半日といえども深刻な問題だ。劇団「未来」の依拠する大阪の民主団体や政党などの要請にも、「われら兄弟」の移動公演(2月2日塚・3月1日尼崎・3月下旬西宮・予定)の稽古やオルグなどで十分責任を果せていないのに——など岡山まで小型公演に出かけていくことを躊躇させていくつかの問題があった。

しかし、岡山は、西日本リズム演劇会議の中でも「岡山新劇場」が脱会して以来空白地帯になっているし、国鉄などに代表される、職場に根ざした活動を一貫して追求してきている「岡山」の働くもの演劇「の中」から学ぶ必要があるの思いから、勤務のやりくりをしたり、病弱な妻が出産を間近にひかえている劇団員の家へ、代りに他の女性劇団員が泊りにいく体勢をつくったりということでも

男性六名、女性三名の劇団員が、わざわざ大阪まで迎えにきて下さった岡山職場演劇集団の岩城薫さん、岡山車掌区の方とともに、十二月四日の十四時三十分大阪発の鷺羽七号に乗りこんだ。

岡山職場演劇集団の機関紙「鉄骨柱」第13号に、広島月曜会の尾津訓三さんが書いている。

黒のベレーを頭にのせ白からず白からず目玉ギョロリの人が、公演のたびにお米のジュース持参で打あげの輪に加わり、必ず奥さんの自慢話をし、私たちの舞台にケチをつけた上、広島駅までお見送り、列車が走り去るまでお付合をさせていた人が、岩城キヤップである。

岩城薫さんは、演劇歴二十年、まことに個性の強い、それでいて労働者的な抱擁力のある不思議な魅力の人である。因にキヤップとは、頭の上のお髪が枯れスキキの如く涼しいからなのだそうです。

岡山までの列車の中でキヤップの、岡山演劇集団の創造理念をたっぷり聞かしてもらった。

「働くものの演劇」一筋の二十年のその眼は、たとえば、先程神戸の仲間が合同して労働例会として上演した、島源三作・早川昭二演出の「小さな駅のある物語」を追っかける

● 演技の問題としては
● 国鉄の現場労働者が作業帽をぬぐ場合には、頭の後方の帽子をわしづかみにするの

しまった「小川分会の斗いはもつと知られる必要があるし、これを劇化した作者にあらためて敬意を表することをつけ加えてテント始末記をおわる。(福演)

● 附記

最近福山にも、藤井グラスビーズKK(本社・大阪)という、ビーズのハンドバッグをつくっている会社で解散、全員解雇がて、まさに京都の話ではなくなり、福演も激励に行っている。稽古場びらきの時集った四十数人の人のカンパ二千九百余円をもって行ったとき「石垣の歌」を紹介したら、おじいさんが手帳に書きとって歌ってくれました。

であって、決して帽子のヒサンにはさわらないものである。

● 更衣ロッカーの閉め方には色々ある。足でつけて閉る奴もいれば、手でソツといったわりながら閉る奴もいるし、手の掌で反動をつけて閉る奴もいる。要は、毎日使っているロッカーのクセは、使っている本人が一番よく知っている。

● 国鉄職員が持っている職員手帳・身分証明書・エンピツ・ペンなど、同じものを持っていてもそれを納めている場所、並べ方など、人それぞれ異なるものだ。

● 国鉄の現場労働者は、黒っぽい制服を着て、男ばかりの職場で、一秒の何分の一か誤まれば事故につながるという緊張の中でうるおいのない仕事をする。だから、一見奇技な色の靴下をいたり、マフラーをしたという風におしゃれをするのである。

● 創造上・解釈上の問題としては
「小さな駅——」にでてくる助役などの下級職制の形象がむづかしい。激化する国鉄の合理化の中で、二等駅・三等駅の助役などは切符きりもやらねばならない。その中で、あくまで体制側にしがみついていくか、労働者の側に立つのかの選択を迫られる。

国鉄に働らいているすべての人間が、いつの間にかアメリカに従属している大資本に奉仕してしまっている自己責任の問題も大きい。岡山でも、日本有数の水島コンビナートから、関の五本松で有名な美保基地へ、J P 4よりも強力なジェット燃料を長期にわたって過密ダイヤをぬってピストン輸送したことがある。貨車一台の量に回数をかけて——運んだ量は、四〇〇機のジェット機を一せいに飛ばす量である——と具体的数字をだして計算するキャップ。

美保基地は、危険な大量のジェット燃料を貯蔵できる能力と設備を、もったことにならぬか？ どうして？ いつ？ どんな設備をつくったのか？ その莫大な燃料は、いつ、どこで使われたのか？ それを誰れに運ばせたのか？ ——と疑問をはきすてる。

国鉄労働者として、大きな反動の流れに押されて、しっかりと大地に立っていることは何とむづかしいことか。そのギリギリの自己責任を追いつめて、斗う人間を発見していく「証し」が、芝居づくりなのだ——と岩城氏は言いさる。

岡山駅に到着。会場である労働会館に忙ぐ

を頭につけるといふ異様な扮装で太鼓を叩き、敵を追っばらったという伝説に由来し北国の厳しい冬の中で、春を待つ豊・漁民の心や願いこめた太鼓。

私たちは、これらの作品を現地のありのままに掘り起すだけでなく、現在社会の労働現場の中で再創造し、今日的な願いや怒りにまよ昇華しようと取りくんではいるのですが。

岡山職場演劇集団は、今から六年前に、国鉄・電通・専売などの演劇サークルが合同して出発した。現在の劇団員数二十名。稽古・週三回。毎年春・秋に自主公演。

最近の自主公演をみてみると、

○チキワラタキレ過密ダイヤ（2幕4場）岩木敬作・一九六九年六月（国鉄を描いた物）
○若造（一ちょうやるか）（3幕）岩木敬作・一九六九年十二月（電話局の合理化を描いたもの）

○一九七〇年民族のおたけび（怒濤）（4場）岩木敬作・一九七〇年二月
○雁鴉（三幕6場）中田きみ作・一九七〇年十月（教育の荒廃と教科書問題を描いたもの）
○安全をテーマにした国鉄演習協オムニバスの内の第一話（新上り一番線（一場））岩木

催しの内容については、岡山職場演劇集団の機関紙22号から引用させてもらおう。

十二月四日、国鉄労組役員であり、同時に優れた労働者詩人、矢木明氏の今後の活動に期待と激励を込めて後援会が発足した。集団は、その演出と舞監、照明を受持った。幕あきは、国鉄うたごえサークルぐれん

の南川太鼓に始まり、矢木明作の詩を四篇、岩城・国司で朗読、矢木氏の決意表明のあと、花東贈呈に仲間二百五十名一斉に拍手、さすがの矢木氏も緊張きみ、第二部にうつり矢木氏激励の為はるる大阪から来岡した、劇団「未来」の郡上太鼓の音から始まった。働き乍ら演劇を続ける仲間の

ひたむきなバチさばきに満場拍手の渦、そして女性陣による八丈島太鼓ばやし、御陣太鼓に移る。総勢七名の男性陣による鬼気迫る至芸に全く息をつめて聞き惚れた。太鼓に始まり太鼓に終わった矢木後援会は成功裡に終了した。後、夜更け迄交流会を持ち、矢木明氏も交え働くものの文化創造に貴重な教訓を得た。

機関紙「鉄骨柱」の文章は、遠来の友に対する儀礼もあってか、面はゆい気がしないで

敬作・一九七〇年十一月

という風に、一貫して創作劇を上演してきたおり、又、このような劇場公演の他に、新版五人男、歌舞伎パロディ・沖繩屋如来記などの小型公演も活潑である。

劇団運営は、四人の創立メンバーによる最高会議が、演劇理念の指導に当り、五人で構成される組織委員会が、組織的結束をはかり、その下に教宣部、財政部、宣伝部が、それぞれの仕事を分担している。この集団の悩みの一つは、新旧の世代のずれがあることであり、それを解決する為に、若い人達だけの話しあいの場を設けたり、忙がず時間をかけて話しあうことに努力していることである。

幸い岡山演劇集団には、「岩城氏を追いこせ」と交流会で熱弁をふるっていた熱血漢の田浦舞監、実にフレッシュな新人の州さん岡さん、終始我々の面倒を微笑を失わずに目立ぬように、しかもテキパキとやって下さった財政担当の久西文史——という風に人材には事欠かない。

西り演加盟の問題も、集団員全員がよく納得して、早い時期に実現するだろうことを確信することができた。

もないが、上演した私たちのレポートを紹介しておく——

○新島太鼓

太平洋の荒波にとり囲まれた新島の生活の厳しさの中で、連帯を求めあう人々の熱い呼吸が、太鼓を打つ二人のバチさばきの中にこめられているもので、このエネルギーは、新島基地反対斗争のウンジイ・ウンバアの中に受けつがれているものでもある。

○郡上太鼓——古調かわさき

郡上一探の中で、獄門の刑に処される指導者を、念仏をとえながら新たな抵抗を誓いあひながら送った農民のはりさけるような思い——。

○八丈島太鼓・八丈島太鼓ばやし

「……鳥もかよわぬ八丈島」とうたわれていのように、鳥流しの場になって八丈島——故郷をおもい肉親をおもい気持の中から生れたもので、特に八丈島太鼓ばやしは、年に一回のお祭りの時、日頃うっ積した民衆の心が発散したように叩きつけられるものである。

○御陣太鼓

上杉謙信の能登攻めるとき、農民や漁民が伝来の土地や財産を守るために、海草や草

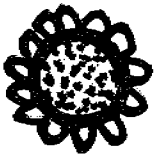
ともあれ、日本有数の水島コンビナートがかかえた岡山の地で、大独占の攻撃と合理化に屈せず、労働戦線の統一と日本の夜明けに向って、元気にこつこつと労働者演劇創造の仕事をしている仲間と交流できて、大阪の地の私たちの仕事を更にかみしめている昨今である。

最後に、岡山職場演劇集団以外の岡山の演劇状況に若干ふれておきたい。

曾て、西り演加盟劇団であった岡山新劇場は、創作劇「影山英子」を上演したり独自の活動を展開している。

岡山労演は、ここ数年西日本労演の中でも急速に会員をのばし着実に定着してきている岡後県玉野市の劇団炎は、「ピカの陰から」を上演したりしているが、最近の造船業界の合理化の中で、先細りを警戒しつつ、小型公演などを積極的に展開している。

岡山の劇団やサークルや労演が、岡山の文化状況を細かく分析し、お互いが創造交流を密にし、反動的な文化攻勢に総体的に立ち向う——という所まではいっておらないが、その気運は熱しかけてきているという感想をもったのだった。



関西における戦前プロレタリア演劇の研究〔四〕

大岡欽治

(3) 大阪地方におけるプロレタリア演劇(続)
〈D〉プロット時代・大阪戦旗座

一九二八(昭和三)年。三・一五事件のあと、三月二五日に全日本無産者芸術聯盟(ナック)が組織された。大阪では六月六日に新興劇団聯合公演が大阪朝日会館で持たれ、続いて六月二日には、ナック大阪支部が創立されたことは前号で書いた。その後聯合公演に参加の三劇団の合同はうまく行かなかったのは、別に原因があったらしい。

『(前略)朝日会館に於ける「明日への劇場」群衆劇場「戦旗座」の聯合公演が是だ。

その結果は無惨なる経済的失策と、マネエジャ等の嫌悪すべき墮落行為に依って、今日迄の存続を中止されたが、(後略)』

これは、戦旗座の構成員を出していた関西学院劇研究会の員である富岡捷が、関学劇研の機関誌「劇」の一九三〇年新年号に書いて

た一文「一九三〇年型劇場―附関西劇壇への一覽書」の内の一部である。これは結局、創造問題や観客動員の点では、前号所載の如く評価されているが、内部の経済的処理に問題があったのだらうと思われる。

そうした内にも、一九二八年一月二五日にナック臨時大会が開催され、各専門別団体の確立と、その協議機関の組織の方針が確認され、名称は全日本無産者芸術団体協議会(ナック)と改めることになった。(この日、小山内薫が急死していることにも注目された。)

その結果、翌三〇(昭和四)年二月四日、ナック加盟の演劇専門団体として、日本プロレタリア劇場同盟(略称プロット)の第一回全国大会が、東京の築地小劇場で持たれた。

★プロット第一回全国大会
プロットの綱領及び当面の活動方針は次の如く要約される。

綱領

一、吾同盟は一切のブルジョア演劇を實踐的に克服しつゝ、プロレタリア演劇の組織的生産並びに統一的發展を期す。

一、吾同盟は斯る一切の演劇運動を通じて無産階級の解放の為に闘うことを期す。

一、吾同盟は演劇に加えられる一切の政治的抑圧撤廃の為に闘うことを期す。

活動方針

1 任務遂行のための規程

イ、根本条件は何よりも先づ吾々の生活を労働者農民の生活の中に、其の斗争の中に置くことではなければならない。

ロ、斯くて吾々は「常に労働者農民を眼前に置きつゝ」大公演、移動劇場、朗読等のあらゆる形態において吾々の演劇を広く大衆の中に持ち込むべきである。

ハ、斗争の激化に伴い、益々その活動を要求されるであらう多動劇易り広げむじと

らねばならない。

ニ、前項の活動基準は一九一九年度が吾々に課するであらう題目のうち、就中次の三つの上に立脚して行なわらるべきである。

A 帝国主義××(戦争)絶対反対

B 労働者、農民の国ソヴェート同盟の擁護

C 右に対する社会民主主義、社会愛国主義等の裏切行為の曝露。

2、具体的活動

イ、演劇運動の全国的統一

A 全国的機関紙その端初としてのニュースの発行

B 技術的オルグナイザーの交換

C 労働劇団の全国的調査及それへの援助
ロ、公演によるプロレタリア演劇の集中的発表

A 現下の政治的経済的諸条件は大劇場、

大会堂における公演の可能を益々狭められつつある。劇場設備なき会場(例公会堂、講堂、或は寄席等)を積極的に利用しなければならぬ。而してこの種の活動は(1)集中的大公演(2)巡回的小公演に分たれる。

B この仕事は各々の技術的發展と共に芸

術大衆化の問題と不可分に結びついている……この仕事の解決の鍵は「その持ち込み……経営基礎を労働階級の斗争の組織の上に築くこと」である。

ハ、移動劇場の拡充強化

争議団、組合、寄宿舎、工場、労働階級の諸種の集合等その活動場面は豊富であり、その政治的要求は益々昂まりつつある。……移動劇場の拡充強化は緊急の任務である。

ニ、五月、十一月芸術祭への積極的参加

ホ、演劇研究所の設置

ヘ、観客の組織

ト、演劇戦線の統一

チ、プロレタリア演劇理論の確立
リ、国際的提携

ヌ、上演の自由獲得のための斗争

ル、反動的演劇政策との斗争

加盟劇団

東京左翼劇場、京都青服劇場(準備会)

金沢前衛劇場、大阪戦旗座、松本青服劇場、静岡前衛座、高知街頭座、神戸劇団(準備会)

加盟劇団員 約一三〇名(内東京一〇〇名)

創立当時の役員

中央執行委員長／佐々木孝丸、書記長／佐野碩、執行委員(左翼)佐野碩、峰桐太郎、鶴丸陸彦、小野宮吉、杉本良吉、(戦旗)三木武夫。

また、プロットからナック協議員としては次の如く選出された。

佐々木孝丸、村山知義、佐野碩、松永敏。このようにして、日本の文化運動が躍進する体制が整いつつあった時に突如一つの事件が起こった。

それは三月五日衆議院が治安維持法改正緊急勅令を事後承諾した日、旧労働農民党の代議士山本宣治(京都選出)が東京の旅館で七生義団員黒田保久二に刺殺された。そのために三月一五日(前年が三・一五事件の日)に東京と京都で労働葬が行なわれることになった。京都では三月五日、プロット中央執行委員会が正式に京都青服劇場がプロット加盟劇団と承認されたので、京都での山宣葬に参加するために緊急にナックの召集が発せられ関西オルグとして大阪に常駐している久板栄二郎を中心に、大阪戦旗座も参加して、一四日夜宇治の花屋敷で、山宣の遺骨の前で、全国からの労働者農民代表が集まった大座敷で「山宣追悼」という即興劇を上演した。(一)

の詳細については、私もその時の上演に参加しているので、別稿「京都におけるプロレタリア演劇」に書く予定)

このように再び活動が盛り上りの気運に進みつつあった時、四月一六日の事件が襲ってきた。(共産党員全国の大検査、三三九人起訴さる)

さらに「これに引続いて、五月、六月、京阪地方××に際して×色テロルが大阪戦旗座及び神戸準備会を襲い、吾々の組織は部分的に破壊された。斯かる迫害にも係らず、山宣労働葬で創を負った京都青服劇場が勇敢にも大阪の戦旗座救援に努力し「プロット関西地方評議会」の萌芽を作り得た事は特筆に値するであらう。だが、残念ながら京都、大阪合同メーデー公演の計画を具体化するまでに至らなかった」。(プロット第二回大会、中央執行委員会報告)

「四・一六の嵐は、他の諸劇団をも、多かれ少なかれ吹き破って通ったのであったが、大阪戦旗座は、この嵐の上へもって来て、その年五月に行なはれた××(戦争)準備の為の「都市防空演習」の予×(備)検×(束)で、殆んど全メンバーが持って行かれ、為此これ又その組織が破壊されなかったのだが、

て「無届集会」だといって、演出者佐野碩他数名を検束するというトラブルも起った。

十月十六、十七の両日、大阪朝日会館で公演は持たれた。初日は雨だったが、会場は二晩共に満員、内正確に四割は労働者だった。

「母」は検関係、特高課、憲兵隊総がかりで、あそこがいけない、ここがいけないと赤線を引き散らし、骨抜きにしたのだが、そこは観客がセリフは聞えなくても、カンでちゃんと呑みこんでくれて、「俺達のお母さん万歳！」で幕になり、観客総立ちの感動が捲き起った。京都は十八、十九日華頂会館で上演された。(以上の記事は「戦旗」昭和四年十二月号所載、久板栄二郎「左翼劇場の関西公演」による)

この公演の時、私は京都青服劇場の一員として、演出助手に選ばれて、演出者佐野碩の指導の下に活動したが、これが私の演劇活動での一転機でもあり、このあとも佐野演出から学ぶ機会を得た。

今、この時のビラ、ポスター、プログラムをみると、次のような宣伝文が書かれている。『東京左翼劇場来る！ 関東地方に於ける労働者農民の斗争場裡に移動劇場を駆使しその単の如き英雄的行動は夙に名を馳せた

その時、京都青服劇場は積極的に大阪を援け、プロット加盟劇団としての、任務を果たした。』(「日本プロレタリア演劇発達史」佐々木孝丸)

★ 東京左翼劇場第一回関西公演

このような状況をのりこえて、秋になると東京左翼劇場の関西第一回公演が決定した。これには、東京では左翼劇場の村山知義作・佐野碩演出の「全線」(原作戯曲名は「暴力団記」だが改題を命ぜられた)が、プロレタリア・レアリズムが具体的に演技の面にも発展させられてきたと評価されてきたが、築地小劇場は改装で使用出来ず、他の劇場からは閉め出されているので、関西公演が計画されたわけである。

最初は「全線」を持つてくることにして宣伝を開始すると共に、群衆劇でもあるし、関西のプロットの劇団の技術的向上にも力を貸そうと、演劇講習会を大阪と京都で持つことになった。大阪では九月十五日から十日間、東京から佐野碩、仲島淇三、伊達信の三人を呼んで講師とした。ところが大阪府警察部の本庁と所轄と憲兵隊とから特高係が、正私服合せて六、七名づつが毎夜かかさずやってきて、何くれとなく干渉した。その講習会は、

もの。今関西地方に於ける大公演に際して大挙して押しよせる。しかも全労働者農民の圧倒的支持を受けた村山知義作「全線」は当局の忌避するところとなり、今や陣容を新にして、わがソビエト・ロシアの巨人、大ゴルキイ作「母」を掲げ、全労働者農民諸君に見えんとする。両日の公演を労働者農民の力もて守り抜け！

『日本に於ける唯一のプロレタリア劇団として公演毎に圧倒的勝利を博しつつある東京左翼劇場は年末の希望を果して、ここにソビエト・ロシアの世界的作家マキシム・ゴルキイ作「母」を掲げて大阪第一回公演を開催する。村山知義作「全線」公演に全国の愛劇家の視聴を一身に集めた東京左翼劇場が、このすぐれた作品「母」を如何なる演出を以て諸君に見えらるであらうか！ 来れ！ 守れ！ 我等の劇団を！』

『俺達は公演準備を通じて如何に戦ったか全関西の労働者・農民諸君！ 今度我が左翼劇場が、待ちに待たれた関西へやって来て、京都、大阪で始めての芝居をするにあたっては、必ず諸君の期待にそむかない覚悟をきめていた。それどころか、俺達は、諸君をビックリさせるような

劇団員十五名ばかりと、他の劇団からの聴講者約十名位が出席した技術訓練のための集会であった。ところが彼等はどうとう三名の女優志願者の帰途をつかまえて「動先にバラしてやるぞ」とおどかして、講習会を断念させて了ったようなこともあった。そこで劇団側も負けずに滑舌法で「いぬがによるによる二によるによる合せてによるによる四によるによる」と練習をくり返した。

さて、出し物は「全線」とカスパー・ハウゼル作「足のないマルチン」という反戦劇を予定したが、脚本検閲で「公安を紊す穢れあるもの」という勝手な「認定」で、二つの脚本は却下されてしまった。そこで第二案として、ゴリキ原作、左翼劇場文芸部脚色「母」(この年四月、築地小劇場は、新築地劇団と劇団築地小劇場に分裂、六月に新築地劇団がゴリキの「母」を高田保の脚色で上演続いて劇団築地小劇場、七月に八住利雄の脚色で上演したが、左翼劇場上演台本は八住利雄のものを更に手を入れたものであった)と村山知義作「莫逆の療治」の二本を提出した。左翼劇場の一行は、十月十一日に京都に着いた。それに青服と戦旗座が加って、本読みから稽古に入った。稽古の途中、警察からき

スパラシイ芝居をやったかった。ところがどうだ！ これだけは是非とも諸君に見てもらいたいと思った「全線」は、当局によって闇から闇へ葬られ、第二陣にそなえた「足のないマルチン」またケラレ、最後に「母」は、あそこがいかん、ここがいかんとかチをつくられ、ごらんの通り、まるで骨ヌキのサル芝居にされてしまった。

俺達はくやしい！ 覚えていろ！ そのほか、ビラ一枚まくにも、立看板一つ立てるにも、ここ三週間というものの、俺達は悪戦苦斗の限りをつつけて来た。労働者・農民の劇団がこんな目に合うのは、関西の労働者・農民の力がまだ弱いからだ。日頃の斗争がナマヌイからだ。諸君！ 俺達を強くするものは斗争だけだ。今度という今度は、イヤというほど骨身にしみた俺達は忘れぬぞ！

『大阪、大入四千。京都、初日満員だ。モ！ 今日切りだぞ。愈々今日切りだ！ 日本唯一のプロレタリア劇団！ 京都第一回公演！！ 此の機を逃すな！！』 この公演のスタッフ・キャストを記録しておく(プログラムによる) 左翼劇場関西地方第一回公演

劇場同盟、京都・青服劇場、大阪・戦旗座
共演、(大阪朝日会館 京都華頂会館)
一九二九年十月(大阪)一六、一七日(京
都)一八、一九日 午後七時
マキシム・ゴリキー原作 左翼劇場訳編
「母」 四幕九場

この台本は八住利雄氏脚色の「母」(五幕七場)を更に左翼劇場の立場から再編したものである

〈役と人〉
母(パーヴェルの母親) 杉 昌子
コルスノワ(隣りのかみさん)原 泉子
鏡前屋(その亭主) 鶴丸 陸彦
パーヴェル・ウラソフ 伊達 信
サーシャ(小学校教員) 高野由紀子
ポーランド人(パーヴェルの友人)山田 五郎
エゴール(同) 中島 淇三
ニコライ(同) 佐藤吉之助
支配人 藤木 貞治
看守 久板栄二郎
労働者 (青服劇場) 頼 春仁
レポーター (戦旗座) 太田 晋
その他
ヘスタッフ
演出 左野 頁

同 小野 宮吉
演出助手 (青服劇場) 大岡 欽治
舞台装置 村山 知義
照明 遠畑 真
効果 山口 淳
同 (戦旗座) 青山 順三

(これらの内では、すでに故人になった人もいたが、杉昌子は佐野碩夫で、平野郁子と看守になった。青服・戦旗の両劇団で残っているのは私一人になってしまった。)

★ プロット第二回全国大会
一九三〇(昭和五)年四月四日、築地小劇場において、プロット第二回全国大会が開催された。この大会で、第一回大会后における各劇団の活動が報告されているが、議事録(プロット機関誌「プロレタリア演劇」昭和五年六月創刊号所載、発禁)から、大阪戦旗座の項を抜いてみると、
大阪戦旗座は加地利が出席したが、最初の発言で「中止」になった。
「議長(佐々木孝丸)では最近迄、大阪戦旗座の仕事をやって居られた久板栄二郎君に続いて報告して貰います。」

プロット創立大会以後、中央執行委員会に於て決定された、各地の加盟劇場を自主的に活動ならしめる為の指導的組織が着々と具体化されるに従って、やっと大阪戦旗座の組織も固まったのですが、勿論技術的にも非常に未熟であった為に華やかに活動出来なかった。併し乍ら原始的ではあったが、労働者との結び付きは可成り緊密であった。その為に、五月末から六月初めに掛けて、大阪の方では非常に向う側のお祭りがあって、我々は充分に活動出来ない状態に(中止ノ拍手)
議長 他に大阪の代議員が居りませんから書記長に代って貰います。
佐野碩君 大阪戦旗座の五月以後の斗争は五月に秋山ゴムの争議、六月に大阪の某労働組合青年部との共同ビクニック、七月に石川争議、八月に和歌山労働組合が応援していた某争議、九月には昨秋戦旗誌上に載った例の瓢箪山ビクニック等。今年に入って一月にゼネラルモーターズの争議——これは新労働党のダラ幹共に阻止されたが、二月に難波鋼鉄争議其他。三月に盛文館争議。其他戦旗読書会等に移動活動を十数回なしている。(下略)

次のように、状勢を分析している。

『演劇界における一九二九年の最大の意義は「資本の攻勢」に伴う「労働の攻勢」の増大によって、プロレタリア演劇が決定的に発展の基礎を与えられたという点にある』

『一九三〇年度における吾々の新しい方針は、我々の演劇運動をこの「左翼の攻勢」の線に沿って押し進めることではなければならない。我々の演劇運動は、この線に沿ってこそ始めて具体的に大衆の要求に応ずることが出来るのだ。我々の凡ゆる活動を「プロレタリアートのスローガンの下」に統一すること。』

「革命的プロレタリアートのスローガン」を我々の演劇に生かしていくこと、これが一九三〇年度における我々の根本方針である』
そして従来の綱領を改訂し、ナップの方針に即して、新しいスローガンを採択した。

綱領

- 一、演劇を工場・農村へノ
- 二、プロレタリアートの刻々のスローガンを生かせノ
- 三、労働者農民と先頭とする観客の組織へノ

四、職場を中心とする労働者農民劇団の結成へノ

役員
中央執行委員長 佐々木孝丸 中央執行委員
村山知義 小野宮吉 杉本良吉 藤田満雄
中村栄二 多喜荘二(京都) 鶴丸陸彦 沖圭一郎(京都) 加地利(大阪) 渡辺諄一郎

★ この期間の主な資料

- (1) ナップ機関誌「戦旗」昭和四年十二月月号
- (2) 関西学院劇研機関誌「劇」昭和五年一月号
- (3) 久保栄編集「劇場文化」昭和五年四月月号
- (4) プロット機関誌「プロレタリア演劇」昭和五年六月号
- (5) 「プロレタリア芸術教程」第三輯 昭和五年四月 世界社
- (6) 「総合プロレタリア芸術講座」第二巻 昭和六年六月 内外社
- (7) 秋庭太郎著「日本新劇史」下巻 昭和三年十一月 理想社

丸山定夫・役者の一生

丸山定夫遺稿集刊行委員会

池田生二 浮田 左武郎
菅井幸雄 永田 靖
八田元夫 松本克平

発行所 東京都新宿区三栄町一八
植田ビル四〇三号

ル 出 版
一五〇〇円

劇団通信

関西芸術座

◇3月4・5・18・19日の4日間、大阪府立青少年会館ホールにて、木谷茂生作・小松徹演出「あの国とこの国と」を上演。
 ◇高校公演は、二年越しのロングランで、「アンネの日記」(上利勇三演出)を全国的規模で巡演中。
 ◇児童劇公演も、去年からひきつづき、多田徹作・道井直次演出「こまんじやこ物語」で中・小学校を巡演しています。

(大阪市阿倍野区文の里四一八六一) 群馬中芸

七〇年は若い劇団員に対する指導体制が混乱し、委員会、書記局などの機能が悪く東リ演に對しても大変迷惑をかけております。しかし年度総会で(12月)、劇団の基本的方向を集団形成の原点にたちかえって討論し、やっと見通しを得ました。

別便で概要をいづれ報告いたしますが、69年夏の混乱をやっと乗り切ったというところ

ころです。72年は、劇団の10周年記念公演となり、今年はそのに向けて態勢づくりを全力を上げるつもりです。

創造と普及 一月と三月二十五日。児童劇「オキクルミと悪魔」。県内公演(小・中学校)三月三〇・三十一日。前橋親子劇場。(同上レバ)。四月と五月。児童劇「パバ仕込」。五月、六月、七月は、宮城、福島県内での都市公演。「オキクルミと悪魔」学習スケジュール 一月と三月。劇団綱領の再検討・及び、われわれをとりまく内外状況についての討議。五月と七月。創造実践におけるわれわれの課題。「茂左衛門研究」。

(前橋市昭和町三一五一一) 劇団さつぼろ

ますます寒さのきびしい北国ですが雪の中で頑張っています。一月二月の間、札幌市内の職場、地域公演として、「人を喰った話」「魂」「モレッツ教育」「風が風を」の四つの作品を持って、職場の学習会や大会、地域ごとの実行委員会の取り組みなど意欲的な公演を続けています。「地元劇団でなければできない公演」と

して新しい芽が出て来ました。

四月からは、学校公演、「ゆきと野を駆ける五人のわらしめたち」(斎藤隆介作、ゆきより)の公演に入りますが、第一稿を持って、原作者との話し合いが進められています。(札幌市琴似山の手二の一) 劇団つくしの会

新年早々から静岡県の知事選があり、この通信がとどく頃には結果が分りますが、へドロ県政をやめさせ、統一候補勝利のため、団中有志が奮闘しております。

七一年は、三月、マルシャーク作「小さなお城」。五月、道井直次作「裸の王様」六月、松谷みよ子作「竜の子太郎」。十一月、バケット作「アンネの日記」。以上の舞台を目ざしております。また、二月にはプロクセミンナルが計画されています。(富士宮市西町二〇一一)

上野市民劇場

全国の仲間の皆さん、新年おめでとう、昨年共に闘った70演劇行動、御苦勞様でした。増々きびしくなる71年、更に力を強めて奮闘しようと、決意を新たに新年を迎えました。

今年、地域の仲間との共闘を一層強めとりわけ文化戦線の前進を計りたいと頑張っています。いろいろ御指導下さいませ様お願い致します。

◇近況報告 一月一日、仲間と劇団の新年会。一日、共産党赤旗びらきに、文工隊(面おどり)。一日、成人式、文技隊(照明担当)。一日、地区労働びらきに文工隊(面おどり、ソーラン節、会津盤梯山ほか)。二四日、劇団員北田保結婚披露パーティ。三〇・三一日、劇団第一六回総会。(上野市丸の内、中央公民館内)

劇団福演

昨年暮、「福山おやこ劇場準備会」が新発足して、根城をそっちのけにして動き廻っていましたので、劇団はストップ。劇団員Sが、「スタッフ」なる喫茶店を経営、その二階を提供してくれて、華々しく稽古場びらきをやった方がいいが、御当人は、従業員獲得やら帖面づけに追われる始末。今年に入って、若手を一人、「風の子」の裏方に、三月中旬までの期限つきで貸したりで、まるで大劇団並に振舞って、手もと不如意です。それでも残った爺イがネジリ鉢

巻で、新年「旗びらき」に、寸劇を出したりしています。(栗木英章作「さがし求めて」……ありがとう)

女優さんも二人程入って来たし、三月には、高校定時制演劇部卒業生の入団のOKもとつたし、まあこのところは、冬枯れということで、「スタッフ」でお茶でも飲んでいきましょう。

(福山市西町三三三八 柏原方)

金融演劇サークル

今年も、全国の皆さん、よろしくお願ひします。編集部の皆さん、大変ですけどよろしくお願ひします。さて、私達の七一年の活動を報告いたします。

今年の私達の活動の最も大きな課題は、サークルを劇団化することです。その前提条件として、昨年上演した、「銀行生活」(井上満寿夫作)を改稿、再演すべく、着々と準備を進めております。

公演日は、八月四・五日。動員目標一二〇〇名。この公演の成功が、劇団化の必須条件です。

また、劇団化の問題は、独自に、大阪の職場自立演劇の運動とあわせて考えていま

す。

その他、小公演レバとして、「モレッツ教育」「ムードのある詩」「ぜんそくの街から」の三本をえらんで練習中です。

私達の本年度の力一杯の活動に御期待を(大阪市都島区中野町五一〇―一二八) 劇団いこら

◇三月より、和歌山県下初の革新町政の、文化行政第一弾として、公民館と共催で、「演劇教室」を開講。

◇創作めんでは、

①「紀文」の第二稿完成。(栗原省執筆担当)。三月末公演予定。

②狭山事件をドキュメント構成(栗原省執筆担当)。七月公演予定。

③北谷正作「物語部落解放史」劇化(宇田貞三執筆担当)。秋の公演予定。

◇サークル運営めんでは、

①「劇団いこら」友の会、会員の拡大。機関誌の発行。

といったところです。劇団未来に学びながら、自主公演態勢を確立したいと思えます

(和歌山県有田郡湯浅町大字湯浅 一二五九の一 栗原省方)

大阪協同劇場

七十一年の新年おめでとうございます。事務局の皆さんには、多忙な創造活動の上のオーバーワーク、本当に御苦労さんです。さて、大協は、今年の四月で、五周年を迎えます。ジグザグコースの五年間でしたが五年間の総括を70年代の初めにできること更に十年後をめざして頑張ろうと、張切っています。

今年の上半年の予定は、次の通りです。

- ① 昨年十月からスタートした「第一回新劇教室」の第一回公演を四月三日、郵便貯金ホールで。A・N・アルプソフ作「イルクーツク物語」を上演します。余儀ない事情で参加できなかった二名を除いて、一八名の教室参加者が稽古に励んでいます。

② 恒例の移動公演は、木下順二作「花若」

「絵姿女房」「夕鶴」を三月上旬に。

③ 四月一日から、「第二回新劇教室」のスタート。

(吹田市津雲台五—一五D53—307)

南大阪演劇研究会

去る一月一三日で劇研も創立九年目を迎

えました。二月の六・七日には第九回総会を開きます。

今年度のスケジュールについては、この総会の中で具体的にありますが、今のところ、大まかには、真の創造集団(劇団)としての機能を、量の面でも質の面でも確固たるものにするための諸作業を、地域との結びつきを更に強める活動の中でやり抜き秋には、一晩ものの公演を打ちたいと思っております。

今年一番の仕事は、大教組青年部のハタびらきで、構成劇の演出助手や、舞監など裏関係を手伝いました。去年後半は、「モーツァルト教育」六回で、約一三〇〇人の観客と接しましたが、今年の小レバとしては、勝山俊介氏の「鳩」をとりあげて、多くの人に見てもらおうと思っております。

(大阪市西淀川区野里町四八九)

劇団炎

西リ演の作家・演出家会議には、こちらの別の集会所とち合って出席できず、残念です。

玉野芳演十周年記念、特別例会として、造船労働者物語、第3部「忘れ得ぬ日々」

新たにがんばります。

(長野県上伊那郡箕輪町一〇七〇藤田英文)

劇団かざぐるま

昨年一月、留萌市文化奨励賞を受賞しました。長年にわたって、この地方の文化振興に尽力した功績と今後の活躍を期待しているのがその理由です。

少からず面映ゆい感がないでもありませんが、社会的、行政的レベルで、全くいい程「文化的」でなかったこの地方で、悪条件とたたかいたいながら、文化運動の先導的役割をという自覚で進めてきた私たちの活動が、こういう形で認められたという事は、今後の活動にプラスになる条件をかちえたといえます。

さて一月は年次総会の月でもあり、先日四十六年度の方針もきまりました。今年の最重要目標は、サークル活動を徹底的に行なうということでした。ここ三、四年とかく、公演活動に重点がおかれ、サークル強化に目が行きとどかないため、公演が終ると、緊張感や意欲の薄らぐ傾向がありました。その反省です。

五月には、第七回子供劇場。脚本も近く

決まります。

とにかく今年は、サークルを蘇生させる大事な年になりそうです。

(留萌市見晴町一—八七 笠原英生)

福井劇の会

一九七〇年に入り「澤(みお)の会」という芸術創造活動家の懇談会をつくり演劇音楽・文学・美術分野の統一のもとに、三回の例会を持ちました。第一回は、「福井空襲25周年記念・詩とハーブと歌の夕べ」第二回は、音楽例会で、ハーブ、室内楽団うたごえ合唱団、ソプラノ独唱など。第三回は、演劇で、福井劇の会、福井青年劇場それに坪川健一氏客演の、森頼高明作「三國漢天保異聞」を上演しました。坪川氏は福井自由舞台の主宰者でもあり「逃散」の作者としても知られています。森頼氏は高校教諭。上演日は十二月十二日でしたが、雪の中、八五〇名の観客で、「エリーゼ」に次ぐ感動的な舞台となりました。

一九七一年に入り、七〇年の統一行動の成果が立って、さらに全分野の結びつきを固め、発展を期しております。

六月に、福井青年劇場と合同で、三國高

の上演を決定し、一二月公演の目標で、目下第一稿がほぼ出来ました。

大造船企業のもとにある下請企業の労働争議を中心に、若い労働者の群像です。戯曲が出来たら、仲間の皆さんの批判をおおきたいと思えます。

(岡山県玉野市日比四—三三六 伊藤硬三)

劇団権兵衛

つい先日、団員全員が集合し、それぞれ本年の決意を述べあい、団規約を確認し、新役員が決定しました。後は、新入団員を迎えることが当面の行動です。現在二三名ですが、三月までに二五名にする事を確認しています。またその三月には、春斗一万人の集いで劇団創作の構成劇「仲間たち」の上演を予定しています。これは劇団だけではなく、多くの地域の労働者たちから出し合って取り組みますが、上半期の大切な仕事となります。後期は、十月に公演をしますが、脚本はまだ決定していません。しかし、私たちは、創作劇を主体とした劇団ですので、地域の歴史から創り出すことにはまわがいがありません。

今年、創立三周年、全劇団員、決意を

校で、「三國漢天保異聞」の移動公演を予定。つづいて七・八月は、ゆきのした文学会の小説「うたのほんのころ」の脚色上演を企画しています。

(福井市宝永町一—三七—六 江頭方)

劇団支木

12月11日、青森市民会館で「土のうた」(きしだみつお作)を成功させました。ただ観客数は前回より少なくなりましたが、農村にふきあれる非情な政府の政策の中で津軽の農民は、どう生きてゆくか、津軽弁で遅くうたいあげました。大好評でした。劇団として、きちんと総括する作業を小グループに別けて討論しています。そして二月二〇日前後の総会を成功させるつもりです。五・六・七月は「土のうた」を持って、近郊の農村を巡演する計画です。

二月の総会には、東リ演加盟が提案される予定ですが、近いうちに、七一年最初の朗報をおとどけできよう。全国の仲間から、励ましのお手紙などいただけました。私たちの決意もいっそう、固いものになると思えますが——。

(青森市安方町二—一〇—一 高木永治)

名古屋芸術劇場

一月一六・一七の両日、第二回本公演「若者たち」を上演しました。約六〇〇人の観客と、南大阪劇研の仲間たち等に観てもらったこの仕事を、現在総会（一月末）で総括中です。

目下知事選の最中で、劇団演集の仲間らと共に、文団連の一員として奮闘しています。今後の予定は次の通りです。

- 三月 第二期研究生卒業公演「夕鶴」
- 三月 第八回南部青年劇場（予定）
- 六月 第三回本公演。（レバは久保栄の作品を検討中）

（名古屋市内南区汐田町三十四〇 栗木方）
人形劇団京芸

前略、スケジュールのみにて失礼します。一月四日～七日、一〇日、一五日。お正月親子人形劇場。京都シルクホール。レバ！トリーは、山中恒作「小さいトムムム」（脚色志野田隆男）「ウー・コロ・ウリン・ブー」（脚色荒木昭夫）の二本です。二月上旬、劇団総会。中旬からは、学校公演に入ります。

A班 「こわれた窓ガラス」「サルカニ

ばなし

B班 「じっさまのおんどり」「小さいお家」

（京都市伏見区納所北城堀三二一八）
人間座

全国のなかまの皆さん。あけましておめでと。ことしもすぐれた民主的な演劇の創造と普及のために、お互いががんばりましょう。

一 京人形を作りつづけて六〇年、ひとりの職人の情熱と洗練と貧窮を浮き彫りにしつつ、人間の仕事の意味を考える

「人形師卯吉の余生」（八場とエピソード）
巡演日程は左の通りです。

一九七〇年一月一三日 福知山市
一月二二日 綾部市
一九七一年三月三・四・五日

京都府立文化芸術会館

三月二〇日 舞鶴市
六月下旬 宮津市

（京都市左京区下鴨東塚本町四四）
演劇集団和歌山

一月一九日、実行委員会方式の、自主的成人式の集いに参加し、黒沢参吉作「深い

疵」を上演しました。

今後の予定は、三月公演のあと、各地域へ移動公演に入ります。レバートリーは、「深い疵」、ふじたあさや作「現代の狂言おばあさんと酒と役人」とです。

大衆と共に考え、進んでいく——そういう前向きな姿勢で、きょうも練習に励んでおります。全国の仲間の輪を大きくするために、共に頑張りますよ。

（和歌山市湊二一九三 別院清方）
劇団新劇場

今年、創立一〇周年を迎えます。その記念公演を、春、秋に一本ずつ企画しております。その第一回は、四月一五・一六日、道新ホールで、木田英郎作「神通川」（演出多海本泰男）にきまり、稽古に入りました。四月上旬および下旬には、知事、市長の選挙がありますので、民主勢力の闘いの一環となるべく頑張っています。

（札幌市旭町二〇 貝谷バレエ内）
演劇集団息吹

一月はハタびらき、後援会の集會等での上演を含めて10回余りの小公演をやりました。激動の71年にふさわしい(?)忙しさを

です。今年は二大選挙のある年、民主勢力と革新政党の発展をめざしてがんばります

六月までは小公演型式の活動を更に飛躍させるつもりです。歌舞と演劇の新しいレバで充実した仕事にします。

後半期は、研究生の発表会と本公演の予定です。永年の念願の東川氏の「新念仏」が完成します。

第一二回劇団総会を二月二〇・二一日に
（八尾市堤町一四〇）
劇団からっかせ

条件の悪い会場で、どうしたら良い公演が出来るか、ということと、歌舞班の結成および三名の専従化に努力しております。

課題はいつもながら山ほどありますが、当面の大きな課題はこの二つです。

四月一八日 第六期卒業公演「煙突のあるオアシス」

四月上旬 歌舞班結成・三名の専従化
五月八・九日 浜松公演。「獅子」と「明日をよぶ歌と踊り」（仮題）

六月～七月 浜松公演のレバで、地域移動公演八ヶ所

八月 劇団第八回定期総会

（浜松市板屋町三二五伊藤アパート）
劇団橋

◆その一。誕生・創作劇
今年の十一月で満五年をむかえようとしている「橋」はそんな願いでいっぱい。創作グループは活動を開始しました。完成予定は(?)六月末。

◆その二。電話OKノ出前いたします。
昨年の暮から「移動小公演」のふれこみで、忘年会、新年会、成人式、結婚式等各種集會に。メニューは、宮本研「人を喰った話」「モーレッツ教育」創作ミュージカル「二分一秒ムダなく」の三本立て。早朝割引ありません。（ハテナ）

◆その三。勉強してきます。
二月の、京都「府民劇場」は京芸さんの出番。「橋」も協力させて頂くことになりました。

（発声練習）
ア・エ・イ・ウ・エ・オ・ア・オ（京芸の人たち）
あえいうえおあお（橋の連中）

◆その四。「橋」は真面目な劇団です。
西上演・「近畿プロット劇団交流会」

「作家・演出家会議」参加。
まずは報告まで。ハイ。

（大津市藤屋下横木町七四五 谷田方）
劇団すがお

●稽古場建設にむけて
創立十周年（今年12月）に、地域の文化運動の拠点になりうる稽古場を建設しよう

と、昨年後半から、ピッチをあげてとりにんでいます。延坪六〇坪工費五〇〇万が目標ですが、年内二〇〇万募金を達成するため、後援会づくりや事業活動を始めています。（昨年の積立六〇万円）。仲間の御援助もお願いします。

●芸協的組織の結成にむけて

桑名には、労演、労音などの鑑賞組織がなく、四日市の地域会議の運動として細々とあり、有機的なつながりが、各々になかった。市民会館は、文化の殿堂と呼ぶに恥しい程、文化関係の利用は少い。この現状を打ち破ろうと、労音、労演、劇団の交流会をもち、近い将来、芸協的組織をつくろうと準備をすすめています。

●統一劇場公演成功にむけて
三月三十一日統一劇場が、桑名で、初の一

般公開の公演を行ないます。実行委員会が満足にならないため、劇団が積極的に宣伝活動を引き受け、他の民主団体と共に公演成功のため準備中。

(桑名市大福二二九—一 後藤方)
劇団生活舞台

若干出足が遅れましたが、一月二三日から稽古に入っています。

上半期のスケジュールは

三月初め 熊本玉名青団文化祭に出演。

演しものは、作間謙二郎作「許婚」。

六月には、ギリエルメ・フイゲレド作

「狐とぶどう」上演の予定です。

(福岡市警固二一九—一八)

劇団埼玉

私たちの劇団では、新年早々三日間に渡って第三回定期総会を開き、「組織運営」「創造」「経営・普及」の三点について総括し、討議を重ねて、今年の方針を決定し激動の七一年の第一歩をふみ出しました。この総会の討議の中で、まず劇団の機関車である運営委員会の構成メンバー七名のうち、四名が文芸演出部から出ており、このことから創造への傾斜が指摘され、本来車

の両輪である経営部を強化する方針が打ち出されました。又、劇団員同志の団結を強めるためにも、思想的統一が急務であること、地域劇団としての自覚を高めること等

が、活潑に話合われ、当面埼玉で民主的な活動を続けている仲間の連帯によって結成された埼玉文団連の結成集会在、三月三日大宮商工会館で行なわれますが、そこに東リ演の仲間の中から生れた「ゼンソクの街から」(伍藤かずよし作)を藤逸平の演出で作りあげ、参加することが決定しました。

(川口市領家五—一六九)

よこはま青年座

◎いま、「劇団論」などをしゃべり合っています。と云うのは、五年間続けてきた劇団「創芸」との共同公演の仕事を一応うち切って、両劇団ともに、自らをふり返ってみようということになったからです。

そこで出てきたのが、よこはま青年座とは何だノということでした。発足当初は三つのサークルの連合体であり「豊かな青春に生きる歓びの広場である」と規定していたのですが、京浜協同劇団との仕事を終

ての東リ演加盟、あるいは劇団「創芸」との行動の中から、内面的にも劇団としての様相を持つてきたようです。十年目にして組織のカテゴリーを定めようというのだから、牛歩というか、のんびりというか

だらないというか。そのために議論百出二月十四日の総会まで続きそうです。(総会の報告は、何らかの方法で知らせたいと思っています)

◇座付作者、小鹿利四郎が、創作「遺された土」を書きつけています。人間の労働と土、あるいは歴史と人間、といった大きなテーマの中で苦吟しているようですが、創立十周年を記念する意味でも、夏までには仕上げてもらいたいと、ハッパをかけ合っています。

◇ほくらも企画して作った記録映画「青春と安保」がライブチックの映画祭で国際学連賞を受けました。全国上映で回っていったら観て、なにか云って下さい。

◇三月十日に横浜青年学生連絡会議の主催による「一万人大討論集会」を企画しています。十八才選挙権獲得への基礎としても政治と青春とを青年にとりもどす運動への

足がかりとしても、大切な集会になりそうです。

◇日頃忘れがちな、基礎練習や、体系的な脚本勉強会を積みかさねて、八月のアマ演連月例公演を組みたいと、六帖の稽古場で話し合っています。(しぶや)

(横浜市中区滝ノ上二二九 宇都宮方)

京浜協同劇団

昨秋22回公演《太陽がほしい》上演以来、小形の芝居で労組文化祭、地域集会などへの出演を重ねながら、一方京浜労演人形劇団ひとみ座とともに「川崎こども劇場」をつくる運動に協力してきました。12月、2月とつみあげた準備例会を基礎に陽春には千人ぐらいいのこども劇場がスタートできる見とおしです。

7月に予定した公害問題の芝居は、黒沢の執筆が難航し、労演との共同企画は延期せざるをえなくなりました。これにかわる23回公演の作品はまだ決定しませんが、《河》《ゼロの記録》《泰山木の木の下》等、原爆の問題をえがく諸作を、全員が読む作業からはじめています。

3月をはじめから、18期生の(10ヶ月の)

教育を開始しました。現在11名。担当は城谷、細田。

(川崎市古市場二—一〇九)

劇団京芸

市長選のさ中、現在、選挙勝利と府民劇場公演の成功めざし奮闘中であります。加えて、稽古場建設の課題が、重大な局面を迎えており、何としても目標を払い切ろうと、商品をもって、カンパ訴えにまわっています。来年度の二本の創作劇、「ひやごたんの村」「ベルチリオン166」を成功させるため、この二月、府民劇場で一〇〇名動員にまで、力を回復したいと思っております。

■二月府民劇場 赤木三郎作「ぬは・はつえの物語」。大橋喜一作「ベトナム・沖繩。そしてわれらは」

また、中学校公演を三学期の間やりつけ、且つ、京都新劇合同公演に、民芸の宇野重吉氏を迎え、田口竹男作「賢女気質」をやりますが、これにも、出演者、裏方として参加しています。公演日は三月二七日、四月二日。府立文化会館。

(京都市伏見区納所北城堀三—一八)

劇団未来

昨年の二月に大阪市内で、和田澄子作・森本景文演出で初演、つづいて九月に東大阪と公演を重ねた「われら兄弟」を今年前半の移動公演に予定しています。

二月二日(火)堺市民会館

地域における民主的な文化行事を系統的に進める中心として結成された、堺文化連絡会議と劇団との共同オルグで上演。

三月一日(日)尼崎文化会館

本来は西大阪公演となるのだが、会場がない為、尼崎に移した。西大阪と尼崎に実行委員会をつくり上演。

三月二日(日)西宮市民会館

作品の素材になった現地でもあり、上げ公演にふさわしい上演にたく考えています。

西宮同和教育講座、市職労、全日自労などで実行委員会結成予定。

四月は、最近多くなつた小型公演の稽古を集中的に行なう。

(堺市新金岡町二—六番一棟二〇二)

劇団労芸

年末の総会で、劇団は、「オキナワ」にはじまった七〇年における活動の総括を行ないました。とくに二月の東働演出演の「仕置場」には、とりくみに積極性を欠いたこと、創造に対する姿勢の弱かったことなどが深く反省されました。

七〇年における画期的な成果は、稽古場の建設でした。四月にプラン、一月に完成という事業をなしたことは、いちめん劇団の潜在的なエネルギーを見せましたが、しかし、工事費の多額の残金や長期にわたる返済金等々、問題はまだまだ、たくさん残されておりま。

運営上の劇団体制として、従来までの合議劇を問いつめて運営委員長(劇団代表)副委員長(二名)および運営委員と、責任の所在を明らかにした体制に切りかえました。七一年は、新しい拠点(稽古場)にふさわしい、充実した仕事を希っております。一月から二月にかけて、「旗びらき」「新春婦人の集い」「都議選候補者後援会」等の集いに「労芸コント集」を、五月は小劇場公演「水泥棒」「山鳩」そのほかに春

の文工隊として、「モトリツ教育」「天満のとらやん」などでがんばります。

学校公演として「コックの王様」が予定されていますが、これにはまた新しい体制が必要ですので、目下考慮中です。

(東京都品川区南大井一―一四一―一六)

劇団はぐるま

一月一三日から始まった年度総会も一五日に終り、七一年の活動方針がほぼ決定され(本公演二回、小劇場公演三回、その他移動公演)、具体的な活動に突入しました。

今年はいくつかの移動公演を計画し、只今、民話劇「彦市ばなし」を浦田ひさしと島源三の二人が各一本づつ演出し、平行して稽古に入っております。

◆当面の公演スケジュール

一月三十一日 「高等数学1」移動公演(恵那市)

二月一日〜二日 はぐるま小劇場 No. 11 回公演、木下順二作、浦田ひさし・島源三演出「彦市ばなし」

三月上旬 「彦市ばなし」移動。県下3ヶ所六月下旬 第三二回本公演。こばやし・ひろし演出「題未定」

本年度の後半、一〇月頃からは、待望の劇映画「郡上一揆」の製作協力を、劇団も取り進むことに、ほぼ決まりそうです。

(岐阜市西野町一)

劇団月曜会

広島労演と地元劇団による共同企画「ひろしまの冬」終了後、中断していた「呑んだくれ」に再びとりかかりました。

作品の生れた和歌山県有田郡湯浅町へ現地調査にも行き、沢山ものを学び、考えさせられました。何とか、広島での上演を成功させようと、劇団員一同張り切っています。

(広島市東区北二―二二―二八)

福岡現代劇場

目下三月七日公演の、モリエール作「スカベン」の悪だくみの取組みに全力投球しています。

昨年二月のロルカ作「ベルナルダ・アルバの家」は女性陣のふんとうで、仲々好評でした。ようやく、小劇場シリーズが定着して来たようです。今年も、年四回の本公演を成功させるためガンプル決意です。

(福岡市南庄一―一八七)

土の会

七〇年の去年はまた集団の15周年に当りその記念集会を予定していましたが忙しさに追われて、ついに年を越した一月二四日にやる事が出来ました。いつもわれわれの舞台を覗ってもらっているお客さんをはじめ、東リ演や他の仲間劇団の多数の参加をいただき、盛大に行なうことが出来ました。これからの歩みを考える上で、土の会を支えてくれる人たちの意見を大切に、これからの舞台と日常生活に取組んでいこうと思っております。

さて、いまは、「書けない黒板」(豊島区民センターで、5月13・14日)と、「泰山木の木の下で」(豊島公会堂で、7月3・4日)の稽古を平行してやっています。両作品とも、くりかえしの上演で、当分、春は継続上演。秋は新しい創作劇という方針をたてています。「女たち」「なまねこさま」の矢野喬の新作を予定しています。七〇年に変わらぬ激動の七一年を、ともにガンバリましょう。

(岩田稔)

(東京都港区西麻布四―五―九山村方)

信濃小劇場

◆初の児童劇。劇団では初めての児童劇を上演しました。

松本子供大会(二月一―三日)。騒ぎ盛りの子供たちの前で、内心ヒヤヒヤながら幕をあけました。ところが、それまでハチの巣をつついたような場内は水を打ったように静かになり、終り頃には子供たちはステエジのまわりに集ってしまいました。

初めての試みとしてはまずまずの成功でおまけに年の瀬に首のまわらない時に多額のお礼をもらい、年を越すことができました。演しものは、木下順二作「和尚さんと小僧さん」。

今年前半は「和尚さんと小僧さん」の移動公演と「人を喰った話」の稽古。

昨年出来なかった本公演を秋に予定し、創立五周年の行事も考慮中です。

東リ演の皆さん、まだ信濃の地はとても寒いですがガンバっています。

(松本市深志二―一六―一八)

劇団虹の会

三月に、「トタンの穴は星のよう」(藤本義一作)を上演するため頑張っています。銅路子供劇場の結成に伴い、私達は一層

創造の質の高まりを増々要求されてきておりますが、三ヶ年の計画の中で、昨年の道具庫完成をふまえて、稽古場の設立を目的としながら、創造面をふくらませるべく、劇団さっぽろの鈴木氏を演出協力として迎え、その第一歩を三月公演にむけています。活動の拠点としての稽古場設立を一日も早く実現するため、皆様の暖い御支援をお待ち申しております。

(銅路市貝塚一―四 加藤猛春方)

仙台小劇場

医療を守るつどい、宮城県学校生協労組結成集会等で、黒沢参吉作「夜」を上演。

一月一〇日の総会で、三ヶ年計画と今年の計画を決定。ことし中に三〇名の劇団にしようとして、一万枚の劇団員募集チラシをつくり積極的に拡大にとりかかっています。

春の公演(六月一〇・一一日)には早船チヨ原作「キューポラのある街」を上演、秋には作問謙二郎の創作「雑草家族」を上演します。

総会で方針がはっきりしたため、けいこ場がとて明るくなり、陽がさしはじめたようです。あせらずじっくり、集団的にと話しあってやっています。

(仙台市鉤取大谷地三―三 早川寿方)

「ひろしまの冬」について

小松 徹

在韓被爆者の、日本を恋う——繁榮していると聞く日本の、ひろしまを恋うことばで書きたされる戯曲「ひろしまの冬」を読んだ人は、恐らく誰しも、何の前提もなくいきなりとびこんでくることばに、胸の高鳴りを感じたにちがいない。非難や恨みではなく、ましてや敵意ではなく、ハひろしまを恋う。在韓被爆者を存在させている事実が私たちの胸をまっすぐに突き刺す。

この冒頭の在韓被爆者の声は、実は、自身も被爆体験をもつカメラマンの取材してきたもので、そのカメラマンへのテレビインタビューのリハーサルで流されていることがやがてわかってくるのだが、この戯曲は、そのように厳然と存在している在韓被爆者をいわば鏡として、ひろしまに生きているひとびとの問題を、さらには繁榮の中にとどぶりつかかりこんで生きている日本人の課題を追求していく。

戯曲展開の中心に据えられているのはこのカメラマンだ。この男の中には「ひろしま」が否応なく根をおろしていると同時に、いやそれだけに「ひろしま」から逃れたいという気持が相剋している。同じ被爆体験をもち、友人でもあるテレビディレクターの企画で、彼は韓国へいったのだ。逃げようにも逃げられぬひろしまに、カメラマンは直面させられる。話はさらに、8・6記念番組の制作というところで、在韓被爆者の実態を深くえぐる企画をすすめるようということに発展する。彼は一切の他の仕事をなげ棄ててその準備に異常なまでに没頭する。写真学校で同期の、今は婦人科専門のカメラマンとして売りだしている友人が、彼の才能をみこんで東京の会社へグラフィックデザイナーとして紹介しようというすすめも断るほどだ。しかし、企画はにぎりつぶされ、友人のディレクターは営業へ配転となる。それを知った時、しかし、カ

メラマンの胸のうちには挫折感はなく、むしろ虚脱感ともなった安堵の思いがあった。そこから彼のひろしまからの脱走がはじまる。一方配転されたディレクターは、彼の写真を借り受けて街頭展示——さらには在日朝鮮人被爆者の手記をまとめる仕事をほじめだす。そして終幕では、東京へ就職を決めたカメラマンと、元ディレクターが、生きかたをめぐる論争をしているさなかに、右翼にはしったカメラマンの弟が、平和公園で、結婚披露を終って記念写真をとっていた朝鮮人の中に木刀をもって殴りこんだことを知らされ、逃げようのないひろしまにふたたび直面させられる。

このドラマ展開の一方で、このカメラマンの妹の、朝鮮人との恋愛が進行していく。家具屋に働く平凡なひとりの娘が、面白くもない仕事のウサバらしに、ちよいとひっかけた青年が朝鮮人であることを知り、彼を愛するうちに、どうにもならぬ日本と朝鮮の歴史の重みにうちひしがれ、傷つきながらも、遂にはその歴史の重味を背負っていくとうとうとここまで成長していく。

戯曲の問題点として、まずこのふたつの展開が有機的にかみ合っていない。まじか

メラマンの動きが、企画の挫折以後、苦悩として静止的にとらえられていることで鮮明に浮び上らない。当然ディレクターの側から、街頭展示——在日朝鮮人被爆者の取材行動への働きかけがあった筈であり、そこで、ひろしまが彼の内部で主張をはじめた時、彼はどうかしたか——ということが描かれれば、このカメラマンを通してひろしまの苦悩、課題はもっと鮮明に浮び上ってきた筈である。そのためには、彼の脱走は、このドラマがはじまる以前の時点で両親とも被爆者である家からの脱走ということではじまっているのだが、当然そこまでさかのぼらなければならないだろう。それが出来ればもうひとつのドラマ展開としてある妹の問題とも有機的にかみあみちすじが発見出来る筈だし、終幕の弟の行動の重味も、ずい分違ったものになったろう。作者がこの戯曲を書いた動機の中には、外がわからひろしまをとりあげた作品に対する批判があったようだが、最初のひろしまからの脱走にまで追求の筆をすすめるなければ、結局は作者自身もまだ外がわにしかないのではないかというこにもなりはしないか。

も抜きに観客の胸を突き刺すためには、序曲的な音楽があつて、幕が開いて、スクリーンをおろして、スライドを映しながら声をながすというやりかたは、決定的に失敗ではなかったろうか。——ということでも端的に出ているのだが、演出は、この戯曲のもつ抒情性——これはこの戯曲の特質でもあるのだが——にのめりこみすぎたようだ。したがって丁ねいな演出の眼は感じるのだが、場面の抒情性に足をすくわれてしまつて、全体を貫ぬいて出てくるものの印象を落してしまつてい

また、このような他場面構成の舞台では、

転換のスピードが作品内容を伝える上で大きい比重を占めるのだが、舞台装置に工夫がなく、ドラマ展開に渋滞をきたしたのも大きな失敗だろう。また、空間のとりかたが、たとえば、もっと二人の対話に集中させなければならぬところまで、殆どホリゾントを一杯につかたために、散漫にさせたりしているのは、計算出来なかつた失敗であつたのだから。

演技の上では、全体にのびのびとしていて好感をもてたのだが、演出ともかわつてい

中で、朝鮮人老婆をやつた三浦とし、カメラマンの妻をやつた中野裕子の好演が印象に残つた。なかでもカメラマンの妻は、戯曲の上では不鮮明なのだが、孤児として成長し、メラマンの生きかたを、ハラハラしながら、しかも黙って支えている女の形象をみごとにうちだし得ていたように思う。

戯曲評で殆どをとられ、上演評としてはまことに粗末、おまけに突にきつい表現になつてしまつたが、この合同公演の成果が、今後のひろしまの演劇運動をすすめる大きな力となるだろうことを私は確信している。

(関西芸術座)

× × ×
× × ×
× × ×

舞台評にうつろう。

まずは冒頭、在韓被爆者の声で、何の前提

おさまるかえつた安易な自己否定

— 関芸「日本の言論一九六一」 —

かたおかしろう

「日本の言論一九六一」は、舞台批評以前に、戯曲の改作という点で何よりも私の興味をひいた。

一九六七年のテアトロ六月号に発表されたふじたあさやのこの作品と、四年の経過をくぐって再び世に出た今度の作品とをくらべて見て、題材とシチュエーションはほとんど変わっていないのに、ドラマとしては基本的な変貌をなしていることに気付く。

比較してすぐわかる違いは、今度の場合、編輯部員の大沢俊彦と鈴木敬子がナレーションを受持ちながら叙事的に進行するドラマの組立てと、それに応じて当然なされたであろう舞台の形象のあり方が、前作にはなかったことなのだが、それは結果として、そういう方法にたどりついただけで、前作との根本的な差異は別のところにあるように私は思う。

枚数が限られているので、くわしく書けないが、例えば前作のラストシーンの変更のま

りふに、前作の作者の姿勢が典型的にうかがえる。

俊彦……そうだ。やっぱりぼくらは予想していた。どうしてこういつもぼくらは被害者なんだろう。どうしたらぼくら、加害者になれるんだろう。ね、八田さん。寝てちゃいけないと思うんだけどな。

たしかに、この限りで幕をとざされると、はぐらかされた逃げに思える。作者の限界を見せた終り方だ。しかし、にもかかわらず、自己点検を加害者になろうという方向性をもって始めようとしていることはわかる。

その点を作者は（演出者若田がどこまで改作にかかわったかは知れぬが）改作にあたって強く意識していたにちがいない。だからこそ先にも述べたように、ドラマの構造も、俊彦と敬子の報告という形で、主人公たちの自己点検に重みを増していったのだろう。しかし

「いかにして加害者たりえるか」という方向性は改作によってどれだけ明確になり得たのか？

作者と演出者は戯曲全体を、自己点検のドラマにぬり変えた。言論の自由の原点を、出版社の編集部員たちに「君はそこで何をしていたのか」という問いかけの方法で追求しようとした。この方法を私も決して否定はしないし、むしろそのことの大切さは今日より強調されるべきだとも思う。しかし、「いかに加害者たり得るか」が欠落したところで、自己点検は成立しないと思う。

そのあせりが（あえてあせりという）第二部ラストで編集部員と社長との大衆団交という形をもってあらわれる。

登場人物の中核（作者）をなす俊彦や敬子自身が劇中で、こんな形で言論の自由の原理への問いかけはあり得ないのだといひながらこの大衆団交へと傾斜してゆくことが、私には理解できない。前作ではその限界をよく承知して、その限界での闘い方を探ろうとしていたように思えるのだが。作者あるいは演出者が、この団交パターンで、しかも経済要求と対比する形で、このドラマを進めたの

ヒコールに移すことを予想してのことなのか？あるいは、あの団交パターンの進行が、どうしてもああいう「破」の終結をなさざるを得なくしたのか？同じ書き手として極めて興味深いところだが、そんな興味だけではすまされぬ問題を感じてしまふ。

団交の席上、社長今井から「君らはどうした。君らは今の今まで黙っていた。社の路線に従って現状を肯定してきた。今さらなぜこんなことをいい出すんだ」といわれ、俊彦が「やっとなわかってきた。守るべき自由などはじめからありはしなかったんだ。自由はぼくらの中で空洞化してたんだ」と告発し出す。

そして出演者一同が、観客にぶつけるように、観念的な言葉をシュプレでぶつけてくる。「現状を肯定していることの、免罪符」「国民の権利である言論の自由を権力に売り渡したのはい——笑はおれたちではなかったのか」「雑誌なんかつぶれたっていい。おれたち、野たれ死にをしたっていい。自由をくださいな！！」等々。

社長今井に指摘されて、この自己告発が始まるのも滑稽なことだが、私はこれは真の意味での自己告発でないと考えた。編集者たちの言論の問題は、ひろく日本人民の多様な斗

劇評

漁港 ▲静芸▼・神通川 ▲やまなみ▼

萩 坂 桃 彦

静芸の「漁港」（1月28日・県民会館）がぼくには、さわやかな記憶になっている。

実はこれまで、それほど静芸の舞台を見ていたわけでもないのに、なにか固定した思惑を抱いていたようである。その思惑の中では

役者が練んで見え、演出者の、或は作者の、思想が、どこか理詰めでしか役者に移されておらぬ。観客の共感をともなわないで、劇団だけが、先の方で、或はだから、時には後の方で、意気込んで見える。

どうしてこんな考えを持つようになったのか。思いあたるのでは、「荒木栄伝」あたりの印象があるのだが。しかし、それも、

れだが、私には納得できない。

論理的かのごとく見えるドラマの終結に、おさまるかえつた安易さを見せられたのは私だけだったろうか。

昨年の七〇行動「祖国をみつめて」で、かなりほぐれはしてはいたのだ。

ところで、「漁港」（原源一作）の鮮度はこんなぐあいだった。それは——

「はじめヘビキニ」や三・一を扱ったもの等今更という声もあった。しかし稽古を重ね焼津に調査に行き、ますます確信めいたものになって行ったことは——三・一ビキニ事件は、戦後アメリカ戦争犯罪人によってもたらされた公害第一号とも云える性格を持っていったことから、現在高度成長政策という大企業中心のもたらした「公害」から「生命」とくらしを守るために立ち上った人々にとって、

実に新鮮なドラマと云えるのではないかといふことである」(山崎欣太)

にも重なる云えるのだったが、何と云っても、舞台に出ていた生活感のみずみずしさだろうと思う。

戯曲に忠実に副えば副うほど、生活の匂いを出しにくいというのが、この戯曲だった。ビキニの尻に冒された漁民がデスペレートになってゆくいきさつは、インテレクチュアルな屈折で、それが「漁民ならでは」という風には、なかなかかなりにくい例も、同じほかの「漁港」の舞台で見ているだけに、ぼくにはうれいことになった。

まず、人物たちが、テーマを背負いきれぬようになっていくのが、逆に、いい。そこでムキになればなるほど、俳優そのものが個性的に破れて、取り繕おうとすることで役に近づいてくるようなところがおもしろい。看護婦由美(北川市子)などがその好例である。かの女をみていて、失笑させられながらも、ふしぎにひきずりこまれてゆくのだ。船主の娘まち子(藤枝芳子)などもそのきこもない新妻ぶりが、下手に見えないのである。このように、一見稚拙感を伴いながらもいつのまにか、溶けこむように、その役どころに納ま

立っているにすぎぬかもしれぬ。しかし、そのことをうしろめたがっては何一つ云えぬことになる。

もはや、地を匍うようにして在る民主的的地方演劇を、根絶えさせてはならぬ、仕事として、「演劇会議」が欠かせぬことのように思う。

「神通川」(本田英郎作)は、芝居は生きものであるという一つのことを興味ふかく見せてくれたのだった。現象面でも、演出(梅津幸三)が入院手術という思わぬ事態になり、さらに、製作・経宣の責任者(小谷道雄)が、これも仆れるという、重なる不幸の中で、座員がヤミタモになって、創立以来最高の観客動員を得たという、誰一人予想しなかった結果が、それである。火事場騒ぎで、平常持ち上げられなかった籠筒を持ちあげたという古い話があるが、笑い話でなく、ぼくはそれを云いたいと思う。劇団は、そのことで、気づかなかつた潜在力を知ったのだ。

おもしろいのは、舞台もまたそうした熱気にあふれていたことである。途中からひき継ぐということですらあり得なかつた中川恵司演出は、この人持前の、趣向をこらし、かきたてるような抒情性を施す余裕もなく、ただただ、舞台処理に奔命である。無邪気な、光

つてくるのは、演出(山崎欣太)のワク組みの手堅さ、比較的安定した老漁夫多作(鎌田三郎)や医師井上(井岡栄二)などの、まわりからの固めなどもあずかっていたのだろうと思う。

罹災した福竜丸乗組員の三人の若者を、その考え方、生き方として、問いかけてくるのが、この戯曲の主要なモチーフだが、これもまず、俳優そのものの個性が当を得ていたのである。水野(正守平太)が投げやりな明るさの中に、どこか悲哀の翳りを見せ、松崎(久保順)が、甘いマスクで、深刻な度合を程良くするといったぐあいである。

総じて、それらが若者らしく漁民らしいのがいい。それに静芸の労働者のなりアリティが一寸加味される。この縫合というか、一種の均衡が、果して練り上げられたものであつたかどうかは、今のところ、ぼくには分らない。

しの(安倍ゆう子)や、ます(杉サワ子)などの一定の役の掌握をみると、そうかも知れぬと思えるが、医師井上の燃焼度の淡さやよし枝(横山佐恵子)のもう一つ確かでない表現などでは、テーマを打ち出すことでの大事なかかわりを持っていただけに、ぼくは、

夫(河西一郎)などという役者がいて、手摺らせている。

「神通川」は、云つてよければ、女衆の、きめこまやかな「公害」への告発劇なのだ。子ども三人生んだ女に発病してくるとい

恐怖におののくまつえ(大久保瑞枝)、初めての出産におびえる嫁にいった紀子、(高取明子)、婚約が破談になる末娘の澄子(山中小百合)、そして、イタイイタイ病をまるごとうけて、さいごには自ら、神通川に身を投じて命を絶つ祖母のそよ(山岸英子)と見えてくると、この戯曲は、文字どおり、一女たちの怒り」の芝居である。

その中で、そよとまつえが、際立って、この主題を担って見せたように、ぼくには思える。やまなみの仕事ぶりには、役のひとつに、執念のごときものを植えつけて見せる伝統があるのである。それを、端的に、この二人が示している。十五年の歴史が、ボトんとそこに在る。

しかし、勿論この芝居には、ちゃんと骨格があつて、神通川下流の岩井部落の無藤庄作一家の、いわばイタイイタイ病との苦闘を舞台に据えながら、一方、名もない診療所の萩

首をかかげるのである。そうなのだ。観念的なテーマの先取りは困るけれど、井上医師などには、パッションとしてもっと、ストレートにテーマに直結してほしい。第二幕、漁民の女房ますの、福竜丸罹災者の保証金を羨やましがらぐどきのあと、井上に宿る心の動揺などは、あの程度であつてはならないはずである。

しかし、とまれ新鮮だった。ぼくのこれまでの考え方が改めさせられたことなど大したことではない。芝居づくりで、静芸が、もう一度観客と一緒に歩きだしたことをぼくはよろこぶのである。

甲府やまなみの「神通川」(11月23日・市民会館)を書いておきたい。これについてはよこはま青年座・創芸合同公演「その前夜」の感想とともに、記事にして、「赤旗」に送ったのだったが、見事に没になった。「その前夜」については、この方は、少くとも頼まれて書いたはずだったので、ぼくは首をかかげている。

成程、厳密には、ぼくなどは「劇評」などはしておらぬかもしれぬ。身をよじらせてその劇団に添いながら、泣き言や嬉し言を書き原医師(深見裕次)の奇病発見、告発。そして公害源の神原鉱山と村人との交渉、その先頭に立たされた庄作(河野司)の複雑な立場など、という風に、かなり大がかりな社会派ドラマになつていたのである。

ここで、その委細を語る余裕がないので、一つ二つを印象的に云つてみれば、これら、男の役者衆に課せられた任務は、先に述べた女衆に較べると、可成見劣りがあるということである。庄作は中心的人物でもあり、終始ハリつめた表現で主題の深刻さを担っているが、抑揚屈折に乏しく、かつて、「コンペア野郎」の大統領の役で見せた、あの躍動的な肉つきを得ていない。大橋弁護士(大島治郎)なども、手馴れてはいるものの、その実体を明らかにしきれぬ。

むしろ、グリンブス、内至はエピソード風に出てくる村民前田源助(征本鉄)や、戦時下の回想場面、神原鉱山を脱走してくる朝鮮人労働者趙道生(渡健一)が、かえって鮮明に印象づけられる。

つまり、戯曲の主題をひき写しての、舞台の構築で、演出の欠落が目立つのである。だから、話は、それやこれやを含めてであら。破れ目をあちこちに抱えながら、舞台は

熱っぽく結束していた。
それが、連日満員の客席と切り結んだのだ。
った。

「漁港」での、いきいきした生活感の発見
や、「神通川」での、素朴なひたむきな演じ
方が、とにかく突破口にはなったという見方
は、ほくに、ほくらの仕事の可能性の張らみ
を見せてくれたのだったが、ここで、たとえ
ば、劇団「はぐるま」の「小さな駅の物語」

劇 評 議

第八回「東京働く者の演劇祭」を観る

山 部 芳 秀
(国民文化会議)

第八回を迎えた東働演の「演劇祭」だが、
今年には正直いってあんまりバツとしなかった
というのが内外大方の批評のようだ。

去年のように、創作劇が七本もならばとい
うこともなく、さりとしてそのまえの年のよう
に「演例会的大作」がならばでもない。数
からいっても、昨年は十一、一昨年は十三だ
った。今年には八本で(舞台からいえば九本)

あまり感じられない。「働くものの自立の観
点と創造活動の目標というものが見失われて
いるのではないかと危惧せざるをえない」と
関きよし氏は「テアトロ」に書いておられる。
うなづかざるをえない。

麦の会「雪女風土記」(竹内勇太郎作・土
田由利子演出)。民話劇なのか、もすこしシ
リアスなドラマを狙ったのか、どっちなのか
ネという気がした。合評会でも表出が三者三
様で統一がない、焦点がさだまらないという
意見が出、演出の迷いが指摘された。私のよ
うな観客には、この劇団の役者はみんなうま
いと思えるのだが、そのうまさ、いわゆる
新劇、新派、歌舞伎などのどれなのかなあと
いった感じをいだかせる、そのことをいって
いるわけだろう。「支配階級」とか「特権階
級」といった言葉を雪女がいうのも妙な気が
したが、それはそのとおりやれという作者の
説明があるという。しかし、やる方の主体性
でそういう点は考えた方がよい、ということ
になった。人物が雪女をのぞいてみない型通り
の学芸会向きという感じで、演出も型通りに
なってしまう感じ。作品に原因がある場合
やっばり創作劇ならな、と思われる。

を考えるとき、もう一つはつきりする。

前号で、黒沢氏がふれた、「盛樹騒動」で
の「みごとさへの危惧」というのにも似てい
るが、構築、描写、表現などで、かりに九五
〇ぐらいのところまで行きついたとして、あ
との五〇が、「国鉄労働者の当面している生
活・悩み・たたかひの姿を、現場の労働者で
なければ書けないみずみずしさと、豊かなユ
ーモアの中へえがいた作品」(小野宮吉戯曲
賞詮評)の、「現場の労働者でなければ書

民話劇、いわゆる新劇(?)、翻譯劇、時代
もの、サークルもの、職場ものと実にさまざ
ま。「多彩」といえばきこえはいいが、実は
バラバラにあつちをむいたりこつちをむいた
りだともいえる。

はじめるまえから、なかば冗談ではあつた
が「売りがみ文句に困るゾ」という声をあげ
たのはほかならぬ小生であった。「ナニヲ多

民衆劇場「獅子」(三好十郎作・池上洋通
演出)は、小生などにも戯曲の面白さがわか
つたような気がした。それに若い役者たちが
戦時中の風俗をこなすのにはよくやつた
という感じが、好感のもてる舞台だった。た
だ、吉春の獅子舞が、軍国主義時代の巨大な
社会的圧力に対するささやかな抵抗というか
反抗というか、そういうものをあらわすのだ
としたら、もっと吉春に落付いたものがほし
かった。中野公会堂、社交ホールと稽古のつ
みかさねがはつきり感じられるだけに、吉春
の人間像がつかみにくいのである。人間像と
いえば、圭太郎とお雪にしても、今日とはち
がうがもうすこしその仲を感じさせる動きが
ほしかった。後半に入って登場人物が多くな
ってから舞台がぐっと面白くなったのが感じ
られたが、これは収穫だったと思う。演出者
がいつているように、ここを通らねばならぬ
ということもわかるような気がした。

全通演サ協・全電通演劇集団合同「人間蒸
発」(芳地隆介作・土屋隆治演出)「昆虫考
」(芳地作・大島総一郎演出)は、東働演時
代のはじまった九年まえと今日の対比を示す
興味ある舞台だった。とくに、「人間蒸発」
は、東働演の発端となった一九六三年春の「

けない」にかかわり、それが、「はぐるままで
なければならぬ」にかかわり、そのことが
これまたとえて云って、「静芸」「やまなみ
」の、突破口として成功した五〇と見合うよ
うな気がするのである。そこに、劇団の、そ
して作者の、思想が、レーゾン・デートルが
抜きがたくあるような気がするのである。
観客と分ちがたく結びつくには、そこでで
しかない、ないと思う。

種多彩、複雑な今日を反映する演劇祭かとす
ればいいさ」という声がかえってきた。
「じゃ、それでいい。それしか手がない
から仕方ない」といった実行委員会の「内幕
」もあつたのだが、いまさら何をいつても
はじまらない。

しかし、演劇とあんまりエノのない労組な
どにむかつての小生の宣伝文句は、「おもし
ろいし、うまくなつたぜ。みにこいよ」であ
つた。ウソはつかなかつた、と思つている。
ところがやっばり身ビイキの甘さがあつた
んだなアと思われられた。「演出演技に部分
的進歩がみられても、働しながら演劇をやる
意味を自ら問ひかける熱つばさ、きびしさが

働くものの文化祭・演劇の夕」で、国鉄くろ
がねの「胎動」、大阪の劇団末来「差別」、
そして同じ原作を宮本研が戯曲化した「木口
小平は犬死」の三本と競演し、国鉄演サ協や
菅井幸雄の「アカハタ」紙上の批評で、労働
者のでないという批判をうけたもの。だが、六
〇年代が終つた今日からみると、その批評の
空しさ、というより作品の重さの方がこる。
死んでも郵便配達に出かけるかなしい労働
者の姿を告発した作品は、十年ばかり前には
「人間疎外をうたいあげる傾向」として批判
されたのだが、この十年でもあまりにも「日常
化」したテーマになつた感があり、それだけ
に演出も初演のときとはちがった工夫が要さ
れたことだろう。東働演参加劇団でもかつて
二、三の劇団がやつたことがあり、とくに埼
芸の舞台なども印象がよいが、やはり「本家
」らしい面白さがあった。ただ惜しかったの
は肝心の遺体の処理で、それがなくなつたり
もどつてきたりするところがハッキリしなか
つたこと。装置にこりすぎたせいではないか
と思えた。

「昆虫考」は今回ただひとつの創作劇。芳
地作品としてはテーマもセリフも異様なほど
(?)明確。わかりにくいという大分の先入

観は雲散霧消、同時に役者のセリフも「流れ出るごとく」みごとく、アレアレと感嘆するうちにドッカーンとなる。あの百科辞典的セリフがバックグラウンドミュージックなんだろう。そして、自動車に代表される機械文明の巨肥化のまえには人間はまさに昆虫、そのはかなさ、よわさ、吹けば飛ばぶような存在とあったことが、感覚的すぎるが、しみこんでくるようだった。小品だから重量感に乏しいが、芳地作品の叙情性に富む佳作のひとつとして残るだろう。当然「不安や悲哀を肯定しており、告発や批判に欠ける」という批評もあるだろうという気がするが、私はこれもひとつの告発であり批判なのだと思う。「アクターズブルース」という言葉がどういうことかよくわからなかったが……。

土の会「婚礼の日に」(ローゾフ作・山村金平演出)。本邦初演のソ連の生活ドラマ。ここにもある新旧世代の対比、社会性に興味をわくテーマなのだが、日本と同じ青春ものというところへ観客の関心はいつてしまう。それにはやはり、ソ連でのコムソモールとか官僚性とか、社会主義の建設といった問題が十分わからせられないと無理なのだろう。豊

がでたそのひとつ。作品のせいでもあろうが素朴というが稚拙といわれそうな演技も、そのまま舞台の面白さになる。その点では舞台が面白いにおどろかされたといってもいい。もちろん農村は変わったし、青年たちも変わったはず。だからこの面白さというのは何だろう。演劇サークルというのも何だろう、と考えさせられる。

埼玉「恐怖」(ソリヤ作・若杉俊夫演出)は、ローゼンバーグ事件という歴史になった(実際はちがうが)事件を知らないかもしれない観客に対する配慮という問題を考えさせられる。あれだけの舞台、演技(やっぱり東働演では最高でしような)をもってしても、この感動のよわさは何なのだろうと考えさせられた。

ひとつは、「婚礼の日に」同様、アメリカ社会というものがわかりにくいこと(「カロール」にもいえることかもしれない)、舞台上ではわかるような気がするが、やはりなにかしら発見がないことからくるのだろう。つぎに歴史ものの上演の仕方という問題がある。昨年の東京演劇アンサンブルの「明日を紡ぐ娘」でも痛感させられたのだが……十年

島公会堂にしても社交ホールにしても、青春もの//恋愛もの//という受けとり方が強かったのは、若い観客の責任でもあるが、その辺を舞台に出しきれなかったことにもよる。それもやはり戯曲のむづかしさからか。

ただ本邦初演の大作をよくまとめた点は評価したいが、幕切れの処理はなにか背けなかつた。婚約者に「行って」と叫ぶ女性の感情のひだを象徴する必要があると思うのだが二回とも成功したとは思えなかつた。もっともその女性の感情そのものが、ソ連の人たち独特のものなのか、われわれ日本人同様のものなのか、不可解——というのも翻訳劇のせいだろうか。ともあれ、岩田君を含めて土の会の若手俳優たちの力演を買おう。

みちぐるうぶ「カロール」(ムロジエック作・須永良子演出)は、不条理劇というふれこみだったので意外だったが、作品はナチスにくみこまれていったポーランドのインテリゲンチヤの苦悶・弱さを抽象化して描いて、みごとなもの。演出者の何か大きな思い違いが残念だった。埼玉の「恐怖」のような装置とリアルな演技だったら、ほんとうに「恐怖」を感じさせたのではないか。個人的な恐怖

まえ、十五年まえといったあたりの作品上演にいちばん工夫があるのではないか。

今回の作品が、芳地作品をのぞいてはいずれも既成の、十年、十五年前のものが多いことについての批判もきいた。身内のことで気がひけるが、それぞれの劇団で討議してきめたことに何も言う気はない。むしろハウこんどはこれになったか、とそれから全体を判断することの方が多し。要するに作品がつくりだせなかつたのだ。その点では東働演では、一年おき位でない創作劇は出ないように思う。残念ながら舞台にのせられるものは、そんな創作テンポである。

実行委員会は、労演に対する働きかけなどかなり観客動員にも新機軸を出そうとしたが不発に終わった。人民、麦、民衆、土が事前に全通、電通が事後にそれぞれ自主公演を共通券で打った。したがって第八回演劇祭は、あの長い長い十一回共通券となったのだが、その全体の判定はまた一寸ちがったものとなる。自主公演は満員の成功のところもあったからだ。

ただ観客の少なさについて(1)創造面に力をそそいだから動員へ手がまわらなかった、と

から他人を「売る」行為の「恐怖」を。そして結局フアシズム体制の制圧に身をまかせてしまうことになる。その原形質をムロジエックは描いたのだろうに。

労働芸術劇場「仕置場」(大谷護作・林朋子演出)も、照明が暗すぎて、せつかくの労芸のベテラン演技陣の好演がよくみえず、ラジオドラマになってしまつて残念だった。

それでも大塩平八郎の首にまつわる部落民の問題が、差別と分裂の今日にも通じるテーマを提起してやることはよくわかつたが、これも幕切れの群衆の処理になつけないものがあつた。それに、大阪弁のようなセリフを用いるならそれに徹してほしいし(ということとはかなり練習も必要だろう)、かならずしもその必要がないという気もした。「方言」の問題は、いわゆる専門劇団の間でも案外かく考えられすぎでないだろうか。

人民劇場「けつまつびいてもころんでも」(山田民雄作・鈴木義明演出)は、たしかに十五年位昔のものだ。宮本研の「ぼくらがうたをうたうとき」や、鈴木政男の「サークル物語」や、演劇サークルそれ自体を描いた佳作

というのは通辞であり、むしろその逆。(2)たえず新しい客層の開拓がなければ、絶対に客はへるものだ、の二点を、実行委の全員がみとめたことは、案外こんごの活動に大きな影響を与えるのではないかと思つた。

第六回小野宮吉戯曲平和賞 決定について

一九七〇年度(第六回)小野宮吉戯曲平和賞は、飯沢匡氏作「もう一人のヒト」に決まりました。審査委員会(久板栄二郎・佐々木孝丸・村山知義・八田元夫・千田是也・木下順二・大橋喜一)の報告を要約します。

一九七〇年に発表された創作戯曲のうち、本賞の趣旨にそつて、二十数篇を選び、さらに左記五篇が最終審査の対象となり、

飯沢匡氏作「もう一人のヒト」

大垣 肇氏作「青春」

木下順二氏作「神と人との間」

本田英郎氏作「若い座標」

島 源三氏作「小さな駅の物語」

以上の候補作品に対する意見は次の通りです。「もう一人のヒト」は、皇室の存在を太平

洋戦争末期の混沌と結びつけ、リベラリストの皇族とフアナチックな軍人を対比させつつ爆笑のうちに天皇制利用の悪企みを諷刺した本格喜劇。

「青春」は、ある実在の詩人の生き方を中心に、戦前の革命運動と現在とのかわりあり、さらに民族問題にまで斬りこんだドラマで、その手法は詩の朗誦をとりいれ、過去と現在を交錯させるなど、新鮮なスタイルで自然主義なものをのりこえようとした意欲作。

「神と人のあいだ」は、第二部の上演を作者が自発的にとりあげたという事情があるにせよ、第一部「審判」だけを独立したものと見て、記録演劇に新生面を開いた作品である。東京裁判の老大な資料に取材し、ベトナム人民、原爆被災者の立場を原点として国際裁判そのものを告発しつつ、大きな劇的感動にまで高めている。

「若い座標」は、家永訴訟を契機として神話教育が社会的にクローズアップされている今日、教育の現場から文部省的反動イデオロギーをきびしく批判した作品。

「小さな駅の物語」は、国鉄労働者の当面している生活・悩み・たたかひの姿を、現場の労働者でなければ書けないみずみずしさ

豊かなユーモアの中にえがいた作品。

このうち、木下氏からは、同氏の「神と人のあいだ」を候補作としてとりあげるのならば、二部作として完成してからにしてほしい、また、審査員として、自作が対象の一つになる審議の最終決定には加わるべきでなくその意見は参考にとどめてほしいという申出があつて、委員会がこれを諒承するといういきさつがあります。

「もう一人のヒト」の飯沢氏へは、喜劇の育ちにくい風土といわれる我が国で、たくましい批判精神をもってひとすじに喜劇を書きつけているユニークな作家としての評価が与えられて授賞となつています。

私たち東西リ演から、働く現場からの創作劇として、島源三氏が候補の対象になつたことは、うれしい以上のことでした。

なお、これにちなんで、新劇講演会があり、ますので御案内しておきます。

日時 三月十八日 午後六時三十分
場所 六本木 俳優座劇場(整理券三百円)
内容 審査委員会報告・贈呈式

講演「喜劇の精神」茨木憲

「プロレタリア演劇時代」佐々木孝丸

(萩坂記)

応募戯曲選評

創作劇の重要性については、毎年の活動方針で強調されているにもかかわらず、全体として貧困であることは否定できない。高校演劇が大量の創作劇を毎年生みだしているのを見て、それを指導しなければならぬ立場の地域劇団が、劇団自体、またその周辺に創作エネルギーを吸い上げていないのは実に情けない現状といわねばならない。「演劇会議」の応募作品が十本に満たないのも、その結果であろう。

その中、栗木君を始め、薫田、みなみ、谷辺の四作品が、名古屋芸術劇場から出されたという注目はいい、むしろ、質的には手ばなしでは喜べないが、その他の劇団でも、こうしたエネルギーを蓄えている人が、まだまだいる筈だと思ふ。むしろその芽をむしりつけないのか、また、育てえない障害を劇団が背負っているのではないかと、もし、それは何か、東西リ演で十分検討しな

こばやし・ひろし

ければならぬと思う。とくに、西は関西芸術座の柴崎君、ただ一人であるが、ぜひ討論してもらいたい。

★柴崎卓三作「鉛筆」五一枚(関芸)

舞台は東洋銀行の職場である。合併吸収した紅南銀行の組合は戦斗的であり、善子は、凡ゆる迫害にもかかわらず東洋銀行の組合に入らない。それで仕事も与えられないが、毎日、鉛筆をけずってがんばる。それは信念でも、思想的な根拠があるわけでもない。ただ「紅南銀行の組合が好き」というだけである

こうした人物を設定したことは非常に面白いと思う。ただ、こういう作品は下手すれば、お話しで終るといふことである。作品の構成から行くと、集会用の小公演台本のような気がするが、五一枚という枚数から行くと、長く重い。主人公の善子自体が変人ととられては大へんである。それを変り者とみる観客自体が、実は変り者であつたことに気づかせな

「東リ演加盟のしおり」

内容

□東リ演加盟のすすめ 議長 黒沢彦吉

□結成のよびかけ (発起人劇団

(一九六三年七月) 演集・静芸

□七〇年代の出発にあたって はぐるま・京浜

□東リ演規約 のアップピールを再録)

□七〇年代の出発にあたって

第八回総会で討議
をつくされた運動
方針の詳細な解説

□加盟の様式

□東西リ演加盟劇団名簿

頒価 五〇円

発行所 静岡市昭府町二八九一

電話 〇五四二(四)七三三七

東日本リアリズム演劇会議

いといけないのではないか。

「結局」うちは貞女になれなんだ」というそれからどう展開するかと思つたら、無抵抗の抵抗になり、コンピューターまで使つて迫害の手段を考え、ここまでいい。結果「一人を愛せない女」ということになる。作者はどう結末に導くか迷つたのではないか。余りにも、けつたいな夢からの展開が尻すばみである。

★みなみ・しん「うまい話」二九枚(名芸)

うまい話である。会話は豊かで、力は十分にあると思ふ。とくに出だしの味のあるセリフ運びは実にうまい。

青年「アメリカには勝つてこないよ、小父さん、もう一本煙草くれよ。」

老人「(青年に煙草を出し)そりゃ、何もアメリカと手をきることじゃないよ。アメリカの核兵器の傘の中で……」

青年「(煙草に火をつけながら)そんな調子よく行くかな。」

老人「君は若いのに疑い深いなあ、若いもんは、もつと信念を持って生きねばいけんよ」

青年「信念じゃ腹がふくれんけん。」

こんな調子で人間を追いつめてゆけば問題

ないが、老人の口車にのり、青年が自衛隊に入る気になり、婦人が出てくると、もう会話のリズムが崩れてしまう。この婦人は老人のかつての部下の姉さんで、弟を殺し、なお、青年を自衛隊へ入れようとする老人に平和の敵として迫るが、もう、これは演説であり、スローガンの羅列である。

その上、青年が自衛隊の本質を知ると、婦人は、青年に漁師となって故郷へ帰れとさす。こうなると何のリアリティもない。せつかく構成も、発想も面白いのに残念である。

★谷辺むつみ作「村からのたより」四十枚

(名芸)

井上まさみという精薄の兄をもち、貧農でつかれ切った老母をかかえた千枝は、都会へ脱出しようとするが、山本兼一という青年に支えられ、村でやってゆこうとする話である。せつかくいい視点を定めながら、何を描こうとしているのか、わからない。農村の過疎化の矛盾を描くのか、貧しい井上一家を描くのか。(こんな条件の一家なら都会でも貧しい)、選挙を描くのか。

そのどこかに焦点をあてて欲しい。また、山本兼一は、定時制へ行かせるということだけで、千枝をふみとどまらせることができる

のか、共同のぶどう園が、千枝にどれだけ説得力をもっているのか。

村会の選挙のことも、共産党らしき山田太郎に投票を頼むが、とめを、あんな簡単にくどけるのか、そのきつかけは何か、どうもはつきりしない。とめにとっては、千枝を大阪から引きもどし、一緒に住むことを兼一が約束したら、山田に投票する気になるかも知れない。ところが、それは選挙のすんだ二場になっている。

一場では、千枝が帰ってきて、山田が当選するだけで、構成の弱さを示している。

★薫田八郎作「崩れない丘」三一枚(名芸)

わからない作品といっては作者に失礼だが芝居の経験が浅いため、舞台を知っていない結果といえよう。

美しかった佐渡が、観光地になり、都会に汚されるということをかこうとしているが、それが、整理されていない。都会の着年、佐渡の青年が多く出てくる、一人一人が生きていない。何で生かすかといえば、芝居はセリフの芸術であるから、凝縮されたセリフで描かなければならない。それが実に安易である登場人物も、ここでは正幸と秀子が重要な位置をしめているが、それと、どういう関係に

あるのか。無関係なら無関係の関係が作品の中で位置づけられ生きてこなければならぬが、それもない。いろんな登場人物が、作者の都合によってポンポン出てくる感じである。

また、三十枚たらずで三場にわたったのも構成力の弱さの結果である。場数を多くすることは、デッサンも十分でき、構成力のある人はいいが、最初のうちは余りすべきでない。一場で都会から帰ってきた秀子と正幸が、昔をなつかしんでいる所へ妹がよびにくる。と思うと、父が死んだといってすぐ酔っぱらって出てくる。これを酔っぱらって出てくるところから始め、秀子に会ったら、どうなる。芝居は変わってくる筈である。

三場の頭のサチ子という佐渡の女性が、それまで一度も出てこないのに、大阪の観光客に襲われるという大事件があるが、これも、なぜ必要なのかわからない。作者をよく知っているためか、少し敵しすぎたが、もう一度作品をばらばらにして研究してみたい。

★栗木英章作「三つの断面」三五枚(名芸)

数多くの作品を残してきた人だけに、独特のさびのきいた作品ばかりである。全部で三話であるが、一話は七枚、二話は十二枚、三話は十六枚と短く、きれいにまとめている。

これが、また彼の欠陥にもなっている。

一話「クロンベル爺さんの死」はパリーの日本人新婚旅行者をバックに、老歌手Aが子供たちに、核戦争の怖しさに脅えて死んだクロンベル爺さんの物語をしている。そのあと新婚旅行者が一曲頼むと、「日本は平和かね」と尋ね、やんわり断るという話だが、実にすっきりした楽しい作品である。

二話「告発」は佐藤という旧軍人出身の自衛隊幹部が、かつての部下であった田山という大学研究職員を誘かいし、その技術を使おうとするが拒否され、田山は消されるという話だが、伊勢湾に浮んだ身元不明のばらばら事件は実は田山であったとなっている。この作者は思いつきがうまく、想像力を自由にめぐらす力もっている。作者にとっては大切なことであるが、それがかみ合わないリアリティが極めて弱くなる。これはその代表といっている。

田山をささいこむのに、奥さんの入院費がどうの、子供の大学の費用がどうのというところで、一人の男がくどけると思っているのがどうかしている。逆で、金でさそったが断わられたから強引に誘かいたというのならわかる。しかし、それでも朝鮮語と通信技術く

らいでこんなことをしなければならぬのかこれが自衛隊の幹部では、自衛隊も力にならない。設定から無理である。

第三話「スクラム」は、組合分裂によって首切られた十二人が寮に籠城し、行商しながらがんばっているが、その中のさぶが脱落しかける。それをみつけたけんと激しい論争となりけんが立直るという話である。

最初のすべり出しはいい。とくにさぶがサウンド・バッグをなぐりながら、いらだたしさを示す辺りは、さすが栗木君のうまさである。ところが大切な所で破綻する。さぶの立直るのは、けんの嗜血だからだ。けんは血をはきながら、

けん「辛いことはゴマンとあらあ、そいつにいちいち弱音をはいてたらどうなる。憎い奴を喜ばすだけだ。：機関車のスピードをゆるめることはできん。負けてたまるか」さぶ「お前血じゃないか。」

けん「生きてるって証拠よ。腹ん中の血が、かっかっとおさまりきらないで、とびだしてくるのさ。」

これでは、けんが追いつめられてやけくそになったと思われても仕方がない。より悲惨な状況へ追いつめることで立直っても、ドラ

マは解決するかも知れないが、観客にとつては逃げとなる。

★武田将彦作「朝の光の中で」六十枚(演集)

掘はるみという電話交換手が結婚し、妊娠しているにもかかわらず退職しないので、掃除婦に格下げ、いやがらせをいってやめさせようとする。また、劣悪な労働条件に、ストライキに入るうとする空気がみなぎっているというのだが、これもドラマを掘んでいない作品といっている。

まず、何の会社かわからない。実にズサンな管理者であり、従業員だと思ふ。倒産直前でも、こんなあいまいな管理者はいまい、社長も常務も、はるみにいやがらせをいうために存在しているようなもので、何かといえはそれしか口にしない。まして結婚したらやめさせるといふのは、この頃銀行でもない。労働力の不足に苦しむ時代に説得力が弱いと思う。また、そういう会社があるとしたら、会社自体が経営的に行き詰まったのか、本人に欠陥があるのか、何か、はつきりした裏付がないといけない。

また、従業員も大へんな従業員である。組合もないまま自然発生的にストライキを打つなんて、百姓一揆でも考えられない。どう労

働条件が劣悪なのか、経営に不満があるのか
労務管理に不満があるのか、はっきりしない
課長の存在も不思議な存在である。もう少し
社長、常務、課長、堀はるみ、その他の人間
を具体的に掘り下げてもらいたい。

構成もすっかりしていない。堀はるみがな
ぜ残るのか、妹がなぜ現れるのか、堀はるみ
が倒れたら、妹はなぜ課長を電話で呼んだの
か、電話かけたら、十秒もたたぬ中に課長が
どうして自宅からとんでこれるのか、課長が
きたら、姉を課長にまかせてすぐ寝たり、時
間の経過も、人間も全く計算されていない。
もう少し、じっくり追究してもらいたい。

★小坂忠作「白い鴉」四六枚(民衆劇場)

終戦の年、戦犯として政界財界に嵐が吹き
すさぶ十一月を背景に、財界の重鎮郷田家の
出来事が描かれる。

郷田正次郎が戦犯として逮捕された留守で
ある。娘婿の石倉(化学兵器か微生物兵器の
研究責任者として大陸から脱出、郷田家にた
どりついたが、発見されれば戦犯となる人物
である)と杉村、それに郷田正次郎の妾か後
妻である圭子、かってマルキストの弟を中心
に緊迫した空気の郷田家を通じて、戦後民主
主義の出発点を洗いなおそうというのが、作

者のねらいである。

構成もがっちりしていて、人物も実に明確
に描き分けられているのに驚く。とくに前半
は非の打ちどころのない、無駄のない、全く
心にくいすべり出しである。異様な状況が異
様な形で運ばれていないので、より異様さを
生みだしている。

杉村「で、結局捕ったんですが、そのもぐり
こんだ憲兵は。」

石倉「……君は白い鴉というのを知っている
かね。」

杉村「フフ……こんどはお伽断ですか。それ
もあちらの民話か、小説に出てくる。」

石倉「実際の話だよ。——死骸をみつけ出す
名人とでもいうかな。人間といわず、ねず
みといわず、ほじくり出して喰いつく。鴉
は肉食なんだ。そのくせ自分では手を下さ
ない。フフ……いつも狼のあとをくつつい
て歩く……(略)」

上海から重火症患者にばけて憲兵と共に逃
げ帰ったことを聞こうと思うが、つねに話を
そらし、石倉の怪異な人物を示してゆく描写
力は並でない。

圭子が犬とはしゃぐ声、鴉の声、ピアノの
音、どれ一つとして無駄がなく、舞台と連り

だと思ふ。それだけでなく、東西リ演のこれ
と思う近くの演出者、作家とじかに話合っ
てゆくことも必要なことでしょう。卒直にい
って完成した作品は「白い鴉」以外にない。す
べて未完成なのである。改めて、いろんな批

別冊(2)のこと

『白い鴉』のこと

戯曲を募集して、その後、別冊(2)というの
はどうなったかという問合せを受けますので
そのことを書きます。結論から云うと、別冊
(2)の企画は実りませんでした。

そもそのところ、このプランは、70演劇
行動があのような成果をあげて、別冊(1)が出
せたので、よし、この手でいこう、みたいな
安易さは今から思うと隠せません。号令や掛
声で、どんどん創作劇など生れる筈もないの
ですが、かと言って、手を拱いていては、一
層、生れるべきものも生れぬだろうというこ
ともありました。ですから、決して悪いこと
ではなかったのですが、編集部の中の少数者
の発想の域をいかほどにも出ることができな
かったということは、問題としてあります。
しかし、そうは云っても、それは全く収穫
がなかったとはいえません。選評の中で、こ

見事なリズムをつくっている。ただ、圭子の
弟達三が入ってきて、やや崩れる。

達三が生きていないからだ。余りにもお坊
ちゃんで甘えん坊である。これが、この舞台で
は戦後民主主義を背負う代表者となっている
が、これでは戦後民主主義が脆弱であると思
わざるをえない。百戦錬磨のたくましさをも
つ石倉に比べればノミみたいな存在である。

また、石倉がMPの腫をのがれ脱出したあと
の圭子も妙である。それでほっとしているの
か、弟とゆくり話ができるので嬉しいのか。
姉との会話で、達三は甘えん坊を露呈してい
る。父のもとに帰らず独立するなんてことで
たくましさを感じたいのだから、逆に青く
さくなる。

無理な注文かも知れないが、これだけかけ
るんならできるような気がする。次の作品が
楽しみである。

★鈴木京子作「道草くつても」三六枚

組合の役員をやっていた海野豊三が地方事
務所の次長として、栄転の形でとばされる。
妻の幸子は本庁の組合の書記だが、夫が管理
職になったため、組合情報も簡ぬけとなるの
で組合から首切られる。こうした設定で舞台
は進行するが、この設定自体に無理がある。

判を自己の中で熟し、改稿してもらいたいも
のである。

そうすれば、次の作品は違った角度で見
る力も生れ自信となるものと思う。

ばやしさんもふれています。名芸の劇団ぐ
るみの取組みなどは大きな教訓になると思
います。ただ、全体として、別冊(2)を全国にむ
けて、東西リ演創作運動のデモンストレー
ションとするのには、応募戯曲は質的に弱
ぎました。

創作劇は、私たちのかけがえのない武器で
す。そのためにも、もっともっと虚心に、そ
して悪びれず——つまりは、「演劇会議」を
若い書き手たちの練習台として眺める風なの
ではなく——もう一度、つながりの丸ごとで
とりこんで頂けませんか。そうなれば、輝か
しい別冊(2)が、やがて実ります。

小坂忠氏の「白い鴉あるいはころもがえ」
一篇を本号に収録したのはそうしたいきさつ
からです。

多忙の中をこばやしさんありがとうございます
ました。西リ演からの応募が一篇ということ
もあって、選者として、仲さんを煩わすこと
を省いたこともつけ加えます。(秋)

もし、御用組合なら、簡ぬけになってもいい
し、まともな組合なら、そんなことで書記の
首を切るなんて考えられない。まして、地方
事務所の次長である。
部長にだきこまれた夫がやめてくれという
のはわかる。それに抵抗するのなら、このド
ラマは別の形ですっきりしてくるといえるよ
うところが、夫が一言やめてくれという、実
に素直に受入れ、転職してでも、この民主
主義の思想を子供に伝えたいというのは、子供
に対して大へんな思い上がりであり、子供はそ
れが民主主義かと、大きくなって批判するに
違いない。

妻の対立しているのは、夫の姿勢であり、
夫をそうさせてゆく管理体制であることを忘
れてはいけない。そこに焦点をあてて、もう
一度考えてもらいたい。

かつてな毒舌で申訳ないが、枚数に制限が
あり、舌たらずなのを許していただきたい。
ただ、書きっぱなしでなく演出部なり、友人
とぶつかり、細い点にいたるまでこれをもと
に批判をうけてみて下さい。恥かしがる必要
はない。そうした勇氣をもち、そうした体制
のとれる劇団が、創作劇をのばしてゆく劇団

白い鴉あるいはころもがえ

一幕

坂 忠

民衆芸術劇場

人物

石倉
杉村
圭子
連三
君枝
爺や

音に混って聞えて来る。

—— 開幕 ——

テラスに面した重厚な応接間。ステンドグラスが夕日を被って映える。毛皮を敷いた椅子を中心に、テーブル、長椅子、水盤をのせる小さなテールとその椅子。壁には、郷田家代々の肖像画（乃至は写真）。それに由緒ある置物等がそれに加えられると考える。

部屋にはテラスからと玄関につながる廊下からと、別室（たとえば書斎）からと、それぞれ入口が設定されている。——それらは一九四五年における豪華のかぎりがつくされていると想定する。

大理石の暖炉がある。そのまわりに

書類が積まれていて、杉村が別室からひとかかえの書類をはこび入れ、撰別しながら暖炉へくべる。
犬が吠えている。圭子が犬を呼びながら爺やをせきたてはしゃいでいる声がこの応接間へもれて来る。
石倉は群がっている鴉の様子を見ている。（それは同時に一種の警戒でもある）

声

太郎 ホホ： タロー 爺や早くつかまえて ホラ太郎 太郎ったら タロー もうお散歩は終わったのよ ホホ： 本当に太郎 タロー 爺や早く早く（以下登場するまで近く遠く聞えて来る）

杉村 で、結局捕まったんですかそのもぐり込んだ憲兵は？

石倉 ……君は白い鴉というのを知っているかね？

一九四五年十一月と設定する。

東京近郊。海に面した丘陵の松林、市街をぬけた田畑のはずれの坂道を急に曲って三十歩たらずで、この家の門がある。

鴉が松林に群がって鳴いている。

やがて単調なピアノの音が遠い波の

杉村 フフ…： 今度はお伽噺ですか、それともあちらの民話か小説に出て来る…：

石倉 実際の話だよ。——死骸をみつげ出す名人とも言うかな？人間と言わずねずみと言わずほじくり出して喰いつく。鴉は肉食なんだ。そのくせ自分では手を下さない。フフ…：いつも狼の後をくつついて歩く。利口なんだなあ鴉って奴は。

杉村 ほおウ？

石倉 夕方になるとあややって高い木の上に群がって狼を見送る。彼奴の活躍しだいで豊かにもなるし貧しくもなる。だから多分感謝の気持だなあ、フフフ、あの声は。

杉村 しかし、本当にいるんですかねえ、白い鴉なんて、？

石倉 フフ…：もし赤い雪が降ったら赤い鴉も悪くはないハハ…：

杉村 成程。ちょうど、なんですすね、雷鳥みたいなもんですね。

石倉 季節によってころもがえか、フム、白くなったり黒くなったり…：ハハ…：八方美人も悪くはない。

杉村？ ハッポウビジン？

石倉 新京からノモンハンへ行く途中で見た時にも白かったなあ。夏だったよ。（指を

折って）十四年だったかな、うん六年前だ杉村 ほおウ。すると一年中白いままなんですか。

石倉 やはり肥えていた。六年前か、フム。杉村 ——むこうへ渡ってすぐの話ですか、成程。ロシアとの激戦の真最中。

石倉 あの頃は、まさかこうなるとは思わなかったが。時間だなあ、歴史だよ——。

杉村？（石倉にまぎこまれて混乱している）

石倉 牙がない時にはそういう生き方もあるわけだ、じゃあないか？

杉村 えっ？

鴉が鳴いている。

石倉 大きな鴉だ、随分沢山いるなあ。食物には不自由しなかったか、フフフ狼のおかげで。——ほおウ？あの無人島に巣があるのかな？

鴉が飛び立つ気配。

杉村 で、その包帯をぐるぐる巻いた重火症患者を乗せて、船は上海を出発したわけなんですすね？

石倉（外を見たまま） いつもこうかね。杉村？

石倉 化粧をしたり犬と散歩をしたり、えっ？ フフ…： 幸福な女だ。

杉村 まあ、——今日は特別ですか、？羽根を伸ばしているというか、はしゃいでいるというか。まあそういう具合ですね、朝から。（石倉の話も外の声も面白くない）
石倉 察する所この御時世では、マルクス主義者の達三君とやらも再転向巻き返しという所かね。

杉村 演説一発で労働組合が出来上がる御時世ですからねえ、まったく。お父さんの角印は、宮原産業はおるかマルキスト宮原達三まで救い出したしたわけですよ。——成程、幸福な女ですねえ、まったく。

石倉 純情だったか、勇敢だったかどちらかだなあ。フフ…：お父さんがかこっているという噂は聞いていたが、あれ程美人とは思わなかったよハハ…：宮原一族も、あの女のおかげで生きのびたわけだ。場合によってはこれから、もうひとつもうけも出来るわけだし、圭子様って所かね、フフ…：

圭子のはしゃいでいる声が一瞬この部屋を通りぬけて行く。

杉村 で、結局そのもぐり込んだ憲兵はつか

まったくわけなんですね。

石倉 フフ……

杉村 で？

石倉 憲兵とわかれば銃殺だな。十中八九。

杉村 するともう土の中——。従ってその重火症患者は、国民軍からも博多港のMPからも無事のがれて郷田家の応接間にいるわけですね。で？、包帯の中にしまい込んで来たその重要なものとは何ですか。

石倉 ああ、だいぶ陽が傾むいた。少し寒いなあ。(戸をしめる)

杉村 兄さん、よかつたら、手伝いますよ。

石倉 (杉村にふりむいてから) あの少し沖でねえ、黒ダイをひっかけたことがあった家内と一緒に遊びに来た時だ。君が結婚する半年位前かな。正代さんがサシミにくれて、お父さんが大喜びでねえ。君との話がまとまったせいもあったのかな？フフ……随分昔の話だ。

杉村 夜づりをやったことがありますか、案外大きいのがひっかかりますよ。去年の夏にね、新しい発動機付きのを入れたんですが音がやかましくってね。船小屋は前と同じ所ですよ。そうだとボロ船が一艘あるんですが、あれだとあまり沖へは出られません

ね。
圭子 戦争が始まってからですわ。
石倉 臆病かな？それとも失恋かな？
圭子 ——。
石倉 フフフ；ピアノにかじりついている程ひまな奴もおったわけだ。
圭子 ピアノも鉄砲も選べない人間もいたんですわ。

石倉 ほおウ？
圭子 ——おとなしくって、戦争ゴッコさせたことのないような子供が、そのまま大人になることだって——。おわかりになりませんか。

石倉 まあ、ほんの少し才能が低下しただけかな。ピアノも郷田幸次郎もこれからというところか、フフフ。ねえお母さん、戦争も終わったことだし。

圭子 娘達は圭子さんと呼んで下さるんですよ、あなたの奥様も。

石倉 ほおウ？フフ……しかし、妙だねえ、やはり、妻の父の妻がだね、妻より年下だということが、つまり、ハハ……(杉村も低く合せて笑う)

圭子 ——。春行様大きくなりましたわ。夏の間ずーっとここで遊んで行きましたの

よ、波が荒くて。

石倉 夜づりか。フフ……夜づりには懐中電

灯が必要だなあ、——(圭子の声が近づく)

杉村 ……(中断されてしまう)

圭子と爺やがテラスから入って来る。三十そこそこの上品な女である。

圭子 太郎ったらドロロンコの足で飛びつくんですもの、ホラ、今朝つづらから出したばかりなのに。(部屋へ入って) 水盤をそこへ置いて(花とハサミを受けとる) たけやにお夕飯早くするように言ってちょうだい。旦那様の分は別にしてとっておくように。それから幸次郎様にお薬をね。ああ、新聞が届いているわね。(生け花を始める)

爺や (うなずいて去る)

圭子 かたずきましたか？

杉村 ええ、もう少しで終わります。

圭子 もったいないですわね。

杉村 こういふ御時世ですからねえ。

圭子 山岡さんからは、まだ何も？

杉村 ええ、まだ。外務局へも連絡してみたんですが、あつちもごたごたしてましてさっぱり。

圭子 おかしいですわね。

石倉 あの温室は圭子さんのために作ったんだそうだねえ、お父さんが。
圭子 よろしいんですの？お帰りにならなくて、奥様御心配なすってますのよ、まだ支那にいとばかり思っらっしゃるんですから。

石倉 だろうねえ、戦死通告が届くまでは。圭子 少し遠くへ買物に行かせましょうか爺やに、MPのことなら大丈夫ですのよ。お奥様お喜びになりますわ。春行様も。

石倉 お父さんがもどいたら今夜にでも帰る——それとおおじやまかな。
圭子 旦那様がおもどりになることと、石倉さんが御自分の家へお帰りになることとがどう関連なすってらっしゃるんですの？

石倉 ほおウ？いい香いだ。
圭子 いったい支那で何をなすてらしたんですの？
石倉 圭子さんは百合の花が好きなんだねえ

温室が半分以上それだ。
圭子 (絶対乗らない) 石倉さんは化学が専門でしたわね、ばけ学の方を。旦那様いつもあなたのことを自慢なすってましたわ。

石倉 そう言えばまだ、水盤に生けた罌粟の花を見たことがなかった。

杉村 ロバートソンとはもうとつくに逢って

いるはずなんですわ。

石倉 案内手きびしいなあ。しかしまあ、問題はどこまでやるかだ。どこまでやる気があるかだ。

杉村 ええ、指令発表後十日たらずで呼び出されたお父さんに対して。

圭子 噂は色々ですからね。

石倉 そう、死刑だとか、シベリア送りだとか。それに、アメリカのマルクス主義者も随分来ているそうだからねえ。

圭子 待つししかたありませんわね。

石倉 そう、連中が何者であるかはつきりするまでは、うっかり動かかん方がいい。

杉村 ——。(煙炉にくべる手を休む)

圭子 (石倉と杉村を見る)

少しの間。ピアノの音(テラスから)

石倉 (ピアノのメロディを聞きながら) 医者には毎週来るのかね。

圭子 いいえ、一と月に一度。

石倉 俺の顔を覚えていた所を見ると、そんなに重症じゃあない口もきけるし、フフ圭子 ええ、ほとんど正常ですよ。
石倉 お母さんがこの家へ来てからだそうだ

圭子 あなたが少佐に御昇進なすった時旦那様、奥様と春行様をお呼びになってお祝いをしましたのよ。杉村さんも御一緒でしたわね。でも誰も、あなたが支那でどんなお仕事をなすってらっしゃるのか知りませんでしたわ、あなたの奥様も。

石倉 どうだね圭子さん、罌粟の花を植えてみては。白やら紫やら真赤、だいたい色もある。森のはすれの沼地に群生している姿なんてのはもう、それはあざやかなもんだ。温室なら今から植えると二月頃には花が咲く、一足先にこの応接間は五月だ。

圭子 植物の研究をなすってらしたとおっしゃりたいんですの？
石倉 フフフ、ハハ……植物の研究もやったかな？フフフ、化学というのは単独では存在しない。植物と動物がどう化合するかというふうな、ハハ……、これはきわめて専門的な事だ。

杉村 (のがさず口をはさむ) 成程。しかしその専門的な奴がですねえ、不都合な場合も起りうる、ないしは命にもかかわるといふ場合を考慮してですねえ……

石倉 君はお父さんの書類を焼却しているわけだ。確かに、お父さんの立場といい、東

洋物産の事業といい、こういう御時世では不都合な材料ばかりだな。ましてこの場合連中が何物であるかハッキリしていないんだからねえ……

杉村 成程？すると兄さんの書類は不都合ではないわけですね？

石倉 科学の到達した成果という奴は万国共通でねえ、情熱的な政治論議とは別のあつかいを受けるのが常識だな。ロシアでもアメリカでも。

杉村 ところがこの場合、博多港についた重症患者が、一時間もしないうちに病院からいなくなつたんですからねえ。連中がそれに気付かないわけがない。

石倉 そう。だから連中が何者であるかが先決だ。そして、つかまる時期が問題だよ。

杉村 しかし、今は一秒一秒が問題なんですよ。

石倉 むろん、MPが順回しているこの家で俺が二十四時間もお父さんを待っていることが問題だよ。

——石倉と杉村が新聞に行動を起すが

圭子 エッ？

杉村 戦犯容疑で新聞にのつたんですよ。

圭子 ……

杉村 ことによつたらですねえ、……ことによるんですよ。

圭子 ええ。

杉村 心配じゃあないんですか。

圭子 えっ？

杉村 (キョトンとしている)

石倉 まだ裁判までには時間がある。

部屋がパッと明るくなる。三人が入つて来た爺やに視線を注いでしまふ。

爺や (それには気付かずいつもと同じテンポで灰皿を置き空になった容器を取つて去ろうとする)

石倉 (おちついた声で) 爺やさん。

爺や (ふりむく) ……

石倉 ——。すまんが、俺の上着とポストンバックを持って来てくれ。

爺や (うなずいて去る)

圭子 ——。お帰りに来るんですか？

石倉 帰える？どこへ。

圭子 お出かけになるんですの？

石倉 この家にはあまり長居をせん方がいい

杉村がゆする。——椅子にかかった毛皮の位置を直しよれた灰皿を持って去ろうとする。

圭子 幸次郎様にピアノをおやめになるように言つてちょうだい。また熱が出ると大変ですから。

爺や (うなずいて去る)

杉村 治安維持法廃止、特高警察廃止、産業統制令解散——。廃止に解散、再建に結成どうなることやら。

石倉 日本に着いてから新聞面白く読み物はない。インドネシア独立、ベトナム独立ええ？毛沢東氏は意外に元氣にあの巨大な大陸を赤くそめつつある。——面白いのはこれからだ。いったいあの巨大な大陸を誰が制覇するかだ。それによつてはもっと面白いことになる。

杉村 ほんの三ヶ月ばかりの間に、鼻つたれ学生から小便ぬぐいの看護婦まで、民主化だのストライキだの、三ヶ月たつたたたない内に、警察病院の屋上にまで赤旗——。戦犯逮捕、政治犯釈放、男女同権、自由平等、ああ、まったく。(いらいらして来る)

石倉 フフ……まだまだ、始まるのはこれからだ。歴史なんてのはそう簡単に変わるもん

ようだ。

圭子 ——。

杉村 あては？

石倉 あるよ。

杉村 どこへ。

石倉 フフフ……

杉村 大丈夫ですか？

石倉 ——。さあ。夜釣りの最中に捕まるかも知れんし、神戸へ向う汽車の中かな。

杉村 ……(石倉の行く先を察する)

石倉 それとも——。まあいずれにしろ俺は上海陸軍病院で爆死しているんでねえ。軍事裁判とやらにかけられて、もう一度死ぬのも悪くはない。ハハ……。(この部屋がなごりおしいというように見回す)

圭子 ……何か大変なことをなすつてらしたんですのね。

石倉 ——。花をいじりながら暮したわけではなかったからねえ。フフ……。十になるかならない子供までが、むこうでは命がけでおどり込んで来るんだ。なにぶん実験室がそういう所にあつたんでねえ、研究を進めるためには俺も命をかけたわけだよ。(郷田家代々の肖像画に眼が止つている) おわかりにならないでしょうな。——マッチ

じゃあない。今眼先に見えるものが10年前はどうだったか、10年後にはどうなるか。科学が迫る道すじと同じように、歴史は人間を超越したりはしない。(といいながら新聞を読んでいたが——一瞬その冷静さが微妙にくずれていく) / (新聞をテーブルに置く——生理的な動搖をかくすことは出来ずタバコをとり出す——手がふるえてい

杉村 ? (ある種の子感が走る——新聞を取る——) / (音ざめて行く)

圭子 (急な沈黙に気付く) ?!

杉村 お父さんが……

圭子 (杉村から新聞を受けとって一読する)

沈黙。ピアノの音がつきぬけて行く。

石倉 (混乱しながら決断を下そうとしてい

杉村 (懐中時計を見てつぶやく) もう80時

間以上だ。

圭子 (水盤に水をそそいでから、ひとりごと) お花が少し多すぎるかしら、(花をぬいてみたりする——何んの衝撃もない)

杉村 (圭子の様子を少し見ている) 心配じゃあないんですか。

棒から鉄砲まで、馬車に積んで商売を始めた郷田正左衛門以来六十何年、郷田産業、東洋物産、東洋汽船、郷田倉庫と、ちつとは世に知られた財産家になるためには、この御先祖も命がけだったわけだ。そして郷田正次郎も、新京から北京をぬけて、台北からマニラ、シンガポールへつながる大東亞共榮に、命をかけたわけだ。ねえ圭子さん。あなたのあの、温室を作つたお父さんがだ。

爺や (話しの途中入つて来て、上着とポストンバックをテーブルの上に置く。石倉の話がとぎれたので) 奥様、玄関にお客様が見えとります。

石倉 / (素早く上着をとり、ポストンのチャックをあけ、手をつっこみ、そのまま逃げ場をさがす)

杉村 (撰別していた書類をいきなりくべて別室へ石倉を逃がそうとしながら) 日本人か、

爺や (あまりの権幕に思わず) ハア? ……

(はいともいえずともつかない返事であるが)

杉村 / (石倉を見たり、散らばつた書類を見たり、判断にとまどい右往左往する)

石倉 (逃げようとはせず、来る時が来たというように上着とポストンをデラスの入口に置く)

杉村 (この石倉の行動にも愕然として) 爺や (緊張がおさまったのでようやく) あのう、奥様——赤ん坊を抱いた若夫婦でした……

杉村 赤ん坊を抱いたア?

圭子 ——。まあ。

爺や はあ。

圭子 (来訪者を察知して——去る。爺やも続く)

石倉と杉村、互いにたたくしのように笑い合う(ピアノの音がやんでいる)

杉村 (もとの所へもどる)

石倉 (ポストンから二冊の美濃紙を手早くとり出す) たのみたいことがある。

杉村 ——?

石倉 ——。これをあすかってくれ。

杉村 (受けとって) 植物と動物の化合に関する研究をですか?

石倉 人体における鉱物の作用に関する研究とでも名付けようか、日本帝国陸軍が、人と金をつぎ込んだ成果だ。

(爺やノ——たけや——)もどって来て) 大変だったわね長い旅で、(爺やが入って来る) お風呂の加減見てちょうだい、赤ちゃんを入れるの。新しいタオルをね。ああお風呂がすんだらなれへ案内してあげて——(君枝に) 眠っていて可愛想みたいですけど、つかれがとれますわ。(赤ん坊へ) ねえ。

君枝 はあい、ほんとうにお姉さん、何から何まで。

圭子 (笑って君枝の手さげを爺やに渡す) 爺や——(うっとり赤ん坊を見る眼)

君枝 (杉村と石倉に) すみませんが、おさきにいただきます。(爺やに導かれるようにして去る)

圭子 もう食事が出来るわ。あなた寝る前がいいでしょう? お風呂。

達三 うん。

圭子 (思い出したように) 旦那様の一番上のおじょうさんの御主人、石倉さん。

石倉 (シロリと全身をなめるような会釈)

達三 始めまして、宮原です。

圭子 二番目のおじょうさんの御主人、杉村さん。

杉村 (ニヤリと) 始めまして。

杉村 (ページをめくる、暗号である。石倉を見る) すべて研究すみの、ですか?

石倉 すべて実験済みだ。

杉村 解説方法は?

石倉 最悪の場合……。

杉村 ……。

石倉 俺の葬式を引き受けるんだなあ。(水盤の花を一本ぬく) 肉体のほんの一部を切

って売る勇氣さえあつたら、幸福なんでものは案外手近にあるもんだ。じゃあないか?

杉村 ええ、フフフ……。

石倉 フフフ……。

廊下の話し声が近づく。杉村書類を内ポケットにしまふ。圭子が赤ん坊を抱いて入ってくる。達三と君枝がそれに続く。場違いな身なりである。

圭子 ……やはり似てるわ、フフ……、唇の形なんかそっくり。(ほおずり)

達三 失礼します。(青白い顔、細くキャンヤな体つき、時々軽いせき、ほとんど気にならない程度で)

君枝 (深くいていねいにおじぎ)

圭子 弟ですの、お嬢さんと。

達三 (会釈)

圭子 大変だったでしょう? 駅から遠くて。

達三 うん、途中で道を間違えてね、岬のむこうに出てしまつて。しかたがないから、

松林を目当てに浜づたいに歩いて来たんだ。いい所だねこのあたりは。夕陽がちょうど沈みかけて、久しぶりに撮りたかったんだけど、フィルムがないもんで、フフ……。

なんだかとてもいい気分になつてしまつた目当が近くなつたもんだから、よけい。

圭子 フフ……、つかれた?

達三 うん少し、でも最近良く眠れるから朝が楽しみでね、新聞が待ちどおしい位。

石倉 結構なことだねえ。

達三 ええ、さっそく明日は早起きして、このあたりを散歩しなけりゃあ。

石倉 玉音放送は聞いたかね。

達三 ええ。

圭子 船があるわ、でも朝は少し寒いから、

体には良くないわね。

石倉 ゆかいだったかね。

達三 ええ、(なんととなくうなずいてから)

ハア?

石倉 郷田正次郎が逮捕されたのを知っているかね。

石倉と杉村 (挨拶ともつかない挨拶)

達三 (リネックサクとスーツケースをおきながら(八月十五日に生れたんですよ。

達三の「達」と平和の「平」をとって「達平」とつけたんです。フフ……。(スーツケースからカメラをとり出す)

君枝 お姉さんにも相談してからと思つたんですけど……。

圭子 タッピー? 達平。達平くん。フフ。いい名前だわとても。(君枝に) ああ、おかけなさい。つかれたでしょう?

君枝 はあい(抱きとろうとしながら) 汽車の中じゅう泣き通しだったんです。混んでいてギンリだったんですからよけい。(抱きとって) お姉さん、本当に色々……おせわばかりかけまして。

圭子 体はもうよろしいんですの?

君枝 はあい、おかげ様でもうすっきり。

圭子 そう、(のぞき込んで) 寒くなかったかしら。(達三へ) ゆっくりして行くんでしよう? しばらく。

達三 どこか腰をおちつける所をみつけるま

でと思つて。いい?

圭子 (笑つてうなずく) ああ、(君枝に)

お風呂がわいてますわ。ねっ。(廊下へ出

達三 えっ?

石倉 徳田球一が釈放されたのを知っている

だろう?

達三 (人物をわかりかねて圭子を見る) は

あ。

石倉 ゆかいだなあ、やはり。

達三 あなたは……。あのう……。

石倉 フフ……。旦那様の一番上のおじょう

さんの御主人さ。ハハ……。

達三 ええ。

石倉 特高もないし徴兵もない。フフ、思

いっきり羽根を伸ばせる時代が来たわけだ

達三 ——。ゆかいじゃあないんですね? あ

なたは。

石倉 ゆかないのは君達だけだろう、えっ?

達三 そんなことはありませんよ。クリスチ

ヤンだって釈放されましたし、戦争に反対

した人全部が帰されたんですからねえ。

石倉 ほおう。

達三 逮捕したものが逮捕され、逮捕された

者が釈放される。これが八月十五日以後の

日本ですね。

石倉 君達の實力かな? やはり。

達三 あなた方の實力ですよ。

石倉 ほッホオ。君は仲々の秀才だなあ。そ

うするとやはり、マルクス主義は勝利の朝をむかえたわけかね。

達三 フフ……、まあ、そんなこともないでしょうけど、それに近いかも知れないですね。

石倉 ハハ……。君の腫は澄んでいる。だが俺の腫も澄んでいる。刑務所が満員になるかどうかは別だからねえ。

達三 お互い、希望の持てる時代をむかえたわけですよ。

石倉 そう。誰を逮捕するか、日本人が決めているわけではないという保障付きでねえ——まあ、今夜の日本が来年も今夜の日本だと信じてのことだ。夜が明けたら陽が沈むなんてことのないようにね、お互い。

達三 ええ、日本帝国主義が息をふき返えしたりしないようにね。

石倉 そうそう、アメリカが社会主義にでもなることを願ってだ。(時計を見る)

杉村 スコッチでも持って来ましようか、どうです？

石倉 ——クツを持って来てもらおうか。

杉村 (キョトンとしてから懐中時計を見て思い出したように玄関へ去る)

石倉 さあ？(上着を着る)星が沢山出てい

るぞ、明日は快適な散歩が出来るねえ。

圭子 食事が出来ますのよ、もう。

石倉 命をかける時には腹がへっていた方がいい。

圭子 奥様にお伝えすることは？春行様にも石倉 遺言を残すにはまだ少し時間がある。圭子 よろしいんですの？

石倉 この有能な日本人達を処刑するとしてら、それは随分無能な占領者達だ。フフ……。だが、もしも、郷田正次郎が処刑されたら、そうだなあ、立派な墓を建ててやりなさいと言いつ残しておこうか。お母さんの青春が、この邸宅の千倍にはなつて帰ってくるんだからねえ、えっ？、そしてその場合は、くれぐれもマルクス主義には反対することだ。

杉村 (入って来て外の様子をうかがってからテラスへ靴を置く)

石倉 同志諸君へよろしく。

達三 ええ、お元気で。

石倉 ありがとう、おそらくね、フフ……。

杉村 (懐中時計を見て)MPが巡回するまで、まだ三十分はあります。(懐中電灯を渡す)

石倉 もしも、生きて逢うことがあったら、

その時は沢山ごちそうするよ。

(素早く行手を確めて去る)

杉村 (テラスに立って見送る)

達三 (テラスへ行って外を見てから)どこへ行くんですか？これから。

杉村 ——。さあ。——。地獄かな？

達三 ——。

杉村 多分。針の山のずーっとむこう。

達三 ——あつ、松林の中へ入った。

圭子 ——反対になってしまったわね。

達三 (にっこり笑う)戦争が終つたんだなあ。ホントウに。

圭子 良かったわねえ、無事で。

達三 (笑う)

杉村 (書類をくべ始めている)

圭子 君枝さんのお父さん、帰ってらしたの？

達三 うん、教会の焼け後にバラックを建ててね、続けているんだ、お母さんと二人で。

圭子 一度だけお逢いしたのよ。

達三 うん、逮捕される二日前だったんだ、それが。

圭子 そう。

達三 家中満員でねえ、おしめをしている子が八人もいるんだ。——それもふえる一方

だし——

圭子 喜んでくれた？

達三 うん。だけど君枝がつかうそうでね——お母さん、達平を抱いて泣いているだけだったんで。お父さんがいなくて一番大変な時に僕と一緒にだったもんだから。——つかうって来たらねえ。二時間ばかりで帰って来たんだ。

圭子 そう——。

杉村 (書類の中から一通の手紙を取り出して読む)身体髪膚、是を父母に受く——敢えて毀傷せざるは孝の始めなり……。フフ、身をかくし、道はずれ、もって父母を泣かせるは、孝の終りなり、か？少し違うかな(これは、手紙の文面とは違う。——達三に手紙を渡す)覚えてるかね、(封筒の裏を上にして見せる)

達三 高林主任刑事——ええ。(文面を読む)

杉村 ——先般、貴殿より受け賜りました宮原達三君の件、署長閣下自からの御処断の結果、罪状なしと判明、釈放される事に相成りました由、御報告申し上げます——

圭子 それがどうかなさいましたの？

杉村 焼こうか焼くまいかと思つてねえ。

達三 郷田正次郎の印を持って僕の身元を引

きとつて下さったのは、あなただったわけですか。

杉村 まあ、フフ……。僕の叔父に当るわけだからねえ、君は、それとも、迷惑だったかな？

達三 いいえ。(圭子に手紙を渡す)

杉村 こうなるとわかっていたら、大阪なんかから帰って来るより、刑務所から帰って来た方が、君のためにはなつたんだらうかねえ。その方が盛大だったわけだし。

達三 僕のことなら、心配ありませんよ。

杉村 それはそうだ。御両親は健在だし、宮原産業も健在だし。やろうと思えば同志諸君も沢山帰って来てるんだし。

達三 ええ、その通りですよ。だけど、僕は家へは帰らない。

杉村 ほおウ、成程。

圭子 どうするの？これから。

達三 働くよ。(杉村へ)僕の事よりあなたはどうかするんです、これから。

杉村 さあ、故郷へ帰って百姓でもやるかな。——君もどうだね。

達三 フフフ……。 (少しせき込む)

杉村 フフフ……。ハハ……。戦犯に問われる程大物じゃあなかったことが不幸中の幸

いかな。しかし、君は、幸い中の不幸だったねえ。

達三 これからですよ、新しい日本が始まったばかりなんですから、(カメラのシャッターを切る)——あの日本を、主体的に生きなかつた責任が、僕にはあるんだから。(圭子に言っているようでもある)

杉村 そう、君の数少ない先輩諸君が、拷問台で体ごと主義を主張していた時に、君は女を愛する自由を確保していたわけだ。

達三 (細くちぎれそうな笑顔の中、——圭子に言っているように、)宮原達人の加護から必死に逃げ出して、南京から武昌をへて長沙まで、侵略戦争と百も承知で出かけて行ってはみたんですよ、ところが——(軽くせき込む)フフ……。運が悪くて。

杉村 そう、そうだったねえ。

達三 とにかく、宮原達人からは逃げ出せたが——、姉さんからは、とうとう逃げ出せなかつた。フフ……。

圭子 生きていた方が良かったんでしょ？今になってみれば、君枝さんのおかげよ。強

情なあなたをほんとうに助け出したのは。

達三 (まぶしそうに笑う)——。

圭子 家へは帰えらないの？ホントに。

達三 うん。

圭子 でも大変よ、これから。それに……。

達三 大丈夫だよ、これからは。

杉村 新しい日本が始まっていることを考慮に入れればねえ。

達三 ええ、新聞の活字から、新しくなり始めている日本を、僕は祝福しているんだ。

杉村 君の先輩諸君が、日本を新しくするということになるかも知れないことを、期待してかね。しかし、そう簡単には行かんだろう。

達三 だからこそ僕は、これからの日本にかける。

杉村 これからというのは十年も二十年もあるわけだ。うむ。従って今、何を選択するかが、かなり大切だ。あるいはだ、君のこれからの努力が、君の達平君にとっては、ささいなものであるかも知れないという場合も起りうるわけだ。えっ？

達三 どういうふうな解釈されるのも、あなたの自由なんですよ。そういう時代になったんですから。

杉村 ——十年たつてからにしようか、この続きは……。

達三 ええ、(カメラのシャッターを切る)

ピアノの音が始まっている。

達三 姉さん、家へ帰えらなくていいね。

圭子 体さえ心配なければ。でも、待っているのよ、お父さんもお母さんも。

達三 うん。

圭子 いいのよ。自分で選んだ方へ行けば。あなたは空想家なんだから子供の時から。

お父さんとも合はなかったんだし。私と違つて強情だったもの。髪の毛ひっぱられて何度泣かされたか知れない。フフ……。

達三 ——ありがとう、姉さん。

圭子 何故？

達三 姉さんの残した宮原へ帰りたくないんだ、やはり。

圭子 私は、自分で選んだのよ、ここを。

達三 でも……。

圭子 あなたのせいでも、お父さんのせいでもない、私は自分で選んだのよ、——食べる苦勞も着る苦勞も、没落していく苦勞もせずにすごしたここでの暮しに、満足しているわ。

達三 姉さん——。

圭子 ただ、これから何が始まるのか、ほんの少し怖いだけ。何が始まるかわかりさえすれば、私は、もっとそわそわ動き回っているわ。

だけど——。

達三 (問いつめることになつてしまふので言えない)

杉村 ——。(すっかり燃し終つてかたすけにかかる)

達三 (テラスの入口に立つて) 単調で暗い。

圭子 ええ、幸次郎様が二年程前に作った曲あんなふうになるほんの少し前。

達三 違つた事があるよ。姉さんがここへ来る少し前——何んという曲？

圭子 「良平の歌」と自分では呼んでいるの指をこう一本立てて、三ツか四ツの子供みたいにひくのよ。

杉村 ドイツから帰つてすぐ、彼は恋をしたんだ、もう四年も前に。

圭子 (杉村を見る) ——。

杉村 (得意そうに) だからお父さんが満州へ飛ばそうとしたわけだ。郷田公司司長の肩書きに陸軍中将の娘をくっつけてねえ、フフ……、それからすぐだ。

達三 良平というのは、人の名前？

圭子 ええ、結婚したばかりでボルネオへ行った親友の名前なの。ピアノリストだったのよ。戦死したの。十七年に。

達三 ——。

おうとするが歪んでしまふ)

達三 ——。

圭子 (体をととのえて支関へ向う)

達三 俺は、何を確かめたらいいんだ。(戸口へ向う) 郷田は、大東亜戦争の源動力じゃあないか、それを——。(支関へ向う)

間。ピアノの音。

君枝 とてもいい湯かげんでしたわ。

爺や (部屋に誰もいないので——テーブルに風呂しき包みを置いて開き、わた入れを出して達平にかけてやりながら) わしの古い着物をほどこいてね、婆アさんの手まねをしてねえ。もう外は寒いからねえ。

君枝 爺やさんがお作りになったんですか？

爺や へへ……子供が産れるたんびにね、婆アさんが着物をほくして作っていたの思い出して、——四十年もつれ合ったもんだから——へへ……もう眼が悪くてね。あのピアノをひいとる幸次郎様に、糸を通した針を何本も作つてもらつてねえ。へへ……

こつちの奴も、良かったら使つてやつて下さい。(おしめを一枚一枚とり出してたたみながら) おしめもこしらえたんですよ。やっばり、これの方がやさしいですよ。へ

圭子 もし本当に新しい日本が始まつたら、

私は、幸次郎様をあそこから出して、庭にピアノを置いて思いっきりひかせてあげるわ——自分にどんだんのかかって来る仕事を、器用にさげなかつたあの人が臆病すぎたとしても、あの人はピアノしか愛せなかつた人だったのだから——。自分の意志や感情を思うままに現わせる毎日が訪ずれるのなら、私は何主義にも順応する。

達三 戦争に協力するか、刑務所へ行くか、肩をすぼめて戦争が終るのを待つかしらか選

びよりのなかつたあの日本は終つたんだ。

圭子 でも、何も変らないことだつて、起りうるのよ。達三。

達三 姉さん。新しい時代に向う時には勇気がいるんだ。ヘドが出る程自分の過去が嫌いでも、自分の欲しいものは手を出してつかんでみないやあ。だから、僕は家へは帰えらないよ、新しい日本の出発の日に生れた達平と一緒に、僕と君枝は歩き出してしまつたんだから。

圭子 自分で選んだことなら、決して後悔したりしないんですよ、あなたは。

杉村 そう、何を決断するのも自由だ。

圭子 あなたが一番慎重ですわね。

杉村 フフフ……。

達三 きれいな月だよ、本当に明日は快晴だ(カメラを向けてシャッターを切る)

圭子 まあ。ハハ……。何年ぶりかしら、こんなこと。

杉村 今夜はゆっくりに眠れるなあ。さてと……食事にするか。(歩きかける)

犬が吠えて、自動車のブレーキ音が聞こえる。

一瞬——杉村と圭子が緊張する

杉村 (耳をすましながら) 帰つて来た。(断定ではない)

達三 そんなはずはない。

クラクションが二ツ。

圭子 旦那様だわ。

杉村 おそらく。(支関へ走る)

圭子 ノ旦那様だわ。(よろよろと歩くが、力がぬけてしまふ)

達三 姉さん/姉さん!

圭子 (意識をとり戻しながら) 帰つて来たんだわ。

達三 そんなはずはない。

圭子 ——私には、何も訪れなかつたわ(笑

「……もう十年も二十年も生きるわけでもないんでね、持ってる着物全部ほぐしてねえ。」

君枝 爺やさん、いただいでいいんですか？
爺や へえ、しまっておいてもしかたないもんだからねえ、どうぞ使ってやって下さい
君枝 あ、のう、？

爺や 静岡にねっ？ 末の娘がいますねえ
孫が生れたんで送ってやるうと思つとったんですがね、清水だったんですよ。艦砲（射撃）でねえ。——わしゃあ道楽者だったんで、四十の坂起してから生れた娘でね、一番可愛がったんですがねえ、へへ。
君枝 ——。

爺や へへ。そんなら離れへ案内しますか（荷物を持って、別室の方へ行きかける）
君枝 （足を止めて）何んという曲ですか？
爺や ああ、良平の歌ですか？
君枝 はあ？

爺や 幸次郎様の親友で良平という人がいたんですがねえ、ボルネオで戦死したんだそうですよ、——上手なピアノひきだったんだそうですよ、へへ——娘の亭主だけでも生きて帰ってくればと思つとったんですがねえ、昨日、（ふところから戦死通告を

出して見せる）へへ……（笑っているのか泣いているのかわからない）
君枝 ——（おもわず達平を抱きしめてしまふ）
う——達平がむずがる）

達平が泣き出す。
そこへ達三が茫然と入って来る。

主子の声 ノたけや、たけや！！旦那様がお出かけになるの、礼服を出してちょうだい。
爺や、爺やはどこ、爺や。
達三 （泣いている達平を抱きとってはおずり）

爺や（動かさず口の中で何かつぶやく）
君枝 どうかしたの？あなた。
達三（困惑している。つぶやく）アメリカが何故——。

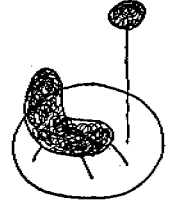
達平が一段と大声で泣く。
ピアノの音が続いている。

——幕おきる——
（一九七〇年一月）

■ あとがき ■

昨年五月、14号の編集後記で、京都の知事選の勝利のことを書きました。そして今、また、同じ京都の、市長選の勝利を、なにか、からだに火照りをおぼえながら書いています。西リ演の、とくに京都の劇団のなかまたち、ほんとうにごくろうさまでした。
激動の71年、はやくも、鏝せり合いの地方選挙で幕をあげました。このたたかいの中で、民主勢力の勝利とほくらの東西リ演の運動とが、どう結びつくか、ついたか。次の一八号で反映させましょう。
本号は、ごらんのとおり、頭初のプランも割付もそっちのけで、切がすぎてから、原稿がぞくぞく到来、やむない増頁となりました。うれしいといえはうれしいのですが、気の遠くなるほどの支払いになるので、誌代納入では格段のご協力を願わねばなりません。臨時定価もお許しを乞います。
この号より、従来発行所だった黒沢氏宅移転（新居は横浜市戸塚区上矢部一三二九 電話 045-811-3318）にともなう、経営局と一体となりました。（もも）

- 演劇制作スタッフ派遣 ● 舞台用器材貸出・販売
- 舞台照明操作・プラン作製・一式引受



組合や会社の文化祭・サークルの発表会のごとき
どんなご相談でも気軽にお申越しく下さい。
特にサークルのしごとは、サークルの身になって
いろいろな経験を生かし、経費の点もご便宜をは
かります。……………ぜひどうぞ!!

株式会社 第一ステージサービス

代表・川崎ひろし
東京都渋谷区代々木2-12・西原ビル TEL.03-370-0487(代表)

演劇会講 第一七号 一九七二年三月一日発行

定価 二〇〇円（送料四五円）

編集委員

- 萩坂桃彦・塚越松雄・黒沢参吉
- こばやしひろし・森本景文
- 藤沢 薫・大西 衛・猿渡公一

発行所 演劇会講 発行所

川崎市小田 四上二八一七
萩坂方
電話〇四四〇〇七七五